
盾の勇者の成り上がり
8
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス


盾の勇者の成り上がり
8
アネコユサギ
Aneko Yusagi


ラルクベルク
フィーロ
テリス
グラス
ラフタリア
岩谷 尚文
リーシア
風山 絆
人物紹介
盾の勇者の成り上がり 8


「ラフー!」
ピョンと煙の中から
何かが俺に向かって飛びかかってきた。
「な、なんだ!?」
咄嗟に受け止めて
飛びかかってきた物体を確認する。
すると俺に飛びかかってきたのは……
タヌキの様なアライグマの様な何かだった。

MFブックス

# 盾の勇者の成り上がり　8

アネコユサギ

## 目次





# プロローグ　無限迷宮

「――フミさん！　ナオフミさん」
水滴の音と俺を揺する奴の声で急速に目覚めていく。
「う……」
くらくらする感覚のなか、頭を振りながら起き上がって辺りを確認する。
「よかった。ナオフミさん」
するとそこにはリーシアがアヒル座りで俺を心配そうに見ていた。
「こ、ここは？」
「さあ……私にもよくわからないのですけど……」
辺りを見渡してみる。
石造りのじめっとした、なんとも陰惨な感じの場所だった。
小さな部屋のようにも見える。
俺が寝ていたところには藁が敷かれていた。
で、ボロボロのベッドが無造作に部屋の隅にあって……と見渡して鉄格子があるのに気付く。
「これ……牢屋みたいだな」
「ふぇええ……」
どうなってんだ？
立ち上がって更に状況を分析する。
鉄格子があって……どう見ても牢屋の一室にしか見えない。
えっと……なんでこんな事態になっているんだ？
寝起きで記憶が混乱しているな。冷静になるためにこれまでの事を思い出そう。
俺の名前は岩谷尚文。
現代日本ではオタク趣味な大学生だったが、気まぐれに出かけた図書館で見つけた四聖武器書という本を読んでいたはずが……気が付いたら本の登場人物である盾の勇者としてこの世界に召喚されていたのだった。

なんでも『波』という災厄から世界を救ってほしいという話だ。
夢のような状況に心を弾ませていた俺だが、異世界のメルロマルクという国の連中は自分達が召喚したにもかかわらず、俺に強姦の濡れ衣を着せて迫害し、無一文で追い出した。
その後、俺は色々と事件を解決し、最終的に盾の勇者を迫害する連中の陰謀をはねのける。
俺の強姦の冤罪は晴れ、冤罪に陥れた連中は罰せられた。
晴れて勇者として波に挑むことになったのだけど……次々と厄介な状況に巻き込まれ続けていたのだった。
まず、俺は四聖勇者の一人、攻撃することができない守りに特化した盾の勇者として召喚された。
四聖ということは合計四つあるわけで、他に剣、槍、弓がある。
俺と同じく異世界の日本から召喚された連中だ。
俺の本来居た世界である日本とは色々違う日本から召喚されたらしい。
あいつ等についてはそこまで思い出す必要はないか？
それでもあいつ等に関しての重要な部分というと、俺以外の勇者共は俺達を召喚したこの世界に似た世界観を持つゲームをそれぞれが経験しているとの話だった。
俺を召喚した世界は、確かにゲームのような要素が介在する世界だ。
Lvやステータスが存在し、魔物を倒して経験値を稼ぐとそのまま能力が上昇する。
もちろん魔法とかもあるし、魔物という現代社会の日本には存在しない生き物が闊歩する世界だ。
そんな世界で強くなるために戦うとなると、事前の知識は重要である。
だが、奴等は……まあ、隠し癖があるというか、他者を蹴落とすことに抵抗がない連中で、その情報を俺に教えようとはしなかった。
一応俺の誤解もあって、冤罪が晴れた後に行った勇者同士の話し合いで武器の強化方法を聞き出すことには成功した。
そこで明らかになったのは、ゲーム知識をもとに強くなって世界を救うという状況に酔っていた勇者共の姿だった。
あいつ等は四聖の武器の本来の強化方法を一部分しか理解していなかった。
互いの強化方法を知ったのに自分達の知るゲームでの強化方法しか実践せずに波に挑んでいたという間抜けな失態を演じていたのだ。
結果、勇者共の強化方法を全て実践した俺が、他の三人よりも頭角を現すこととなってしまう。
お陰で色々と窮地を脱することができたんだけどな。
ま、その後も色々な出来事があって、多大な犠牲は出すが同時に世界を救うとされる霊亀という化け物と戦った。
霊亀は一応、勇者とは別の方法で世界を救う役目を背負った守護獣だったんだよな。
俺以外の勇者共はその霊亀に挑んで敗北、行方知れずとなった。
で、そのツケが結果的に俺に回ってきて、俺達が霊亀に挑んだ結果、一度は霊亀の活動が停止した。
後は行方知れずになった勇者共を見つけて保護すればいいと、捜索していた俺達だったんだけど、事件は解決したわけではなかった。
霊亀が出現した当初、ローブを羽織った女性が俺の前に現れて、自分を倒してほしいと言い出した。
それがオスト＝ホウライという人型の霊亀の使い魔にして、勇者と敵対する先兵……そして霊亀本体の意志を担う奴だ。



当初はよくわからず、事情を尋ねようとしたところで姿を消した。
だから対処に遅れが出てしまった。
次に現れたとき、オストは頭を吹き飛ばされて死んだはずの霊亀が生きていると告げると同時に、俺達に霊亀討伐の依頼をしてきた。
オスト曰く、霊亀は何者かに操られて、本来の役割である『生き物の魂を糧にした波から世界を守る結界の生成』ができなくなってしまっている。
乗っ取られ役割を全うできない霊亀を早急に倒してほしいとの話だった。
その後は戦いの連続だったな。
俺達はオストと共に霊亀に挑み、体内に侵入……事前に調べた霊亀の討伐方法である頭と心臓の同時撃破をしてみたり、心臓に封印の魔法を掛けてみたりした。
結果的には失敗したが、オストの協力で霊亀を止めることのできる本体のコアがある場所に辿り着いた。
そこで霊亀を操っていたキョウ＝エスニナという研究者っぽい奴と遭遇した。
で……その霊亀のコアのある場所で行方知れずだった三勇者共も発見する。

無様にも霊亀に敗れてキョウに捕まっていたのだ。
キョウは霊亀のコアを操り、強力な霊亀の使い魔を使役し俺達を苦しめた。
その戦いの途中でグラス達が応援に駆け付け、俺達に味方する形で共闘することになる。
グラスというのは俺達が戦った二度目の波の亀裂から出てきた人型の敵……のはずだった。
なんでもこのキョウ……グラスの世界の本の眷属器という武器の所持者だとか。
そしてグラス達曰く、俺達の世界の守護獣を操って暴れまわるのは、グラス達にとってやってはならないことらしい。
俺達はグラス達と一時的に協力関係を築いて、キョウと戦った。
だが、霊亀のコアを支配下に置くキョウの攻撃は苛烈で、しかも霊亀の集めたエネルギーをその身に宿し、俺達を追い詰めた。
奴自身の防壁も堅く、このままでは敗れると思われたその時、キョウの悪行にキレたリーシアの攻撃が運良く決まり、その隙にオストが俺の盾に仕込んでいた奥の手が作動した。
霊亀の心の盾。
盾の専用効果にエネルギーブラストがあり、霊亀の頭が俺に向かって何度も吐き散らした必殺攻撃が放てるようになった。
そのエネルギーブラストを……俺はオストの願い通りに霊亀のコアに放って、キョウに支配されていた霊亀のコアの破壊に成功する。
コアが無くなり、不利を悟ったキョウはグラスの世界に繋がる穴を作り出して逃げ出した。
一応、こうして霊亀の暴走事件自体は幕を下ろした。
その代償は大きいものだった。
オストは……自分が死ぬことを覚悟して霊亀のコアを俺に破壊させるように願っていたのだ。
俺はその願いを聞き届けた。
本来、霊亀が討伐されると溜め込んだエネルギーで次の守護獣が目覚めるまで、波が来ないように時間を稼ぐ効果があるらしい。
そのエネルギー自体が奪われてしまったにもかかわらず、オスト自身が手をまわしたため、次の守護獣が目覚めることはなく、俺達の世界は正常に波が起こるようになっている。
で、俺達はグラス達と共に、こんな事態を起こした張本人であるキョウを追撃するためグラス達の世界へ向かった。
戦力外となった三人の勇者共はメルロマルクに預けてな。
のだけど……なぜか牢屋っぽい場所にいる。
「ラフタリア達は!?」
「わからないです。気が付いたらナオフミさんと一緒にここで横になってました」
むう……とりあえず現状を確認しなくてはならない。
「ん?」
俺は自分が今、装備している盾に目を向ける。
おかしい……意識を失うまで霊亀の心の盾だったはずなのだが、見覚えのない頼りなさそうな盾に変化している。
似たような感じのものだとスモールシールドだろうか？

**初心者用の小盾**
**能力未解放……装備ボーナス　防御力三**

なんだこれ？
知らない間に知らない盾が出てるぞ。とりあえず、一番強い盾に変えよう。
すると視界にアイコンが浮かんだ。

**変化条件を満たせません。**

はい？
何が起こったんだ？
ウェポンブックを呼び出して盾一覧を出す。





すると……なぜか視界に浮かぶ盾のアイコンのほぼ全てが暗くなっていた。
「な、何が起こってんだ!?」
盾の殆どが使用不可になってんぞ！
「あ、あの……」
リーシアが申し訳なさそうに手を挙げる。
すごく嫌な予感がするから聞きたくないが、現実逃避をしていても始まらない。
なんとなくだけど何を言いたいのか俺も察せられないわけじゃないし。
「聞きたくない気がするけど……なんだ？」
「ステータスの方を確認したのですけど、私のＬｖが１になってて……」
う……イヤな予感が的中した。
確かリーシアのＬｖって68はあったはずだぞ。
それがどう間違って１になってんだ。
ありえるのは意識を失っている間に龍刻の砂時計の機能、Ｌｖリセットで１に戻されてしまったとか？
で、非常にイヤな予感がしながら俺も恐る恐る、自分のステータスの方を確認した。

**岩谷尚文**
**職業　異界の盾の勇者　Ｌｖ１**
**装備　初心者用の小盾（伝説武器）　○▼◆×二式**

「ギャアアアアアアアアアアア！」
「ふぇえええええええ!?」

俺の絶叫に合わせてリーシアも叫び声を上げる。
俺もＬｖ１になってんじゃねえか！
全ての苦労が水の泡どころじゃない。
これって下手をしたら人生が詰んだ状況だぞ！
最悪だ！
ついでにパーティー機能の方も確認する。するとパーティーが機能していないのに気付いた。
ラフタリア達の名前が消えている。
あるのはリーシアだけで他はない。
奴隷紋と魔物紋の方も……。
奴隷紋というのは人を魔法の紋様で隷属させて、命令に従わないと罰を与える紋様だ。
ラフタリアはある出来事で奴隷ではなくなったのだけど、奴隷以外を信用できない俺の信頼を得るために奴隷に戻ってくれた女の子だ。
元々は俺が濡れ衣を着せられ、人間不信に陥っている時に購入した奴隷の女の子だ。
亜人という異世界独自の人間によく似た種族の子で、耳と尻尾がタヌキのようなアライグマのような形をしている。
確かラクーン種とかいったか。
外見の年齢は……一八歳くらいかな？　実年齢は幼いんだけど、亜人はＬｖの上昇に合わせて戦いに適した外見に急成長するのだ。
栗色の長い髪に、きめ細かい張りのある肌、そして整った顔立ちをしていて、面食いと思しき槍の勇者の元康が美少女ランキングの中に入れるほどの逸材だ。
こう……俺は元々オタクだから、それに合わせて表現するならアニメやゲームとかで出てくる美少女に負けず劣らずの外見をしているというのがしっくりくるな。
俺が最初に与えたのが剣だったせいか、剣が得意武器で、攻撃できない俺の代わりに敵を屠る役割をしてくれている。
性格は真面目で、俺がおかしなことを言うと正してくれる子だ。



世界で最初に起こった波で被害にあった村の出身で、波に関しては色々と因縁がある。
生まれ故郷と家族を失い、奴隷として捕まって色々大変な目にあっていたとの話だ。
その後、俺に買われてこうして一緒に戦う関係にまでなった。
今では俺の頼れる相棒の女の子だ。
殆ど使っていないが、奴隷紋はどこにラフタリアがいるのかを教えてくれることもできる。
一応、使ってみると……ん？

**奴隷紋観測範囲外です。**

と出ている。ついでにフィーロの方も確認しよう……。
最初の波を乗り越えた時にもらった援助金で挑戦した、奴隷商の店にあるたまごガチャ。その景品である卵から孵化したのがフィーロ……馬車を引くのを喜びにしているフィロリアルという魔物の女の子だ。
フィロリアルというのは……なんて説明したらいいかな。
大きな鳥型の魔物で、普通のフィロリアルはダチョウをもう少しがっしりさせた感じの生き物だ。
だが、フィーロはその上位種というか女王種？　変種とも言うのかな？
フィロリアルクイーンというフィロリアルのボスみたいな魔物だ。
外見は羽毛が多くてフクロウのようなペンギンのような体型だ。
色は白と桜色をしているな。白をベースにして所々の模様が桜色だ。で、それ以外に人間に近い姿に変身することができる。
この姿を一言で表現するなら天使……と言うのが一番近いと思う。
金髪碧眼で、髪型はロング、くりくりっとした無邪気そうな瞳と、天真爛漫な性格を表した純真無垢な一〇歳くらいの羽の生えた子供だ。
髪もサラサラだし、ラフタリアに負けず劣らず艶のある肌をしているし、顔も良いな。
金髪碧眼の天使のような女の子と言われて浮かぶだろうイメージそのままの容姿をしている。
服装は……白を基本とし、青い部分がアクセントのワンピース。

得意武器はツメだ。
人型時は両手にツメを装備し、魔物の姿の時は足に付け、と時と場合で戦い方を変える。
戦闘の面だけで言えばラフタリアよりも能力は高いだろう。
フィーロのお陰で窮地を脱したことはたくさんある。
で、やはり魔物紋も同様の項目が出て反応しない。
どうやらラフタリア達の所在の方角すらも特定することができないようだ。
いるのはリーシアだけ……。
リーシアは元々弓の勇者である樹の仲間だったんだけど、樹達に濡れ衣を着せられて追い出された経緯がある
……頼りない女の子だな。
髪型は三つ編みで、どちらかというとインドア派の文学少女みたいな奴だ。
現に俺の仲間になってからも、役に立つのはどちらかというと知識面の方が多い。
だが、本人は戦闘でも強くなりたいと言うのだ。
大変な状況を樹に助けてもらってから正義の味方に憧れて樹の仲間になったらしい。
その後は散々だけどな。
俺と同じく濡れ衣を着せられて仲間から追い出された。その実情は樹自身の八つ当たりだ。
波でリーシアが樹よりも活躍して評価されたのが気に食わなかったのだろう。
顔の作りは、ラフタリアにも負けないほどだ。
女好きの槍の勇者、元康が評価した美少女ランキングにランクインしているから相当だ。
ただ、実年齢と外見が釣り合っていない。
まあ、俺の仲間になる連中は大抵、そうなんだけどな。
リーシアの年齢はパッと見じゃ一四歳前後……だが、本人の話では一七歳らしい。
要するにやや幼い印象を受ける、頼りない女の子がリーシアだ。
なのだけど、現在のリーシアは相当……おかしな格好をしているな。
なにせ、魔物の姿のフィーロによく似た見た目の着ぐるみを着ているのだ。
本人曰く、泣いていても着ぐるみならバレないからいいとか……。



そして意外なことに、俺達が戦闘技術の指南を受けた時の戦闘顧問である変幻無双流という流派のババア曰く百年に一人の逸材らしい。
確かに、時々それに相当する会心の一撃を放つ時がある。
そのお陰で前回は窮地を脱することができたんだからな。
ただ、普段は……あんまり強くない。
って、やばいじゃないか！
ここが牢屋だとしたら俺達、捕まっているってことだろ。
ということは、キョウに囚われたってことじゃないか。
どんだけ最悪の状況なんだよ！
「ここから出せー！」
檻の扉に手を掛けて揺する。
牢屋にぶちこまれるなんて生まれて初めての経験だ。だからといって感動とかするわけないし、正直言って入りたくない。
異世界に来て犯罪まがいの事をした自覚はあるが、入ってなるものか！
俺自身の身の潔白は証明されてる！
まあ……見知らぬ異世界だから運悪く気を失った俺達をとりあえず牢屋に入れたとかだろうか？
Ｌｖ１だけど抵抗くらいしてやる！
アクセサリー作りで鍛えた技術で檻の鍵を開けられないだろうか？
そう思いながら牢屋の扉を揺すったらキィッとアッサリ開いた。
「あれ……？」
「ふぇえ？」
どうやら鍵は掛かっていなかったようだ。
これで牢屋の意味があるのか？
とは思ったが、閉じ込められているよりはマシだな。
「と、とりあえずここから出て辺りを探索するぞ。ラフタリアやグラス達がいるかもしれない」

「は、はい！」

俺達は足早に牢を出て石造りのじめじめした牢獄内を探すことにした。

隣の部屋は……なんか生活しやすいように色々とアレンジがされていた。

ベッドは分厚くしてあって、ソファー完備、他に食料を貯めているらしき袋やかまどがある。

石造りの牢獄の一室を加工した、とかそんな感じなのだろうか？

ラフタリア達はいないみたいだな。

「ラフタリアー！　フィーロー！　いるなら返事しろー！」

と、叫んでみたのだけど返事がない。

少なくとも声の届く範囲にラフタリア達はいないようだ。

「よし、俺が先頭に立つからリーシアも注意してついてくるんだぞ。今はお前が頼りだ」

「は、はい！　がんばりましゅ――」

噛みやがった。ああもう……不安が倍増したぞ。

「うーむ……」

石造りの牢獄は無人なのか誰とも遭遇しない。

牢獄というか迷宮のような錯覚を覚えるな。見知らぬ建物の中というのは。

何かおかしい。迷宮ならば魔物とかに遭遇してもおかしくないが、今のところ幸いにして遭遇はせずに済んでいるな。

で、道なりというかザックリと探索をしていると……行き止まりだと思った場所に七色に光る変な扉を見つけた。

妙なアーチ状に形作られ、こう……混ざりかけの色をしたシャボン玉の膜みたいなものが波打っている。

「な、なんですか？　これ」

「わからん」

ただ、俺の知るゲームとかだと別の場所へ移動するためのオブジェクトだったりするんだけど、異世界に来て初めてこんなのを見たな。

「とりあえず、脅えてても何も始まらん。入るぞ」



「ふぇえ……」

「ほら、なに脅えてんだ。さっさと行くぞ」

リーシアがびくびくしてアーチに入るのを躊躇っていたので、強引に手を繋いで引っ張った。

で、アーチを潜った先を見て、俺は絶句してしまった。

「な――」

青い空、かんかんと照りつける太陽。そして白い砂浜に海……。

振り返ると先ほどの門がある。

「ふぇええ！　どうなっているんですかこれは！」

「俺だってわかんねえよ」

ただ、どうやら空間移動が可能な不思議な場所だと思った方がよさそうだ。

「驚いていたって始まらない」

海とは反対側を向くと密林と砂浜伝いに草原があるのに気付く。

とりあえず、他に行けそうな場所もないし草原の方へ行くしかないだろう。

今のところ、ラフタリア達の反応もないしな。できる限り急いで動いた方がいい。

俺達には時間がないんだ。キョウへ早く制裁を与えねばならない。

「驚きの連続だが、行くしかないだろ。それとも来るかわからない助けを待つのか？」

「ふぇえ……」

俺は嫌だな、そんな他力本願。

迫害されて無一文で放り出された時、俺を信じてくれた人はいても無実を証明できた奴なんていなかったんだ。

待つよりも行動で自由を勝ち取りたい。

「行きます。行きますから置いていかないでくださいよぅ」

俺達は草原の方へ向かった。

見慣れない生き物がこっちに敵意を持って近づいてくるのを確認した。

ここがどんな場所なのかわからないが、基本的な世界の仕組みに変化はないようだ。

要するにステータス魔法などで戦えるのだろう。
Ｌｖ低下のせいなのかわからないが今まで使っていた盾が殆ど使えない現在、盾自体の能力で耐えるのは難しい。
だが、今まで俺が解放していた盾の技能やステータス付与は効果を発揮している。
普通のＬｖ１よりは遥かに強いはずだ。
しかも樹から教わった強化方法にある魔物の素材を入れてステータスＬｖを上げるというやつは全ての盾に掛かるものであるから、その分俺の能力は上昇している。
だから……まあ低Ｌｖの魔物相手なら戦えるはずだと俺は読んでいる。
で、草原の茂みにいるのはなんか白っぽい角ばった何か。
凝視することで名前はわかる。

**ホワイトダンボル**

見覚えのない魔物だ。
俺に向かって飛びかかってくる。
咄嗟に手を前に出して捕まえた。
大きさは俺の頭くらい。四角形の……白い……段ボール箱？
俺が掴んだのが気に食わないのか、パカッと口のようなものを開いて俺に喰らいついてる。
幸いにもダメージを受けずに済んでいる。
見覚えのない魔物だが……似た魔物に覚えがあるな。
「バルーンみたいな魔物だな。リーシア、こんな魔物見たことあるか？」
「ふぇ？　は、初めて見る魔物です。こんなの本でも見たことないですよ」
む、博学のリーシアが知らないとなると、ますますここが怪しげな場所だということになるぞ。
リーシアは知識という点では誰よりも信用できるからな。
「とりあえず雑魚だ。ほら、掴んでるからトドメを刺せ」
「は、はい！」

リーシアがホワイトダンボルを剣で突く。
ボスッと音がしてホワイトダンボルは折りたたまれたような形で目をＸ字にして動かなくなった。
変な生き物だな。
反応がフィールド系のネットゲームのそれとまったく同じだ。
まあ、それを言い出したらバルーンも似たようなものだけどさ。

**ＥＸＰ15獲得。**

あまり強くないのにバルーンより遥かに経験値があるぞ。
「少し硬かったです」
「まあ、お前の力じゃな」
お前、Ｌｖ上がっても初期能力のままだもんな。
リーシアはＬｖの割にはステータス高いけど。
そういう意味ではバルーンよりは強い魔物なのかもしれない。
倒したホワイトダンボルを盾に吸わせてみた。
俺が最初に倒した魔物であるオレンジバルーンと同じ感じでステータス付与系の盾になるみたいだな。

**初心者用の白い小盾の条件が解放されました！**

**初心者用の白い小盾**
**能力未解放……装備ボーナス　防御力二**

うん、完全にバルーンで出た盾と同じ規格のものと見て間違いない。
盾の防御力とかその辺りの能力も毛が生えた程度なのが全く同じだな。
「とりあえず、俺が動きを止めるからリーシアはトドメを刺せ」

「わかりましたぁ！　ふべっ！」

あ、転んだ。

ドジっ子リーシアと二人で狩りをするのって、幼い頃のラフタリアと一緒に魔物と戦ったのと、どっちが安全に戦えるだろうか？

そう思いながら俺達は草原を歩いた。

まあ、探索とＬｖ上げの合間に見慣れぬ薬草っぽい草を収穫して回ったわけだけど。

ただ、薬草類は俺達の世界にもあるようなものが結構見つかった。

リーフシールドと同じ規格の盾も出たな。

名前は木の葉の盾って、別に木の葉でもない薬草でほぼ同じ技能っぽいのが内包されていたみたいだけど……技能が同じだからかステータス付与に切り替わっている。

で、気付いたんだが、最初のダンボル系以外に少し強めの魔物と戦ったんだけど、カタカナの名前の魔物があまりいないようだ。

ウサビルみたいな魔物が、頭身兎とかそんな名前だった。

ついでに、手に入る経験値が若干多めだ。

現に草原を探索して数時間で俺のＬｖが９まで上昇し、リーシアに至ってはＬｖ16まで上がった。

倒した魔物をマメに解体し、ドロップを分析しながら俺達は数時間戦い続けた。

それで俺のＬｖも順当に上がり、今までの盾も若干だけど使用可能になってきた……のだけど主にシールドと付く盾が歯抜けのように使用できない。

何が原因なのかよくわからん。

ソウルイーターシールドやキメラヴァイパーシールドは使用不能かもしれないな。

「はぁ……はぁ……っ、疲れてきました」

リーシアが肩で息をして俺の後を付いてくる。

「少し休憩するか」

こんな所でも意外といるもんだな魔物って……いや、こんな不思議空間だからこそか？

座って休憩をとる。



喉が渇いてきたな……。

水筒とか持ってきたわけじゃないからどこかで飲み水の確保をする必要がある……か。

薬草類は癖で採取しているから自然と嵩張ってきた。

薬研とか調合機材はさすがに持ってきてないから盾で調合するしかないか。

と、盾に素材を入れて、知っているレシピにある組み合わせで調合を開始させる。

代用が可能なようだから作れるようだ。

問題は他の……知らない薬草の調合か。

未知の薬草がどのような効果があるのか研究者なら心躍るのだろうが、生憎俺はそこまで躍らない。

「どうにか、戦えていますね」

考え事をしている俺に沈黙が耐えきれなかったのかリーシアが声を掛けてきた。

「そうだな。そんなに強い魔物じゃなくて助かった」

「私も少しは強くなりましたよね？」

「……」

Ｌｖが15上がったのにステータスが誤差の範囲しか上がっていないのを指摘した方がいいのだろうか？

などと返答に困っていると、僅かに川のせせらぎが聞こえてきた。

ああ、川もあるのか。

そりゃあ海があるんだから川もあるよな。

ちょうど喉が渇いていたから行くのも悪くはないな。

俺が川のせせらぎが聞こえる方を指差すとリーシアが意図を察して頷いた。

やはりお前も喉が渇いていたか。

せせらぎを頼りに歩いていくと川辺に辿り着いた。

少し離れたところに木で作られた橋が架かっているのが見える。

ここは一体どんな場所なのか全然わからない。

生水を飲んでも大丈夫か、先に目利きで判定する。

……大丈夫そうだな。
手で掬って喉を潤す。
「ふう……」
リーシアも同様に飲んで人心地が付いたようだ。
結構、海岸から離れたところまで来てしまったな。
メルロマルクの近くにある川辺で野宿していたことを思い出す。
とりあえず戦えはするが不安が拭えないな。今の俺はそこまで強くない。
Lvが1に戻った挙句、殆どの盾が使用不能という最悪な状況だからな。
いつ何が起こるかわからない状況に安心などできない。
どちらにしても盾の解放と強化をしていかないといけない。
Lvが原因なのか、それとも別の要素が絡んでいるのかわかっていないから、安易に強化していいか悩みどころだ。
割とすぐに良い盾が出て意味がなくなったら損だ。
とはいえ、少しは強化しておかないと危なそうでもある。
なんて考えていると川からザバッと水しぶきをあげて俺達の近くに魔物が姿を現した。
「河童？」
そう、そこには緑色のカエルのような体色をして甲羅を背負い、頭に皿を載せて水かきのある河童がいたのだ。
体形は人に近い。日本の妖怪絵巻に載っているような姿で二足歩行で歩いている。
「クア」
どうも俺達に対して敵意があるようだ。
河童の外見からして俺を召喚した方の世界基準でいうところの亜人とか獣人のカテゴリーに入るのか、それとも魔物に入るのか判断に困る。
盾の翻訳機能で、人相手なら言葉が通じるはずだが、どうなんだろう？
ぷくーっと喉を膨らませて攻撃の態勢に入っているのは一目でわかった。
「エアストシールド！」



高圧縮された水を俺達に向かって放ったので即座にエアストシールドを展開した。
一枚の盾が俺達と河童の間に出現し、水鉄砲を遮る。
水鉄砲が命中するとエアストシールドがパキンと音を立てて破壊された。
俺自身があんまり強くないのが問題だな。
盾の強化も中途半端だし……というかこの河童、地味に強そうだな。
まあ、敵意があるなら人間だろうが魔物だろうが関係ない。
次弾発射の準備とばかりに大きく息を吸おうとしたので、その間に駆け寄る。
「クア！」
ツメで俺に向かって切りつけてきた。
盾で弾くがもう一本の腕が俺に向かって伸びてくる。
「セカンドシールド！」
ガツンと二枚目の盾……セカンドシールドを展開してツメを受け止め、すぐに河童の後ろに回り込んで羽交い締めにした。
「リーシア！」
「ふぇえ!?」
あー……リーシアの奴、いきなりの状況でうろたえてるな。
「早くしろ！」
「は、はい！」
「クア！」
ぷくーっと河童はリーシアに高圧縮した水を吐き出そうとする。
させるかっての！
ぐいっと方向を無理やり変えて狙いを外す。
河童は煩わしそうに暴れるが、後ろから押さえ込む俺に何もできそうにない。
「何もたついてんだ！　さっさとやれ！」
「ふぇえええ！」

リーシアが剣で河童の腹を突くのだけど、思いのほかタフなのか一向に倒れる気配がない。
『力の根源たる盾の勇者が命ずる。理を今一度読み解き、彼の者に全てを与えよ！』
「ツヴァイト・オーラ！」
リーシアに援護魔法を唱え、ガクッと俺の魔力が減る。
これを唱えずに勝ちたかったがリーシアじゃどこかで限界を迎えるか！
というところで背後からザバッと音がして痛みが走る。
「ぐ……」
二匹目の河童か？
見ると、やはり新たにもう一匹の河童が、俺に向かってツメで切り掛かっている最中だった。
いってぇな。地味に攻撃力があるじゃねえか。
「リーシア！　早く仕留めろ」
「わ、わかっているんですが、凄く硬くて全然刺さらないんですぅ」
リーシアが思い切り河童の胸を剣で突き刺そうとするのだけど、ぬるっとずれるように剣が弾かれる。
援護魔法を掛けてこれって、もしかして戦闘力が高めのやつに遭遇したか？
い……河童がザシュザシュと俺の背中を引っ掻いて血が出る。
やばいんじゃないか？　痛くて羽交い締めにしている方に回した手が緩みそうになる。
「は、早くしろ！　もたない！　無理なら早く逃げるぞ！」
こんなの相手にしていたら命がいくつあっても足りないぞ！
間違いなく俺達のＬｖが足りないのが原因だ。
ただ……逃げきれるかどうか正直怪しいな。
あの水鉄砲は相当な威力がありそうだし、逃げている最中に後ろから狙い撃ちにされる。
いきなり大ピンチだ。最悪の事態が展開されつつある。
こんなところで終わる……のか？
諦めるつもりはない。考えろ、何か手段はあるはずなんだ。
そこに三匹目の河童が川の中から出現し、俺達を取り囲むように近づいてくる。



「ふ、ふぇぇぇぇぇぇ！」
く……万事休すか。これじゃあ逃げることすらままならない。
その時――
リーシアに近づきつつあった河童の首が唐突に切り裂かれた。
「え？」
「血花線！」
覚えのない声が聞こえたのと同時に何かが一閃して、俺を後ろから攻撃していた河童、そして俺が羽交い締めにしていた河童がバラバラになって崩れ落ちた。
な、なんだ？
すごく不思議な芸を見せられたかのような感覚があった。
……今のはスキルか？
スキルとはエアストシールドみたいな、特殊な力を持った勇者だけが使える技のことだ。
グラス達も使えるみたいだから、完全に当てはまるわけじゃないがな。
他にも魔法や技を使う際にもスキルと言ったりするから、今のがスキルかどうか判別に悩む。
「大丈夫？」
まず気の強そうな瞳に目がいった。
目の色は濃い目の茶色。肌は……俺と同じ肌色だな。
男の肌という意味ではなく、人間の肌という意味で俺と同じなんだ。
で、その肌は健康的な色合いをしていて、ほんのり赤みの入った明るい白。張りもありそうだ。
顔立ちは整っていて、年齢は一二、三歳くらいだろうか？
小学校高学年、あるいは中学校に入学したばかりの中学生くらいの身長をしている。
表情や雰囲気から、見た目の年齢よりは歳を取っているかもしれない。
長い髪をツーサイドアップにしており、気の強そうな雰囲気とは違い、装いは女らしい。
服装はやや擦り切れた羽織を肩に掛けて、ゴシックドレスを内側に着込んでいるようだ。
胸は……ゆったりとした服ということを差し引いても、無い。





男か？　とは思うのだが、ツーサイドアップにした髪の男は気持ち悪いし顔の作りは完全に女だし、柔らかな感じがするから男ではないだろう。

腰には……なんだろうか？　棒……じゃないな。釣竿を下げている。

顔はかなり良い方だ。若干気が強そうだが女らしい感じの子だ。

強いて言うなら男の娘とか……そんな感じの雰囲気がある。

年齢不詳気味だな。

で、なんか空気というか、なんとなく日本人を連想する。

俺の気のせいか？

「少し目を離した隙にいなくなって、こんなところまで来るだなんて……下手したら死んでたよ？」

どうやら敵ではないようだが、味方であるかどうか怪しい。

味方面していざという時に裏切るなんてよくある話だからな。

魔力が心許ないので傷薬を出して傷を治した。患部に塗るだけで傷がみるみる治っていく。

こういう時は異世界だというのを感謝しなくちゃいけないな。

現代日本だったら完治するのに時間が掛かっただろう。

「空から君達が落ちてきたのを保護して運んだんだけど……」

「お前は何者だ？」

いきなり現れて敵を倒してくれたのは確かに助かったけれど、そこは意識しないといけない。

恩着せがましく近づいてこられてもかえって疑いたくなる。

「オレのこと、疑ってる？」

「そりゃあそうだろ。いきなり牢屋に居て脱出した後、強力な魔物相手に苦戦しているところをヒーローみたいに現れたら狙っていたのかと思いたくもなる」

「あー……うん。そう思われても不思議ではない……かな？」

ボリボリと面倒そうに頭を掻いて目の前の奴は答える。

なんなんだコイツは。コイツが俺のＬｖを１にした犯人なんじゃないのか？

警戒しながら俺達はジリジリと戦闘態勢を取る。

「とりあえず自己紹介をしようか。せっかくここで出会えた人なんだし、少しくらい話をしようよ」

「人に名を聞く時は、まず自分から名乗るもんだろ」

「……まあ、そうだね。じゃあオレからだね。オレの名前は風山絆、四聖、狩猟具の勇者だ」

「……は？」

今、コイツはなんて言った？

四聖、狩猟具の勇者？

四聖といったら剣、槍、弓、盾の四つで四聖だろ？

「こっちは名乗ったんだから答えてよ」

俺が呆気に取られていると絆と名乗った女は俺達に自己紹介を促す。

ここは素直に答えて反応を見た方がいいな。

「俺の名前は岩谷尚文だ。お前と同じく四聖、盾の勇者だ」

「……は？」

絆は俺と全く同じ反応をした。

きっと先ほどの俺もこんな表情をしていたんだろう。

「なんだよ」

「いや、四聖で盾なんてあった？　聞いたこともないんだけど」

「俺だって狩猟具なんて知らねえよ」

「うーむ……」

腕を組んで絆は考え始める。

が、顔を上げてリーシアの方に目を向ける。

「次は君」



「ふぇ!?」

「リーシア、一応自己紹介をしろ。敵ではなさそうだ」

少なくとも今は、な。

「は、はい。私の名前はリーシア＝アイヴィレッドと言います」

「そっちは勇者とか付かないんだね」

「ああ、一応俺の仲間だ」

で、絆はリーシアを何度か見た後、うんうんと頷く。

「で、尚文……呼び捨てでいいかい？」

「ああ、俺も絆って呼ぶ。で？　なんだ？」

イントネーションも完璧だな。

名前の雰囲気から俺もなんとなく察した。

確か四聖は召喚される勇者限定だそうだから……。

「日本から召喚された勇者で間違いなさそうだね」

「……ああ、非常に不服だけどな」

「何が不服なのかは知らないけど、四聖で盾ってのは聞いたことがないよ。考えられるとしたらオレの知る異世界とは別の異世界の四聖とか？」

「……おそらくそうだろうな」

俺はグラス達の世界へ移動したはずだった。

となれば考えられるのは、目の前の絆という女はグラスの世界の四聖である可能性だ。

「どういう因果で異世界の勇者がここに来たのかは知らないけど……ツイてないね」

「なんでだ？」

「ここは牢屋なのは間違いないけど、普通の牢よりもタチの悪いものなんだよ」

「意味がわからん」

「ここは無限迷宮という名の牢獄。簡単に言うと見張りとかがいなくても、入った者は脱出することのできない……特殊空間だよ」

脱出不可能の特殊空間？

……フッ！

「なんで笑ってんの？」

絆が眉を寄せて呆れたように呟く。

これが笑わずにいられるか？

「いや、強引に異世界に召喚されて帰る術を模索している俺からしたら脱出不可の空間なんてどこも変わらないと思ってな」

俺からしたら盾の勇者として召喚され、帰りたくても帰してくれない異世界こそ牢獄のような場所でしかない。ならば、絆のいう特殊空間など、まさしく次元の壁をぶち抜いてでも行かねばならない場所に他ならない。

とにかく、まずはここがグラス達の世界であるかどうかを特定しなきゃいけないかな。

だってそうだろ？

グラスの世界が異世界なら、他に異世界がないという保証があるか？

「ずいぶんと拡大解釈をしてるね」

「お前は異世界ライフを満喫してるとかそういうタイプか？」

三勇者と同じく四聖を名乗るのなら、ありえなくはない。

だが、絆は肯定も否定もしなかった。

「別に……そういうわけじゃないけど」

サッと目を逸らすその動作に若干の興味が湧いた。

俺の知っている勇者共とは反応が違うのも好印象だ。

アイツ等、夢が広がる異世界ファンタジーヒャッハーって感じだったからな。

それと比べると絆の反応は地に足が着いているように思える。

だが、今はそれどころじゃないか。

まずはラフタリア達の安否とグラス達がどこへ行ったかを確かめるのが先決だ。

そして最終目的は世界を滅茶苦茶にしたキョウに制裁を加えることだ。

絆は腰に細長い包丁を下げている。



あれって……うん。多分、鮪包丁だ。

使ったことはないが見たことがある。

狩猟具の勇者と言っていたが、どんな武器なんだ？

包丁が狩猟具？　解体とかじゃないのか？

考えられるのは狩猟具というカテゴリーの全てを使いこなせる勇者？

範囲広いな。どこかの守ることしかできない盾より有能じゃねえか。

「どうしたの？」

「いや？」

絆は河童共の死骸を見つめてから眉を寄せて首を傾げる。

「おかしいなー……魔物を倒したのに経験値が入らなかったんだけど」

「……他の四聖の勇者が近くにいるからじゃねえの？」

「そうなの？」

コイツ、勇者同士の反発現象を知らないのか？

四聖は近くにいる状態で戦うと経験値が入らない。

だからこそ、勇者達はバラバラに仲間を募って戦うわけだしな。

波の時は経験値度外視で魔物退治をするのだから、気にする必要はない。

そのことを俺は説明した。

「へぇ……そういう現象もあるんだ？」

「異世界の四聖は勇者同士で顔合わせしたことがないのか？」

「オレはないなー……」

羨ましい限りだな。

四聖が一堂に会して召喚されたとかじゃないのかよ。

なんて見ていると絆が何やらくすくすと笑い始めた。

「なんだよ」

「いや、何年ぶりかで人と話をするとなんか色々と楽しくなってきちゃってさ」

「はい？」
今、なんて言った？
何年ぶりってコイツ、人と話すのが苦手とかそんなタイプか？
機会がないから、輪に入れず喋れないとかそういうの。
どう見ても遠慮とかするようには見えないんだが……。
「そりゃあそうだろ？　オレがここに入れられてからどれくらい経ったかな……年単位くらいになってからは数えると虚しくなるからやめてたんだ」
「……お前、波で召喚とかされたら出られるんじゃないのか？」
そう、災厄の波が到来する時、四聖勇者は登録していた龍刻の砂時計の力で波のある地点に強制的に召喚されるという厄介な問題がある。
そのせいで戦いたくもないのに戦わざるを得ないわけだしな。
「波？　波って異世界で起こるとか言われる伝承のやつ？　そんな力があるんだ？」
「波に参加したことがないのか？」
「だから、この空間じゃあ外界と隔絶してるからよくわからないんだって」
絆が鬱陶しそうに答える。
俺はおもむろに元の世界で動き始めていたはずの砂時計のアイコンを呼び出した。
すると……。

一一：一一

と、残り時間の表示が消えている。
え？　もしかしてこの場所にいると波で召喚されることがない？
脱出不可能で波が起こった時の召喚で抜けることもできない……どんだけ厳重な隔離なんだ？
「まあいいや、コイツどうする？」
絆が河童の死骸を指差す。



「素材としてか？　解体でもするのか？」
俺が河童の死骸に関しての問いに答えると絆は頷く。
「オレはとっくに素材にしてるし、ドロップ目当てにしてもしょぼいからさ」
「じゃあ俺が頂いておくか」
河童の死骸を盾に収める。
何か解放条件を満たせたようだけど、Ｌｖが足りずに変化させられない。
ドロップもあんまり良いものじゃないけど、無いよりはマシ……か？
「あの……」
俺は申し訳なさそうにしているリーシアに目を向ける。
……ああ、リーシアは勇者じゃないから経験値入るな。俺が知る世界と同じならだが。
「パーティーの編成も同じか？　俺の知る世界とは色々と違いがあるようだけど」
「そうなのかな？　念のためにパーティー作ってみようか」
「俺の知るのだと四聖勇者同士は経験値が入らないが、リーシアは勇者じゃないから仲間扱いで経験値入れてやってくれないか？」
「ん？　ああ、そうだね。無駄になるならそれでいいね。どっちがリーダーで編隊飛ばす？」
絆が聞いてきたので、俺が手を挙げる。
意図を察したようなので、絆にパーティー勧誘を飛ばした。
どうやらこの辺りは異世界でも違いはないみたいだな。
絆が仲間として加わって、一応は経験値がリーシアに流れるようになった。
「とりあえず、ここで立ち話はどうかと思うから安全な場所まで行こう」
「わかった」
絆の案内で、俺達は一度来た道を戻る羽目になった。
ちょうど砂浜に出たあの場所にだ。
「ここなら比較的安全かな。海の方へ行って水の中を呼吸できる装備で海底を歩けば、それはそれで迷路みたいになってるし、ここは島なんだけど中の方へ行けば密林が迷路みたいになってる。草原の先はまた密林だよ」

アッサリと言うもんだな。

とりあえずは……ローグライクと言われる類のゲームみたいな場所に押し込まれてしまったと思えばいいのか？

「不思議な迷宮とか思った？」

「まあ……」

「そんな甘いもんじゃないけどね。脱出できないようにできてるらしいから」

「なんでそんなことを知ってんだ？」

「ここに入れられる前に聞いたんだ。一度入れられたら二度と出られない。異世界に等しい迷宮なんだとさ。これでも長いことかけてかなり深くまで行ったんだ」

絆が深く溜息をついて俺に愚痴る。相当ストレスが溜まってるな。

「オレが調べられる範囲じゃ……出れない」

ということで、どうやら俺はグラスの世界に行ったはずが、とんでもない空間にリーシアだけを連れて迷い込んでしまったらしい。

「まあ、寝るには牢屋の方がいいけど、話をするにはここら辺がいいよ」

絆は砂浜の端にある海の家みたいなところを指差して歩き出す。

「ああ……」

少し休憩を取るには良さそうだ。

どれくらい意識を失っていたかわからないが、連戦の疲れがどっと来ているような気がして、抵抗したいと思えなかった。

「ふぇえ！」

リーシアは未だに驚きの声を上げている。

いい加減、現実を受け入れろっての。

「しっかし……なんていうか尚文達の格好、凄いね」

海の家にある煤けた感じの椅子に座って絆が俺を凝視して言う。

俺もそう思っていたところなんだよな。

蛮族の鎧+1?が霊亀との戦いでボロボロになってしまっている。



ステータス魔法で再確認すると、どうやら鎧は文字化けしてしまっているようだ。

徐に鎧……破損が酷すぎるから既に鎧じゃないが……を脱いでみる……ステータスに全く変化がない。

どうやら機能していない。

武器屋の親父が作ってくれたものだけど、役に立たないのなら外しておくか。

「リーシア、お前の着ぐるみはどうなんだ？」

「ふぇ!?」

リーシアが装備を見直して、驚く。

「ふぇえ!?　何かおかしな表示になってます」

ふむ……どうやら破損したせいで効果がないというわけではないようだ。

となると世界を渡った時の影響と考えるのが無難か？

霊亀の中で遭遇した時にグラスが似合わない格好をしていたのはそのせいかもしれない。

「とりあえず脱げ。役に立たないものを着ていても意味がない」

「わ、わかりましたぁ」

俺の命令に従ってリーシアも着ぐるみを脱いで普通の格好になった。

「で？　絆、お前はどうしてこんな空間にいるんだ？」

「質問に答える前にそっちの理由を教えてよ。オレばっかり答えてちゃ不公平じゃない？」

む……確かにそうだな。

絆だって俺達の事情を知りたいからこうして答えているのだろうし。

「まず何を話せばいい？」

「ここに来るまでの経緯かな。なんでこんな所にいるのか知りたい」

まあ、四聖の勇者ならその辺りに協力してくれるかもしれないから話をして損はない……のか？

でもな……俺の知る四聖勇者って三勇者だろ？

あいつ等どいつも話を聞かなかったし……とはいえ、今のＬｖじゃ碌に戦えもしないんだから話をするしか方法はないか？

コイツが襲い掛かってきたらやられる。

できる限り機嫌を損ねないように顔色をうかがって話をするか。
「まずは……」
俺は自分が召喚された経緯から始め、異世界で冤罪に嵌められその冤罪を晴らしたこと、俺以外の勇者との出来事とかを要所要所だけ掻い摘んで説明した。
「ふんふん、で？　それがどうしてオレが召喚された異世界に来る羽目に？　四聖って異世界移動するのに制限掛かるでしょ？」
「ああ、知っているのか」
キョウが逃げた時、キョウが作った穴に潜って追いかけようとして弾かれた。
その時、四聖は異世界移動不可と出ていたのだ。
例外として消えそうなオストが盾に干渉して通れるようにしてくれたのだけど、絆はその縛りを知っているようだな。
「霊亀という、波が起こった時に魂を犠牲に波から世界を守る結界を作る化け物が、操られて暴れ出したんだ」
「ふむふむ……守護獣か、オレの知る異世界にも似たようなのの伝承がある。こっちは白虎とか玄武だったたな、伝承しか知らないけど。そいつが操られた？」
「ああ、霊亀を操っていた黒幕、キョウ……キョウ＝エスニナとかいう名前だったと思う。そいつを追いかけて異世界への道を通りぬけたんだ」
「へー……深追いして罠に掛けられたとかそんなところ？」
「……多分な」
キイッと椅子を揺らして絆が頷いた。
「なるほどねー……災難だったね」
「まったくだ。まあ、さすがに霊亀を操るのはルール違反とかでキョウと敵対する勢力のやつが俺達に協力してくれたんだけどさ」
「説明された話じゃ理由はわからないけど、敵対していた相手だったんだっけ？」
「ああ、グラスとラルクベルクって奴だ」
俺はグラス達の事と、ここで目覚めるまでの事を思い出した。



現在は一時的に休戦状態で共通の敵であるキョウを追いかけている関係だが……仲間と呼ぶには怪しいラインだ。
まずはグラス。
容姿を一言で表現するなら着物を着た……黒髪の和風美人だな。
扇を武器にして踊るように俺達と戦った。
三人の勇者の強化方法を学んで強くなった俺でも組み伏せることが難しい強さだ。
ただ、人間ではないのか時々半透明になることがある。
どんな種族なのか今一つ謎の女だな。
で、次はラルクだな。
本名はラルクベルク。
第一印象は、大抵の人が頼れる兄貴分というか気安く話しかけやすい奴だと思うだろうな。
出会いは、冤罪が晴れた後のカルミラ島でＬｖ上げというイベントに参加した時の行きの船だ。
程々に強く、それでありながらも話しやすい雰囲気に俺は敵とは知らずに一緒に戦ったりもした。
だが、カルミラ島の近くで起こった波の時に、俺に敵対して襲い掛かってきた。
目的は、本人の口から聞いた話だと、自分達の世界のために俺に死んでもらわねばならないらしい。
これはグラスも同じだったたな。
赤い逆毛な髪型をしていて、体は無駄のない筋肉というか戦闘に適した感じに引き締まっている。
顔もイケメンに該当するんだろうけど全く嫌味を感じさせないのが、同じくイケメンに該当する槍の勇者である元康との大きな違いだな。
皮肉なことに敵でなければ仲間にしたいなと思うほどにはできた人物だと思う。
使っている武器は鎌で、これもグラスと同じく特殊な武器らしい。
強さは折り紙付きだけど、波で戦った時のような強さは波の時限定だとか言っていた。
ま、それでもキョウ相手に相当善戦していたから強い方だろ。
間違っても三勇者よりは強い。
で、その付き人というか、一緒にいる女性がテリス。

あんまり話をしていないからよく知らないけど、ラルクの相棒っぽい。
後ろに纏めた三つ編みの髪型をしていて、妙な光沢のある髪の色は青……か？
見方によって色合いが異なるからよくわからない。
ただ、魔法を使うと髪の色が赤くなるから、少なくとも俺の知る異世界の人間ではなさそうだ。
こう……年上の温和なお姉さんみたいな感じの空気を持っていて、ラルク共々頼りになりそう。
戦闘は魔法を中心に使う、魔法使いタイプのようで、ラルクやグラスの援護をする。
魔法のタイプがよくわからないが、装備しているアクセサリーが光って魔法を形作る。
グラスの世界独自の魔法なのかもしれない。
性格はよくわからないが、相当多感な感受性を持っていて、俺に依頼したアクセサリーの腕輪をかなり気に入っていた。
雰囲気で言えばラルクの彼女……なのかな？
とまあ、これがキョウを追っている人員の全てだ。
世界を混乱させたそのツケを支払ってもらわねばラフタリア達の世界の住人が許すものじゃない。穴に潜るまではそんな感じだったな。
要するに俺達はキョウを追っていたんだ。
あの時……そう、光の奔流みたいな空間を渡っていた。
その奔流に乗っていればグラス達の世界に行けるはずだったんだが……。
思い出した。
進む先の光景が怪しくなってきて、光が闇に飲まれ、黒い空間の奔流となっていく。
その時、倒すべき敵……キョウの声が聞こえてきたんだ。
『くくく……罠があるとか思わなかったのか？　バァカ！』
という声と共に辺りに雷鳴が響く。
俺は咄嗟に盾を前に出してどんな罠があろうとも突破するつもりで構えた。
が――
バシンと音が響いて、視界を黒と青白い……雷が通り過ぎていく。



「うわああああああああああ！」
「ぐ……こりゃあ――」
「な、ナオフミ様！」
「く……」
一直線の流れだった奔流が、幾筋にも分かれるような錯覚と共にそれまで一緒に居た連中がバラバラに弾かれる。
こう……ウォータースライダーのチューブのように幾つにも分かれる分岐が俺達の先に見えた。
「ラフタリア！」
俺は離れないようにラフタリアに手を伸ばす……のだが、僅かに手が届かずにすれ違う。
く……スキルを放てば……軌道修正できるか？
「エアスト――」
唱えきるよりも僅かに早く……穴が消え去り、ラフタリア達が遥か遠くへ流されていく。
「ナオフミ様ぁあああああ！」
「ラフタリアぁああ――」
ここで俺の意識は一度、飛んでしまった。
後は絆の話じゃ脱出不可能の迷宮で目が覚めたところから今に至る。
俺が経緯を話すと絆がピタリと椅子を揺らすのをやめて立ち上がった。
「グラス！　グラスと会ったの⁉」
「知り合いか？」
「大切な仲間だよ。この羽織もグラスからもらったものなんだ」
ああ、西洋風のゴシックドレスに羽織なんてアンバランスなものを着ていると思ったら、もらい物なのか。
着こなしている印象を受けたので、そういうファッションだと思っていた。
にしても、あのグラスから物を贈られるような関係か。
「そうか！……グラスが協力してるってことは、そいつはとんでもない悪人だね。間違いないよ」
うんうんと先ほどよりもテンション高く絆は答える。

グラスと知り合いとなると、ますますコイツはグラスの世界の四聖で間違いないのだろう。

「ラルク兄さんも一緒か――……テリス姉さんとは良い感じになってた？」

「知らん」

ぶっちゃけテリスに関してはそこまで話をしてないからよくわからん。

「じゃあここにグラスが来てる？」

「わからん。世界移動中に罠に掛かってここに放り込まれたみたいだしな」

「ふむ……そうだよね。いたらわかっただろうし……」

絆は俺の言葉に何度も頷いて顔を上げる。

「じゃあ次はオレの番だな」

「ああ、まずはお前がどうして異世界に召喚されたか知りたい」

「そこからか……まあ、オレも聞いたし、しょうがない」

で、絆は自分がどういう経緯で召喚されたのかを話し始めた。



「オレは姉と妹と一緒にとあるゲームのプレイヤーとして参加することになったんだ」

「プレイヤー……？」

「最初はそのゲームの世界に入ったと思ってたんだけど、いつまで経っても姉にも妹にも会えない経緯があってここが異世界だって理解したんだけどさ。そこは省くよ」

ゲームの世界にトリップというのは共通なのか？

この辺りは三勇者と似てる。

ただ、死んだとかの経緯がないな。

というか説明が飛んでるぞ。ゲームの世界に入っただけじゃわからないだろ。

「ＶＲＭＭＯってやつ？　もしかしてブレイブスターオンラインとか言わないよな？」



「何そのゲーム？」

「俺の世界の四聖の一人がそんな感じのゲームに似てるとか言ってたんだよ」

「へー……オレのやったゲーム名はセカンドライフプロジェクト、第二弾ディメンションウェーブっていうやつだったよ」

「セカンドライフプロジェクト？」

ディメンションウェーブという名称には聞き覚えがある。

樹のやっていたコンシューマーゲームがそんな名前だったと思う。

だけどセカンドライフプロジェクトという前振りが気になるな。

「文字通り第二の人生を楽しむ、体感型ゲームと言うべきかな？　ゲーム会社が用意した場所で専用のポッドに入ってゲームの世界にダイブするんだ。ゲームの外の一日がゲーム内時間だと数年になるっていう謳い文句だったかな」

これは……カテゴリーで言えば錬の世界に近いのかもしれないけど、錬よりも昔の時代背景に感じる。錬の世界ってこう……一般家庭に機材があるイメージがあるからな。

詳しく知らないから俺のイメージだけど。

「ゲームに割く時間が少ない社会人でも十分に楽しめる、リフレッシュ目的のゲームって話。ジャンルは……ＶＲＨＭＭＯと言うのかな？　ヴァーチャルリアリティヒーリングＭＭＯ」

「時間節約か」

時間は有限だ。

ゲームをするのには膨大な時間を浪費する。

特にネットゲームはその傾向が強い。

現に俺が大学生だった頃、社会人になってからはゲームを止めた奴だっている。

逆にネットゲームをやりたいがために仕事をやめた奴もいる。

「第一弾が盛況で、第二弾の参加者は抽選だったらしいんだけど、偶然妹が当ててね。姉と三人で参加したんだ」

「ほう……」

「ゲーム開始はみんな同じで、終わりも同じ。限られた時間を過ごすゲームなんだ」

俺のゲーム知識の許容量をオーバーする話題だな。

理解できないわけじゃないけど、せいぜい舞台装置的な近未来の話に聞こえる。

始まりが全員同じで終わりも同じ……一回のプレイ時間が全プレイヤー共通とは、それは確かに公平なゲームだな。

プレイ時間も現実で一日となれば時間も節約できる。

「それに参加したつもりでいたんだよね。オレが召喚された時に色々と説明されたけどチュートリアルみたいな感じだったし」

うわぁ……これまた三勇者みたいな召喚方法だな。

ゲームをプレイしたつもりが異世界でしたとか……まあ、召喚されたと理解しているだけ三勇者共よりはマシか。

俺も本を読んでたら召喚、なんてベタなモノだったけどさ。

「ふーん……」

「オレが召喚された時には波なんて起こってなかったなぁ……」

「どんな名目で召喚されたんだ？」

「魔物を支配する竜帝が暴れ出したから倒してくれ」

「レトロなゲームみたいだな」

何だろう。俺の知る古いＲＰＧがそんな感じのゲームだったかな。

「そう。だから前評判や公式サイト、会社の説明とは違うなってね」

「その後、何があったんだ？」

「色々と冒険した後、船旅をしてたんだ。そこで何か不吉な風と共に幽霊船が出てきてさ……グラス達とその幽霊船の謎を解いた後……船が消失した挙句、遭難して、あんまり関係の良くない国に一人……捕まって、この迷宮にぶち込まれたって感じ？　どんな場所かは知っていたから、ぶち込まれた当初は荒れたもんだよ。死ぬまでここ？って」

「うわ……」

どこまで不運なんだよコイツ。

似たような経験をしている影響か、親近感のようなものが湧いてきた。



「そこからはこの迷宮で遭難生活を続けてるってところかな……もう何日……何年経ったか数えないようにしてる」

なるほど、だから波に関する知識も世界に関する知識もないのか。

どちらかというと俺寄りの境遇で召喚されて、出られない牢獄にぶち込まれたと。

「というか、お前いくつだよ」

数年はここにいるらしいが、見た目中学生くらいだ。

仮に見た目通りだとしたら、小学生くらいで召喚されたことになるぞ。

まあ、子供向けのアニメだと小学生で召喚される奴も多いけどさ。

絆はそのタイプだったのか？

「うん？　オレは一八だけど？」

「ハッ！　ロリババ……」

俺は言葉を途中で止める。

これ以上続けるとラフタリアに失礼だな。

ラフタリアは見た目は俺と同じくらいだが、実際の年齢は十歳くらいだ。

逆パターンである絆をバカにすると、ラフタリアが悲惨だ。

「どうしたの？　ロリババアって言おうとしなかった？」

「なんでもない。というかロリババアで通じるのな」

「成長しない自覚があるんだよ！　オタクで悪いか！」

ああ、やっぱり勇者として召喚される奴は皆、特徴があるのな。

いや、待て。

もしかして勇者の武器に選ばれると歳を取らないとか？

それはそれで嬉しいような気もするが、元の世界に帰って三十年経っていても今と同じ外見だったら、どう思われる？

迫害ＥＮＤしか想像できないんだが。

……そんなこと、帰ってから考えればいいな。

「まあいいや。それで？　これからどうする？」
「どうするって、決まってるだろ？　こんなところで立ち往生しているつもりはない」
「だろうね。オレも結構、ここじゃ脱出の方法を模索したよ」
「諦めろとか言われたって諦めるつもりはないぞ」
まあ、波に参加しなくていいとかなら悪い手じゃないのかもしれないが、こんなところで永遠にさまよい続けるなんて御免だ。
「ふぇええ……ナオフミさん達の言っている意味が全然わかりませんでした」
「インテリで頭良いのに、この程度の会話も察することができないのな」
「挙句、馬鹿にされた気がしますぅ！」
リーシアが情けない声で俺の皮肉を受け止める。
ああ、ラフタリアが恋しいな。
なんでコイツなんだよ。ラフタリアの方が話しやすいし相談しやすいのに。
「ふぇえ……」
あ、察して距離を取られた。
面倒くせーな。
「諦めろとか言うつもりはないよ。オレも諦めてないし」
というところでリーシアの方からグーッて音が聞こえてきた。
考えてみれば戦いの連続で食事なんてしてなかったからな。
それを聞いて絆はケタケタと笑い始める。
「じゃあ飯にでもしようか」
「こんなところでも飯が……って魔物の肉か」
「魚もあるよ。ここは海があるから釣り放題だからね」
で、絆が一度迷宮の方の拠点に戻って食料を持ってくる。
干して保存した肉と魚だ。他に果物っぽいものが数点ある。
「刺身とか食べたいなら釣ってくるよ」



「薬草類はないか？　俺も少しは持っているが、付け合わせや香料に使える」
「ああ、そういうのもあるかもね。じゃあ少し探索しようか」
「それはいいんだが……どうやら装備が全く機能してないから、強い魔物と遭遇したら俺達は戦えないぞ？」
と言うと、絆が武器からドロップらしき装備品を出し始めた。
「加工用の予備とかだけどいいよね？」
「ああ、それでいい」
で、渡されたのが木製の鎧と、動きやすそうな服。
武器は短めの短剣と双剣だった。
「俺は武器はいらねえよ」
「やっぱ異世界の四聖でも自分の武器以外は使えないんだ？」
「そうだよ。あと、俺は敵に間接的にしかダメージを与えられないんだ。盾だからな」
リーシアに絆が寄越した武器を持たせて、準備を整える。
今のところ、Lvが上げられるのはリーシアしかいないからな。
そのリーシアも、ステータスを見る限り殆ど変化はないが。
Lvとは何なのだろうか？
と思うほど、リーシアの戦闘能力は上昇しない。
その代わり、基礎能力は思いの他ある方だ。
「間接的ね。反射とかその辺り？」
「正解。お前みたいに範囲が広い武器使いじゃないの」
狩猟具って何だよ？
聞く限りじゃ、かなり広い範囲の武器カテゴリーだぞ。
「まあ、いろんな武器に変化させることはできるね。これは解体用の鮪包丁でしょ？　他に弓とかスリングとか槍にも変えられるよ」
「すげえな」
色々な種類に変えているとは思ったが、ここまで範囲が広いのか。

まあ一応狩猟という範囲に属しているから、おかしくはないが。
「そう？　まあグラスみたいに扇の眷属器だと扇しか使えなくて不便らしいけどね。尚文はそんな感じなんでしょ？」
「まあな。盾以外が出た例はない」
中には有能な攻撃性能がある盾がないわけじゃないけど、どちらにしろ受け手であるのが常だ。
例外はラースシールドと霊亀の心の盾くらいなもんだな。
だが、ラースシールドは呪われた盾で精神汚染をしてくるし、その中のスキルを放とうものなら呪われる。
霊亀の心の盾はエネルギーブラストという強力な攻撃が放てる特別な盾だけど、今の俺には両方とも変化させることができなくなっている。
「お前みたいな万能じゃない。守り専門が盾の勇者だよ」
「別に万能ってほどじゃないよ。オレの武器も制限あるし」
「なんだよ？　こっちは難点を話したんだから教えろ」
「ん？　四聖の狩猟具は狩猟……狩りっていう性質から対人の能力がない。尚文と同じで人を傷つけることができないんだ。だから捕まりそうになっても戦えなかったんだし、多勢に無勢で逃げることもできなかった」
つまり、絆の武器は人と戦うことができないという制約がある……と？
「何なら試してあげるよ」
と、絆は素早く俺達に鮪包丁で切りつけてきた。
咄嗟に盾で受け止めたが、返す刃が頬に当たる。
「ふぇ!?」
リーシアも初撃は避けたが突きを受けてしまった。
ぬるっと頬に当たるイヤな感じがした。
だけど……なんだろう？　軽く物が当たるような感触しかなくて、切られたと思う頬に触れても血が出た形跡がない。
リーシアは目を回して失神しかかっているが、特に外傷はないようだ。
「こういうわけ。だからオレが尚文達に何かできるなんてないから安心していいよ」



「ったく……物騒なことをしやがって」
とは思うが俺も三勇者に似たようなことをしたな。
素手で思い切り殴りつけたことがあったから似たようなもんだ。
「その代わり、魔物相手には効果が高いんだけどね」
全て魔物相手に特化させた勇者か……ベクトルが違うけど俺も似たようなモノだ。
攻撃能力の全てを防御に割り振ったような能力が、本来の盾の勇者なのだろう。
ラースシールドや霊亀の心の盾が例外で、カウンターも副産物でしかない。
だとすれば絆の武器にも例外で対人能力のあるものが、おそらくあるんだろうな。
信用はしない。
だけど、敵意はなさそうだから一時的に協力関係は築いておいた方がいいだろう。
「じゃあ軽くこの辺りを回ろうか？　定期的に掃除してるからそこまで強い魔物はいないけど奥の方へ行くと出てくるから気を付けて」
「はいよ」
とはいえ、魔物とは野生動物みたいなもので、駆逐とか簡単にできるわけじゃないんだよな。
絆を先頭にして密林の方を軽く一周する。
特に魔物の足音とか気配はない……はずだったのだけど、しばらくすると絆が俺達を制止する。
「……この先にいる」
耳を澄ますと確かに、茂みの先に何かの息遣いが感じ取れる。
Ｌｖ補正が低い影響か、少し勘が鈍くなってるような気がする。
「まあ、そこまで厄介な相手じゃないと思うからサクッと倒そう」
「そうだな」
絆が茂みに近づくと魔物が群れで飛び出した。
かなり大きな緑色の鼠のような魔物だ。
名前は……大緑鼠というまんまな名前だ。数は……何匹だろうか。間違いなく四匹以上いる。
「はぁ！」

絆の振りかぶりによって二匹は仕留められたが残りの大緑鼠は俺達の方が弱いと察したのかこちらに目標を定め噛みつこうとしてくる。

「待て！　く……尚文、取りこぼしを任せるよ！」

「ああ！　わかった。俺達の方にこれ以上逃がすなよ」

「わかってる！」

咄嗟に一匹目の鼠を盾で受け止めたのはいいが、二匹目が俺の盾を潜りぬけて腕に噛みついてきた。

「いて！」

こんな雑魚っぽいのに攻撃を喰らってダメージ受けるってどうなんだよ。河童は……結構強そうだからわかるんだが、鼠相手に怪我をしたというのは地味にプライドが傷つく。

俺の防御を貫く奴なんて少ないから、Ｌｖや強化がいかに大切なのかを痛感する。

「ふぇえええ！」

「ふぇえええじゃねぇ！　さっさと仕留めろ」

絆の方も鼠の群れの駆除に時間が掛かってんだよ。リーシア、お前の出番だ！

「は、はい！」

リーシアが必死に剣で俺が掴んだ鼠にトドメを刺していく。

「猪突！」

絆が鼠共に向かって力強く叫んでスパンと突く。すると衝撃波が出て、絆の周囲に居た鼠共が吹き飛ばされながら絶命した。

チュウとか鳴いてピクリとも動かない。風の刃で切られたのか、一刀両断されている。

「飛燕！」

更に絆は俺達の方で暴れる鼠に光の刃っぽいものを飛ばして仕留めた。

攻撃のカテゴリーとしては、元康が前に使っていたエアストジャベリンとかいうエネルギー化した武器を飛ばすのに似てるような気がする。

「地味に強いなこの魔物」

「河童よりは弱いけどね。俺の世界の冒険者だと一匹倒すのにＬｖ15は必要らしいよ」



むう……普通の冒険者が15必要な強さの相手に俺は苦戦したのか。

リーシアじゃ、度胸がないからしょうがないか。

「じゃあ探索を再開しようか」

「勇者同士の反発が地味にきついがな……」

「オレなしで行けるならいいんじゃない？」

「Ｌｖ上げをする時間が面倒だ。食料調達が目的だしな」

「はいはい。じゃ行こう」

探索を再開し、バナナみたいな木の実や、香草っぽい草を入手した。

幸いにして目利きとか技能系は失われておらず、毒とかの鑑定は絆の方でもできた。

なので、ある程度薬草類は集まった。

遭遇した魔物も、絆が言った通りそこまで強い物はおらず、絆がアッサリと倒してくれた。

ホント一撃だったぞ？　かなり強いんじゃないか？

リーシアに若干経験値が入った。

二時間くらいのコースだったんだけどリーシアの奴、もうＬｖ20になっている。

成長が早いな。

俺と絆は勇者同士の武器の反発で経験値が入らないみたいだけどな。

リーシアと俺で戦えるのなら、絆とは別行動で上げるのも手だ。

「じゃあ、そろそろ調理しよう」

「そうだな」

「せっかくだし待っててくれてもいいよ？」

「変なものを食わされたらたまったもんじゃないからな」

「疑い深いなぁ……」

そんな感じで海の家の前で焚き火を熾して何の肉か知らないが肉と魚を捌いて焼き、香草で和える。

後は串焼きとかその辺りを作って……。

「飲み水はあるのか？　スープを作ろうと思うんだが」

「ああ、あっちの方に地底湖があって、そっちの水を使ってるよ」

まあ、潮風があるからな。この見晴らしの良い海岸の水はやっぱり海水なのか。

……なんか雰囲気が南国の島みたいだったカルミラ島に似ているな。

絆が水筒を持ってきてどこからか出した中華鍋に水を入れて下の薪に火を点けた。

俺は骨や魚の頭とかを入れてぐつぐつと煮込む。

料理している間、絆は暇だったのか、海で釣りを始めた。

釣れた魚で刺身を作るそうだ。

で……。

「完成。絆ーできたぞー」

俺は料理を完成させて、絆を呼んだ。

「あ、もうできた？」

「ああ」

「こっちも大漁」

ご機嫌な絆が魚を吊るして持ってきた。

釣りの腕前はかなりのものみたいだな。

「じゃあ、さっそく食うか」

「そうだね。いただきまーす」

「いただきますぅ」

絆とリーシアが俺の作った料理を食い始める。

すると口に物を入れたまま、絆はうんうんと声を出した。

「凄く美味しいよ。尚文は料理が得意なんだね」

「異世界生活で身に付けただけだ」

「そうかなー……オレも自炊するようになったけど、ここまではできないと思うけどな。この魚の塩焼きとか、塩を海水で作る手間とか考えると面倒じゃないか」

「その程度を面倒くさがるな。幸運にも米があるようだったからついでにパエリアも作ったが、どうだ？」



「美味い美味いって。米ってせいぜい炊いておにぎりぐらいしか考えてなかったから良い感じだよ」

米をどこで手に入れたか知らないが、絆の食料に入ってたからパエリアを作った。

まあ、材料が不足していたからパエリアもどきなんだけどさ。

「いやぁ……やっと人心地ついたって感じ？」

「ふぇえぇ！」

絆が食い終わったのにリーシアは涙しながらまだ飯を食ってる。

そんなに腹が減っていたのか？

「さて……これからどうするかねー」

絆が沈みかけている日を見つめながら呟いた。

「尚文達はこれから動く余裕がある？」

「ないとは言わないな……ここから出る算段でもあるなら聞くぞ？」

「ないわけじゃないんだけどー……」

と、絆は懐から何か袋を取り出して見せる。

「ここの説明したの覚えてる？　オレがどれだけ頑張ったかの話」

「かなり深いところにまで潜ったんだったか？」

「そうそう、結構命がけで潜ってったんだよ？」

「ここはその迷宮のどの辺りなんだ？」

「かなり最初の方、住むには悪くないかなって場所で漂流生活中さ」

絆は、日が沈む海を体育座りで見つめていた。

何だろう。その後ろ姿に哀愁が漂って見える。

「で、これがオレの潜った先の……とある仕掛けの前に飛べる道具」

と、渡してきたのは音楽ＣＤのような円盤だった。

この円盤をどうやったら使えるのだろうか？

魔力も低下しているが、徐に魔力付与の感覚で触れてみる。だが動きはない。

「今から行く？」

「生きて帰れるのならな」
「一応確認してくるよ」
立ち上がった絆が円盤を横に投げる。
すると円盤は地面に当たる直前にくるくると回って光り始めた。
その光に、絆が潜って……すぐに顔を出す。
「うん。問題なさそう。こっち来てくれない？」
「な、なんか凄いです」
「驚きの連続だな。というか……」
結構便利な道具だよな。
転移スキルのポータルシールドみたいなのが使える道具か？
絆の案内のまま俺は光を潜りぬける。
潜りぬけた先の足場が砂なのに気付き……見上げると石造りの重々しい雰囲気がある広間のような場所だった。
……雰囲気的にはエジプトとかそんな感じの黄色いような石の壁が目に留まる。
「こっちこっち」
と、絆が指差した先を見ると、階段状の道の先に別の空間に繋がっているっぽい光のアーチが見える。
ただ、その前に流星盾のような結界があるようだ。
「ここの仕掛けを解けば次の空間に行けるみたいなんだけどさ……ちょっとこっち来てくれない？」
絆は階段を上って光のアーチの前にある結界へ手招きする。
「なんだ？」
「どうやらここを潜ると……この迷宮からは出られそうなんだ」
「そうなのか？」
大発見じゃないか。
あと少しで抜け出せるのに、もしかして頭数が足りないとかで立ち往生してるのか？
見ると砂の床の先に仕掛けが見える。
左右対称に進む道があって、その先にボタンが二つ。



あの仕掛け……同時に押すとかだろうか？
「問題はそこじゃなくてさ、こっち」
と、絆が指差したのはアーチの方だった。
「何かあるのか？」
「結界があって入ることはできないんだけどさ、これ以上近づくと武器が反応するんだよね。別の異世界に行くから禁止って」
なぬ？
俺がポカーンとしていると絆は何度も頷く。
「例外処理で許可は出るっぽいんだけど……この先に何があるかわからないんだ。元々一人じゃ解けないみたいだしね」
徐に俺も近づく、するとバチンと警告文が出る。

**――禁則事項。**
**四聖は他世界への渡航をすることは不可能です。**
**例外処理から逸脱。**

……どうやらこのアーチの先は俺の世界でもないらしいな。
「ただね……ここで立ち往生するよりはいいかと思ったんだけど……。異世界へ行ったら波で召喚されるんでしょ？　それに頼る方法で、この迷宮から元の異世界へ戻れるかな？　ってさ」
「俺も通れないみたいだが……」
もう一度特例許可しろよ、盾！
リーシアを使って謎を解けば絆は通れるのか？
だが……。
「出た先も似たような迷宮である可能性があるな」
「そうなんだよね……だから問題があるんだよ」

「どうしたものか……」
確かにこれは悩むな。
「とりあえず安全のために帰ろうか」
「わかった」
リーシアが壁の文字に興味を示して分析していたようだけど、俺達の会話に入り込んでくる。
「この謎を解けば出られるのですか？」
「いいや、別の世界へ行くっぽい」
「そ、そうなのですか？」
「とりあえず帰るぞ」
「は、はい」
絆の転送アイテムを使って俺達はまた砂浜に戻ってきた。
日が完全に沈んで辺りは夜の色になっている。
「夜になるとこの砂浜は魔物が強くなるから、拠点に戻ろう」
絆に案内されるまま、牢屋のある迷宮へと帰り……俺達は休息を取ることにした。
「うーむ……」
俺と絆、リーシアは次に何をするかをそれぞれ考えていた。
腕を組み、考えを整理する。
あそこの謎を解くと次の空間に繋がる道ができる。
どうやら武器の反応から別の異世界へと繋がっているっぽい。
「気になったのですけど、この迷宮は誰が作ったのですか？」
リーシアが絆に尋ねる。俺もそこは気になっていた。
「んー……オレもグラスから聞いた歴史でしかないんだけど、過去の魔術師が空間を操作する魔法を駆使して作った遺物らしい」
「へー……どういう意図で作ったんだ？」
「元々は……城塞にするつもりだったらしいのだけど、空間と魔力の暴走を引き起こして、出られない空間と化した……んだってさ。その名残に奥へ行くと風化した骸骨とか書物とか結構ある」



「出られた人はいないのでしたっけ？」
「うん。ごく稀に、この迷宮の入り口付近に迷宮から巨大な魔物が出てくるって話があるらしいけどね」
「ちょっと待て、それって出られたって話じゃないのか？」
「よくわかってないんだ。見た感じ、龍とか大型の変わった魔物だからこの迷宮の魔物だろうということになってるだけで」
ん？
なんか引っかかるな。
そんな大型の魔物が迷宮の謎解きをして出口を見つけたとか……ありえるのか？
「どこかで偶然、出口が出来上がることがあるかもしれないか？」
「あるのかもしれないけど、どうやって見つけるのさ」
だよなー……偶然に期待するのは愚かの一言に尽きる。
だが、大型の魔物と限定しているのは何か理由があるのか？
「で？　お前はその大型の魔物と遭遇したことがあるのか？」
「それらしい魔物なら見たことがあるけど？」
ふむ、となると外に出られる条件はなんだ？
……待てよ。
ここは色々な空間が繋がって暴走した迷宮なんだよな？
「もしかしてその魔物は……」
「何か心当たりがあるの？」
「あくまで仮定の話だ。狭い、小さな空間に迷宮内で大きく育つ魔物が迷い込んだとする」
「ああ」
「そこで大きく育った場合、その空間が持ちこたえられる質量を超えてしまう……とかありえるんじゃないか？」
過去に俺はとあるゲームをプレイしたことがある。
家具を揃えて飾るというゲームなのだが、二階とかに沢山家具を置くと警告が出るのだ。

床が抜けると。
ここは複数の空間が複雑に組み合わさって、出口が無いようになってしまった。なら小さな空間で大きな……持ちこたえられない魔物が育ってしまったらどうなる？　空間に揺らぎが生まれて、偶然迷宮の外に出られるのではないか？
「ありえなくはないけど、大きく育つ魔物を連れてって育てるの？」
途方もない計画になりそうではある。
フィーロのように魔物を使役できるのならいいのだろうが、ここにそんな魔物をテイムすることができる機材がある確証はない。
絆の問いが答えのようなモノだ。
卵とかを見つけても育てるのにどれだけ時間が掛かることか……。
なにせパーティーに勧誘して育てるとかの真似ができないんだからな。
「無理だな」
「試すにしても過程が面倒すぎる……」
やるとしても最後の手段だな。
はぁ……八方塞がりじゃないか。
だが、俺はこんなところで立ち往生する気はない！
オストが身を挺して俺達に道を切り開いてくれたんだ。キョウにその報いを受けさせないと腹の虫が収まらないんだよ！
……こりゃあ本格的に絆が見つけた場所へ迂回する方法に頼った方が現実的だぞ？
そう思いながら、蛮族の鎧やフィーロ着ぐるみを運びやすいように折りたたんだり、ばらせるところをばらしたりして積み重ねる。
ん？　蛮族の鎧の裏側にあるポケットに何か入ってるな。
入れたまま忘れてたやつ……じゃなくて念のために入れておいた雑貨だ。
その中に、とある物を俺は見つけた。
ついでに盾の中にある……取り出せるドロップ項目を覗きこんだ。



「おい、絆」
「なに？」
俺は絆にニヤッと笑い掛けた。
「なんとかなるかもしれないぞ？」

## 二話　脱出

「ここが一番小さな空間であっているんだな？」
絆に案内されて、俺達は迷宮内の小部屋に来ていた。
道中で色々な魔物と遭遇したが、絆が先行してくれたお陰で問題なく進んでくることができた。
で、絆が俺達を連れてきた一番小さいだろうと思われる空間というのは、教会のような雰囲気の祭壇と椅子が並んだ部屋だった。
室内にはリビングアーマーみたいなガチャガチャと動く鎧が闊歩しているように見える。
「オレの知る迷宮内じゃここが一番狭いから、間違いないと思うよ？」
「ふむ」
教会のステンドグラスは割れていて、その先は黒い……夜なのか外の様子かはわからない。
「ああいうところから外が見えるんじゃないか？」
「黒い雲と密林っぽい別の場所が見えたかな。不自然に空間が繋がってるから行けないみたいだけど……壁や床の形状から地下っぽい場所なんだけどね」
色々と面倒な法則が俺達の行く手を阻んでいるんだな。
「ねえ？　本当に言われた通りに弄ったけど、これでいいの？」
Ｌｖ１に戻ってしまった俺の魔力ではそれを弄ることができなかったので、Ｌｖの高い絆に代わりにやってもらった。
できるかどうか賭けだったが、絆の武器にそれを入れたら同じ技能が出たのは幸運だったな。

「しかし……面白い技能だね。式神強化に似てるよ」
「あんまり面白がって変なことをするなよ？　在庫が少ないんだから」
俺が注意すると、その道具を絆は何度か確認して俺に手渡す。
「上手くいくかどうかはわからないが、やってできないことはない」
空間を繋ぐアーチを潜って俺は室内の奥の方へ……それ……バイオプラントの種を投げつけた。
幸いにして割れた石畳の合間に土が露出しているところがあり、バイオプラントの種が問題なく発芽したのを確認した。
リビングアーマー系の魔物が俺達に気付いてガチャガチャと音を立てるが、俺達はそれよりも前にアーチを潜って逃げ出した。
絆の話だと、魔物はアーチを潜れないので逃げきれるそうだ。
「やった？」
「ああ、上手く発芽して凄い勢いで伸びていってるようだった」
教会っぽい空間へと続くアーチの方からバチバチとなんか変な音が響く。
リビングアーマーがボロボロになって突き飛ばされてったっぽいな。
あ、さっそく変異してリビングアーマーの体に植物が生えて動き始めた。
「うわ……新種の魔物化してない？」
「してるな」
徘徊し始めるが、まだ適合しきれていないのか動きが変だな。
なんて観察しているとゴゴゴと音が聞こえ始める。
アーチが揺らめいてスパークを繰り返しているようだった。
「アレを潜るの？　ちょっと危険じゃない？」
「気持ちはわかるが、あんな風になったことが今までにあったか？」
「ないね！」
絆が凄く楽しそうな表情を浮かべている。刺激のない迷宮生活から脱却できる期待で胸を躍らせているのだろう。
「ふぇえ……」



「リーシア、いい加減お前は脅えるのをやめて頭を使え」
「が、がんばりますぅ」
まったく……ラフタリアや頼れる仲間がいない今、お前しか俺に経験値を与えられる相手はいないんだぞ？　絆は四聖だから一緒に居ると経験値が入らないんだ。
「虎穴に入らずば虎児を得ずってな。行くぞ！」
「じゃあオレが先行するから尚文達はついてきて」
「わかってる」
「じゃあ……ゴー！」
絆が駆けだし、アーチから出てきたリビングアーマーに釣竿でルアーを当てる。
直後に絆はリビングアーマーを鮪包丁で切り裂いた。
スパッと見事に切り裂かれてリビングアーマーはガラガラと音を立てて倒れる。
すげー……のか？　どれくらい強いのかわからん。
俺達はスパークして揺らぐアーチを潜った。すると教会っぽい場所は増殖したバイオプラントに埋め尽くされて……空間に揺らぎが発生していた。
ぐらぁ……っと渦を巻くように、バイオプラントがそこに吸い込まれて、空間自体も地震みたいに揺れている。
バラバラと、黒い雲が壁を飲みこんでいて、バイオプラントの周り以外は、足場もなくなりつつあるようだった。
「あの穴を潜ろう！」
絆が襲い来るバイオプラントの蔓を駆け足で切り裂きながら俺達に指示する。
「ああ！」
「わ！」
「気を付けろよ」
リーシアが倒れないように手を繋いで強引に引き寄せてから何度も飛び移るようにバイオプラントを登る。
そして大きな蔓を足場にして俺達は穴に強引に入った。
ポータルシールドを使ったように視界が一瞬で切り替わるような感覚がある。フッと、小さな部屋が遠くで崩れ去るのを客観的に見ることができた。

一瞬にして青空が俺の視界に広がって……落下しているのに気付いた。

下には神社のような建物と囲いがある……どれくらいの高さから落下したのかわからないけれど、落ちたら間違いなく死にそうな高さから落とされたようだ。

「エアストシールド！」

少ないＳＰでエアストシールドを下に生成して足場にする。

まあ、エアストシールド自体はそこまで大きなものではないけれど、そのまま落下せずには済みそうだ。

「ふぇええ！」

リーシアが必死にエアストシールドにすがりついている。

悪いがこの盾もそこまで長持ちするものじゃないのだがなぁ。

問題はＳＰの残量が心許ないこと。

「もう少ししたらこの足場も消えるが……」

「尚文」

狭い足場で絆が手を差し出す。

「何か手があるのか？」

コクリと絆が頷いたので、リーシアを抱きかかえて手を掴む。

すると絆は持っていた釣竿を振り回して神社のような建物の屋根にルアーを引っ掛ける。

キューッと絆の釣竿のリールから糸を巻く音が響いたが、絆が強く力を込めるとピタリと止まる。

「そろそろ盾が消えるぞ」

「大丈夫、これだけ時間があれば十分」

盾が消失し、ふわっと重力を感じる。見る見る地面が近づいてきた。そしてガクンと衝撃が走る。

僅か二メートルくらいのところで俺達は宙吊りになっている。

「これならもう大丈夫だよね？」

「まあな」

スタッと着地して辺りを確認する。

神社っぽい囲いのある建物と……その周囲に落下して絶賛繁殖中のバイオプラントが視界に映ってる。



どうするか？

とりあえず作成しておいた除草剤を絆に手渡す。

「かなり危ない植物だからササッと駆除しないと災害になるぞ」

「みたいだね。変異性と増殖能力を上げたんだっけ……サクッと仕留めていこうか」

近づいてくるバイオプラントに除草剤を振りまいて時間を稼ぎ、絆がピョンピョンと跳ねてバイオプラントの本体に除草剤を散布していった。

免疫力は低めに設定したからアッサリと駆除することはできた。

しかし……土さえあれば凄い速度で成長するから気をつけないとな。

なんて思っていると、枯れたバイオプラントから種がバラバラと俺達に向けて降ってくる。

念のため、全て拾って纏める。

「で？　ここは外でいいのか？」

俺の問いに絆はハッと我に返って辺りを確認した。

そして、凄いハイテンションでピョンピョンと跳ね回る。

「やった！　やっと、やっと出られた！　間違いないよ！　ここは外の世界で間違いない！」

「そうか」

「ありがとう！　ありがとう！　ああ！　やっと！　オレはもう一人きりじゃないんだ！」

まあ、年単位であそこに閉じ込められていたらしいからな。

それだけの期間、あんなところにいたらこの反応もおかしくない。

とりあえず俺も色々と確認する。

相変わらずＬｖは低い。

砂時計のアイコンをチェックすると、次の波の到来時間がちゃんと記載され、少しずつ残り時間が減っていた。

間違いなく外に出られたようだ。

「で？　ここはどこなんだ？」

囲いのある神社みたいな外観で、神社への入り口は施錠されていて中を見ることはできそうにない。

囲いの方を見ると、木製……か？　なんか木にしては頑丈そうな材質で作られた囲いが設置されていて、門が固く閉ざされている。

少々高そうだが、工夫すれば飛び越えられそうだな。

なんて思っていると絆が釣竿を囲いに引っかけてロープ代わりにしている。

「先に登って」

「見張りとかはいないのか？」

「脱出不可能な迷宮の入り口だよ？　誰が近寄るのさ？」

「謎の魔物が出現したとか……」

「滅多にないから来ないと思うよ？　むしろジッとしてた方が危なくない？」

む……確かにそうだな。

「リーシアもちゃんとついてこいよ」

「あ、はい。あの……荷物はどうしましょうか？」

そうそう、絆が持っていた荷物や、俺とリーシアの装備など嵩張るものが多少ある。

それを持って、絆の釣竿で引っかけたロープを登るのは少し苦労しそうだ。

「オレが持って上がるから、早く」

「大丈夫か？」

「任せておいてって」

絆が大丈夫だと連呼するので俺達は先に囲いに上がって、下を見る。

地味に高いな……四メートル、くらいか。

まあ、囲いづたいに降りれば怪我することもないだろ。

「次は絆の番だぞ」

「ああ、じゃあ行くから少しずれて」

言われるまま少し体をずらす。



すると絆の釣竿のリールが回転してスルスルとアッサリ登ってきた。
……便利だな。
まあ、俺もロープシールドが使えたら同じ動きができたとは思うけど。
「よし！　じゃあ急いで……逃げよう！」
「あいよ。念のためにと確認する連中が来る前にな」
「に、逃げるんですかぁ!?」
「何を当たり前なことを言ってんだ？　あそこは……迷宮であり、牢獄なんだぞ？」
俺達の立場は、この辺りの連中からしたら囚人なんだろ。
脱出不可能な刑務所からの脱出みたいな感じだな。
そう思いながら、俺達は囲いから降り、警戒気味に立ち去るのだった。

## 三話　見知らぬ異世界

森を警戒気味に走り抜けて街道にぶつかる。
ここまでくれば多少は警戒を緩めてもいいだろう。
「で？　これからどうするんだ？」
「どうするって？」
先行していた絆が振り返って尋ねてくる。
「一緒に行動していたのは緊急事態だったからだろ？　ここから先、別れるか否かって話だ」
「どうしてそこで別れる選択が出てくるわけ？」
絆が不思議そうに聞く。
「ふぇええ……ナオフミさん。絆さんと一緒に行きましょうよ。じゃないと危険ですよ」
……そりゃあ問題はないのかもしれない。
何だかんだ言っても絆は一時的に同盟を組んだグラスの仲間（自称）らしいし。



だが、ここは念のために確認しておいた方がいいのも事実だろう。
「こういうのは確認を取っておかないと土壇場で別れたりされかねないだろ」
「疑い深いなぁ……グラス達と行動していたならオレが拒む道理はないし、何だかんだで、この国とオレは関係が悪いから単独行動は危険なんだ。できれば協力してほしいな」
「ふむ……」
状況はまだ飲みこみきれないが、どうやら絆も一人では困るらしい。
「国境越えは難しいかもしれないし……」
「転移スキルとかで帰れないのか？」
そうだ。
俺もポータルシールドを見てみよう。
唱えてみたが……位置セーブの一覧がない。
異世界だから、取り直しか？　使用することはできなくはなさそうだが……。
ヘルプを見てもこの辺りの詳細はなさそう。
元の世界へ戻ることは、波の時以外は無理臭いな。
「使用には制限があるし……結局は行く場所に行かないとダメなんだよね」
「スキル違いとかありそうだな。お前の転移スキル」
「尚文の方もね。オレの方のスキル名は『帰路の写本』っていうんだ。媒体に同名の道具が必要だし、この国じゃ使用不可能だね」
「俺の方はポータルシールド。一度行った場所を三つまで記録できて、飛ぶ場所を指定できる」
「おー便利だね」
「但し、現在セーブした場所は……無い。あとな、どこへ向かうかとかその辺りの指針を知りたいところだな」
「なるほどね！……便利そうだけど使えない状況なのは変わらないわけか」
羽織に付いた埃を払い落としながら絆は答える。
「行く方向はいくつかあるよ。まずは国境越えコース。この国から安全な国へ行くために国境を越える」
国境越えか……異世界に来てその案で成功した例はないんだよなぁ。

メルロマルクで指名手配されていた時、国境沿いにはものすごい数の軍隊と、三勇者共が待ち受けていたんだっけ。

「問題は関所を何度も越えないといけないこと。融通を利かせるにしても路銀が心許ないかな」

「賄賂が効くのか？」

「通行手形を購入すれば割とね。オレも又聞き程度なんだけど江戸時代みたいに上方……国の首都に行くのは簡単で下方、首都から出るのは面倒なんだってさ」

どうもグラスの服装とか絆の羽織とかを見ていると和風っぽい異世界なんじゃないかと思いたくなる。

だが、ラルクとテリスはこのカテゴリーからは外れてるから、一概に言えないか。

しかし通行手形か。

行商時に似たようなものを俺は持っていたが、アレとも違うのだろう。

「そんなわけで他国に逃げるのには相当無茶しなきゃいけない」

「管理社会なのかこの国は？」

「そこまでじゃないよ。住人が自由に移動しづらいようにしてる程度だね。首都に行く方が……安く済むかな？　難易度も今は低いだろうね」

「なんでだ？」

「この国の連中はオレが迷宮から脱出できたのをまだ知らない。なら龍刻の砂時計に近寄ることも無理じゃないと思う」

「龍刻の砂時計に行って何があるんだ？」

「尚文の方にはないのかな？　そこで使える移動スキルで一気に安全な国へ飛ぶ」

ああ、オンラインゲームとかだとあるな。

ポータルは転移スキルだが、個人プレイヤーが使うものである側面が強い。

緊急脱出手段だったり、魔物退治をきりあげて、町に帰るための手段だったりする。

先ほど絆が言ったのは町や国単位での移動方法だ。

町の施設に移動施設が存在し、その施設を使用して別の町にある同じ施設に跳躍する。

ポータルみたいな個人スキルとは別の意味で便利なものだ。



ゲームによってはポータルなんてなくて、こちらの手段の方がメジャーなものだってある。

あえて言うならばタウンポータルってところかな？

「後は……波ってのがどうやら起こっていて、オレの視界にも砂時計のアイコンがあるからそれに便乗して飛ぶってところかな」

「ふむ……」

複数手段が提示されたな。

まずは一直線に絆を牢獄にぶち込んだ国から国境を越えて逃げる。

難点はいくつも関所を越えていかねばならず、金が掛かる。そして国外へ出る時に一悶着ありそうなところか。

次にこの国の龍刻の砂時計を目指して移動する。

こちらの方が安く済むらしい。ただし、龍刻の砂時計に近寄れるかどうかわからないというリスクが付きまとう。

最後は波の召喚で逃げきるか。できる限り避けたいがな。

「ちなみに波の到来はいつ頃だ？」

「えっと……二週間後だね」

「長いな……」

俺達だってグラスの世界に滞在できる時間が限られているんだ。

急いでいるし、無駄に待ってなどいられない。

ラフタリア達を捜さねばならないのだ。

そういえばラフタリア達はどこだ？

奴隷紋と魔物紋の項目を出すのだけど反応が良くない。

なんか……上手く機能していないように感じる。

どうやらラフタリア達はこの世界にいるらしいのはわかるのだけど……。

「とりあえずは、尚文達のＬｖ上げをした方がいいかもしれないね」

「そうだな。装備も必要だろうし金も集められるなら集めるべきだな」

主に装備とかを買い揃える意味で。

絆から貸してもらった装備は、言ってはなんだが質はそこまで良くなさそうだ。

低Ｌｖでも装備できるもので見繕ってくれたんだろうがな。

「調査のためにも町とかに立ち寄ってみた方がいいと思う」

「……わかった。しばらくの間は同行してもらった方がよさそうだな」

「改めてよろしく頼むよ。尚文、リーシアさん」

「はいはい。リーシア。ラフタリアがいない今、俺の代わりに敵を攻撃……というか対人だとこの中でお前しか攻撃できないんだから、任せたぞ」

「は、はい！　がんばりましゅ――」

ここでまた舌を噛みやがった！

まったく、絆の奴が笑いを堪えてんぞ。

どうしてお前は締まりがないんだ。キョウ相手に啖呵を切っていたのが台無しだ。

森を抜け、しばらく進んだところで大きめの町に辿り着いた。

町並みは……何だろう。和風というか平安京みたいな感じだ。

江戸っぽいのかと思ったのだけど、どうも少し趣が異なるのがわかる。

ただ、道行く人の種族が俺の知る異世界の連中とは異なるように感じる。

耳が微妙に長い。肌も白くて美形ぞろい……金髪で……微妙に風景にそぐわない気がする。

エルフとかそんな感じなんだが。

「あれはこの世界じゃ草人と呼ばれる……尚文の基準だと亜人だね」

「そうだな。エルフっていうのが一番早いな」

しかし……エルフが平安風の服を着ていると違和感が……ってあんまりないな。

なんでだ？

ああ、なんでかわかった。

耳が長い外人がダボダボの服を着てるだけにしか見えなくて差があんまりない。

ちょんまげでもないから違和感がないんだ。

エルフって狩人っぽい感じだけど魔法も得意で魔法使いの服を着てるイメージもある。その辺りは個人の差って



やつか？

それを言ったらラフタリアだって和服の方が似合いそうだし。

他にグラスみたいになんとなく半透明っぽいやつも歩いている。

「なあ、アレはなんなんだ？　グラスと同じ種族っぽいけど」

「尚文は知らないんだ？　アレは魂人、別の国じゃスピリットと呼ばれる種族だよ」

「スピリット？」

「言葉通り、魂でできてるとか逸話があるけど違うんだ。まあ、スピリット用の武器は魂壊しとか切りとか付くらしいけどね。もっとわかりやすく言うなら……ステータスを確認して」

俺は言われるまま自分のステータスを再確認する。

……ＨＰが生命力という項目に変わっている。他にＳＰが魂力とか……。

わかりづらいから脳内で変換しておこう。

なんだコレ？

「スピリットは生命力と魔力……眷属器所持者だと魂力がエネルギーで統一されてる種族なんだ」

「何？　じゃあ魔法とか使うとその分、生命力が減るのか？」

「みたいだよ。で、他のステータスもエネルギーに依存していてＬｖが無い。エネルギーが命なんだね」

「Ｌｖも無いのか？」

「うん。だけどその分、エネルギーが高いと強いよ。普通の人間じゃ敵わない強力な敵の攻撃を受けても耐えきれるので有名な……防御能力の高い種族だよ」

道理でグラスが化け物じみてタフだと思った。

「難点は同族の力以外で、エネルギーの回復手段が自然回復しかないことかな」

「回復魔法や道具で回復できないのか？」

「うん。人間や草人……他の種族みたいに回復魔法の恩恵を受けづらい種族なんだ」

「そうだったんですかー」

リーシアがうんうんと頷く。

リーシアも一応、グラスと戦った経験があるもんな。思うところはあるだろう。

俺だってある。
アイアンメイデンを正面から受けて平然としてるとか、ラースシールドで焼き払っても耐えきったとかな。
あれ？
「つまりエネルギーが急速回復できたらものすごく強くなるってことか？」
「そうなるね」
俺はラルクがグラスに魂癒水を与えている姿を思い出す。
あの時、グラスが強力になったように見えたのだが……もしかしてこの世界には魂癒水が無いのか？
うーむ……何か引っかかるな。
っと、それよりもまずは少しでもＬｖを上げるべきか。
「わかった。でだ。ここに滞在して大丈夫か？」
「見た感じだと問題はなさそうだけど……」
絆と一緒に町の中を歩いてやや大きめの屋敷っぽいところへ行く。
なんだ？　人の出入りは激しいみたいだ。
屋敷内は……俺が召喚された方の基準で言うと冒険者ギルドっぽい感じだ。
賞金首の人相書きや依頼書っぽい掲示板の前に人がチラホラといる。
その辺りの資料を絆は閲覧して戻ってくる。
「どうやらオレ達が逃げたってのはバレてないみたい」
「そうか、ところで気になったんだが……」
俺は冒険者ギルドっぽい屋敷の奥にある水晶が鎮座する機械に目を向ける。
かき氷を作る道具をイメージしてくれると近い造形か？
なんかその大きな機械の前に人が並んでいて、ペンダントみたいなアクセサリーを機械にセットしてパソコンの端末を弄るみたいに何か操作している。
しばらくするとかき氷の下から煙と共に物品が出てきているんだ。
「アレ？　あれはオレ達には必要ないものだよ？」
「なんなんだ？」



「四聖の武器や眷属器のドロップ機能を複製したものだってさ。テリス姉さんみたいな晶人……ジュエルっていう元は宝石が力を得て人になった種族の人達が作ったものなんだって」
どうも今日はいろんな事実が明らかになるな。
昔、カルミラ島でラルク達と一緒に狩りをした時、勇者の武器にしかないドロップの機能を当たり前のことのように答えたのを思い出す。
つまりグラス達の世界ではドロップ自体は珍しい機能ではないのだろう。
「まあ、還元率は勇者の武器ほど良いわけじゃなくて良いドロップを選定して具現化させるに留まるらしいんだけどね。魔法でも上手くすればその場で取り出せるし」
「なるほどな……」
細かい技術の面じゃこっちの世界の方が優秀そうだなぁ。
つまり、あのペンダントに倒した魔物を吸いこんで、あの機械でドロップを確認して出すということなんだろうな。
元の世界に戻る時、ペンダントの方を譲ってもらえないだろうか？
製造方法がわかれば尚良い。金になる。
「凄いですね、アレで魔物を倒した時にいろんなものが手に入るなんて」
「樹もできたことだけどな」
むしろなんで俺を召喚した世界の方では広まってないんだ？
再現できるならしろよ。

## 四話　ドロップ売却

「そういや、買い取り商とかこの世界にはいるのか？」
「いることはいるけど……ってそれ何？」
前もって袋に入れていたダンボルの死骸を俺は絆に見せる。

すると絆は首を傾げていた。

なんで不思議がってんだ？

「あー……確かに空箱としてダンボルは使えるけど、安いよ？　やるならドロップの方がいい」

なる程ど。ドロップが当たり前のようにある世界じゃ、判明したドロップの方を買い取るのか。

まあ、素材の方が高値のものもあるのだろうが。

俺達はギルド内で情報を仕入れることに意識を集中させる。

「えっと……やっぱりいろんな出来事が起こっているみたいだね。隣国で脱獄騒ぎが起こったとか速報が出てるよ」

「俺達と似たような連中がいるんだな」

「まったくだね。逆にこっちは監視がいない分助かるよ。あ、人相書きが出てるね」

「絵が独創的すぎて何かわからないな」

見た感じだと目撃証言をもとに描かれたものみたいだな。

顔の絵は妖怪みたいな感じでよくわからん。歌舞伎っぽい？

「あの国の牢獄ってLv補正を消すとか厄介で厳重なところだったはずだけど、どうやって脱獄したんだろう？」

「これが、もしもラフタリアやグラス達だったらシャレにならないがな」

仮に当たりだったら、また厄介事を抱えることになるぞ。

「いやいや、さすがにできすぎでしょ。無事なことを祈ろうよ」

「そうだな。さすがにそんな上手い話はないよな。河童から俺達を救った絆みたいにさ」

「ハハハ」

「フフフ」

俺と絆が乾いた笑みを浮かべる。

「ふぇぇぇ……」

おっと、俺達が笑っているとリーシアがいつもの情けない声を出した。

「まあ、グラス達はこの世界でも有名人なんだろ？　脱獄したならわかるはずだ」

「そこなんだよね——……何か情報が錯綜してるみたい。敵国の重役とか謎の技術でドーピングしてたとか、実は巨漢の戦士とか……」

「あんまり参考にするべきじゃないな」

仮にグラス達なら俺達の目的地は隣国になるぞ？

だが、根拠のないデマに乗るほど、俺達は暇じゃない。

「後は隣国で新兵器開発の疑いがあるとかね。凶悪な魔物の製造とか怪しい感じ」

「どこでもゴシップは民衆の楽しみってやつじゃないのか？」

「まあ、そうだね。オレや尚文の知る娯楽のようなのは少ないでしょ」

「ゲームみたいな異世界も、それが日常だったら面白味なんてないだろうしな」

「まあね。他には転送技術の研究？　四聖や眷属器の転送技能を再現……？　帰路の写本が既にあるのに、他にというと……」

「一般人も使えるようにするとか俺の居た方の異世界じゃ考えられない技術発展だな」

俺の居た方の異世界じゃ転送スキルを再現しようという話は聞いたことがない。

いや、俺が知らないだけなのかもしれないけどさ。

などと話をしているうちに日が落ちてきたのに気付いた。

「ナオフミさん、この国の文字はどうすれば読めるんですか？」

リーシアが棚に置いてあった書物を開いて唸ってる。

まあ、言語が違ってリーシア自身、この世界の連中と話が通じないのはもとより文字もわからないみたいだからな。

「俺も読めねえよ。言葉は盾が翻訳してくれているんだけどな」

「オレもそうだね。リーシアさんの言葉は武器が翻訳してるんだ」

「そ、そうなんですか。てっきり絆さんが私達の言葉を理解してくださっているのかと思ってました」

「絆はこの世界の文字の読み書きができるのか？」

「簡単な文字程度なら読めるよ。グラスがうるさかったからね」

「へぇ……そりゃ凄いな」

と、俺はリーシアが読んでいた本を手に取って開いてみる。

古文とかで見たような文字の羅列だ。時々漢字っぽいのが交じってるから……なんとなく読めなくはないかもしれない。

これなら習得は早そうだ。

メルロマルクの文字は日本語や英語とは根本的に違うから翻訳するのが大変だった。

とはいえ正直、少し疲れが出てきたな。肩が重い。

「大分日も傾いてきたが……どうするんだ？」

「宿くらいは泊まれるよ。今のところ指名手配とかはないみたいだしね。オレを見て一発で顔バレはしてないこの国じゃ偉い立場の奴以外知らないと思うし」

「迷宮から脱出したことはバレてないのか？」

「んー……迷宮から何かが溢れて出たけど即座に消えたって噂されてるみたい。警戒するに越したことはないけど大丈夫そう」

不安がなくなったわけじゃないが、野宿するよりはマシか。

「金はあるのか？」

「いらないドロップを買い取ってもらったから三人で泊まる分くらいはあるよ」

「俺もいらないものを売るか？」

「ダンボル？」

「いや……俺の世界の魔物のドロップなんだが」

考えてみれば異世界の魔物の落としたものとなるとレアなアイテムとかあるんじゃないか？

未知の道具とか……問題は足が付きそうで怖いところだが……。

後は鎧みたいに文字化けしてるのもありそうだ。

「ああ、それならいいかもね。尚文のいた世界で当たり前の品がこっちじゃ高値になるかもしれないし」

「ただ、相手が理解しているかどうかに左右されるのが難しいところだな」

どんな効果があるかとか、珍しさとかで物の価値は判断されるだろ？　知っているものならいいが、未知のものとなると警戒される。

絆が知っているかどうかで判断するのが一番いいが……。



「ま、今日は疲れたから金策は明日に回した方がよさそうだ」

「この町より大きな町がもう少し先にあるみたいだから、そこに行った方がいいだろうね」

「疲れましたぁ」

リーシアがぐったりした様子で言う。

そうだな、見知らぬ地を冒険するってかなり疲労するものだ。

しかもＬｖが低いから危険性が高まるしな。

俺としてはササッと金を集めて装備はもとより、ある程度盾を強化してＬｖ上げに挑みたい。

そのためには金は割と欲しい。

とりあえずはＬｖも少し上がってきているし、リーシアと一緒に上げていくことになりそうだ。

リーシアのステータスの伸びの悪さが当面の課題か……。

絆曰く敵地だから、行きがけの仲間を募ってＬｖ上げとかできるか怪しいからな。

ただ、冒険者っぽい連中が町を歩いていたから、いないわけじゃないようだけど。

絆に案内された宿の部屋で、俺達は高く買い取ってくれそうなドロップの品定めをする。

文化形態とか知らないと色々と危ないからな。

知らないことは多そうだけど絆がある程度は知っているみたいだから後回しでいいだろう。

「色々と物を出すから高値で売れそうなものを見繕ってほしい」

「わかった」

俺は盾から敢えて出さずにおいたドロップを何点か出し、調合させていた品々を絆に見せる。

どんな基準で判断されているのかわからないが、文字化けをしないドロップ品もそれなりにあって助かる。

「いろんなものを溜め込んでるね……」

「まあな」

「この瓶の中身は何？」

「魔力水だ。飲むと魔力が回復する。この世界にはないのか？」

「見覚えがないなぁ……似たようなのだと大地の結晶ってのが魔力回復に使えるものだけど」

と、絆が武器から赤い結晶を出して俺に見せる。
「これを握りしめると魔力が回復するんだ」
「そうなのか。変わった品だな」
「尚文の方の世界じゃ飲めば魔力が回復するなんて、こっちだとありそうでない品があるんだね」
試しに絆が寄越した大地の結晶を握りしめる。
すると大地の結晶はパキッと音を立てて砕けて気化したように消え去った。
龍脈解放！　EXP3000獲得！
と、魔物を倒した時の経験値獲得表示みたいのが映し出された。
3000……結構馬鹿にできない量が手に入ったぞ。
「経験値がかなり手に入ったんだが……」
「え？」
絆も魔力水を試しに服用する。
「うへ……こっちは魔力が回復すると同時に武器強化に必要な経験値が入ったよ」
「強化に必要な経験値？」
「うん。オレの武器はLv以外に、その武器を使っていると武器に経験値が入るんだ。そうするとその武器が成長して強くなる。木の釣竿なら中級木の釣竿みたいにね」
「なるほどな」
絆の方の強化方法もそれなりにあるみたいだな。
これって話し合いで強化方法を教え合えば更に強くなるんじゃないか？
などと考えていたら、チーンと音がして盾から調合を終えたヒール丸薬が生成された。
俺は盾からヒール丸薬を出して、明日売る道具に並べる。
「何これ？」
「回復アイテムのヒール丸薬。傷口に塗ると傷が治る」
「治癒丸みたいなものかな？」
絆も同様に似たようなアイテムを出す。



「こっちは飲むことで傷が治るんだけど、そういえば河童と戦った時にも塗ってたね」
「色々と違いがあるんだな。さすが異世界っていったところか」
「むしろ危ないのは効果が変わっていたりする場合だね」
どうやら絆達と俺達とでは使用した時に効果が異なる場合があるみたいだしな。
魔力水を飲んで武器に経験値が入るとかどんな効果だよ。
こっちも似たようなもんだけど。
ってところで思い出す。
俺は魂癒水を取り出して絆に差し出す。
「これは？」
「魂癒水というアイテムだ。SPが回復する」
「SP……魂力かな？　そんな道具があるんだ？　オレの知る限りだと魂力は武器の効果とかの吸収や自然回復でしか回復しないなぁ」
ほう……この世界じゃSPの緊急回復手段が乏しいのか。
じゃあ注意しておかないといけないかもしれない。
SPを全て使うアイアンメイデンなんて放ったらスキルはしばらく使用不能になりかねないぞ。
「前にグラスと戦った時、ラルクがそれをグラスに振りかけたんだが、その瞬間グラスがパワーアップしたアイテムだ」
俺の言葉を聞いて絆が驚愕の表情を浮かべる。
そう、ここから導き出せる結論は一つ。
グラスの種族であるスピリットはLvでさえもエネルギーで管理されている。
エネルギーを大量に所持しているのなら、能力も総じて高くなるという特徴を持っている。
だが、絆曰くエネルギーの回復手段は少ないらしく、自然回復に頼っている側面が強い。
けれども、問題であるエネルギーを急速に回復できるアイテムがあるのならどうだろうか？
「え!?　スピリットのエネルギーまで回復する効果がある!?」
「らしいな」

「これ、ものすごい珍品になるよ。スピリットなら喉から手が出るほど欲すると思う」
「じゃあそれを売ればいいか」
「未知の珍品だよ？　それに買い取りしてもらうにしても前例がないし、どうなるかわからないけど大丈夫なの？」
「問題ない。俺を誰だと思ってんだ。明日売る物は決まったな」
これでもあっちの世界では行商をして金を稼いでいたんだ。
ここまでできすぎた状況なら、いくらでも手はある。
「後は魔力水でパワーアップか。こっちは大地の結晶が大量に欲しいな」
「オレの方の強化方法とか重複するかな？　教え合ってみる？」
「そうだな」
更なる強化方法を知ることができれば、強くなれる。
これを逃す手はないからな。
「オレが知っているのはさっき話した武器にある経験値でしょ……あとは札を武器に付けて能力を与えるとかー……」
「こっちは数が多いな。まずは――」
絆から聞いた強化方法を盾に試そうとしても、幾らやっても効果が出る気配がない。
同様に絆も俺の話した強化方法が効く気配がなかった。
何でもグラスから聞いた強化方法は使えるようになったらしいのだ。
「グラスの方法は倒した相手の魔力……というか相手から漏れ出して辺りに漂う力を吸い取って強化するんだ。それはできたから尚文の言うことを疑っているわけじゃないのは信じてほしい」
「はぁ……それはこっちも同じだろ」
別に絆の事を信じていないわけじゃない。
三勇者共の強化方法も信じなければできなかった。
俺が心のどこかで否定しているのではないかとは思うが。
「疑っては何も始まらないのは知っている。それでも出ないとしたら世界が異なるから……か？」
「ありえるね。系統が根本的に異なるから受け付けないのかもしれない」



「共有できれば更なる強さが得られたんだけどな」
「そうだね」
絆も同意して頷く。
ぶっちゃけ、どれだけ安定して戦えるかは強化に掛かっている。
結論付けるのは早いかもしれないが、できないからといってうんうん唸っても始まらない。
ならばすることは一つ、簡単に経験値を稼げそうな大地の結晶を得るために金を稼ぐことだ。

## 五話　実演販売

翌日、橋を越えた街道の先にある大きな町の商店街の端で俺達は呼び込みをしていた。
一応、足元にはむしろを敷いて店であることをアピールする。
後は念のために、近くの店で売っていた仮面を着用して顔を見られないようにしておく。
絆は顔でばれるかもしれないからな。
「さあ本日、俺達が提供する商品はこれだ！　魂人の冒険者は必見だ！」
威勢よく、俺は呼び込みを行う。
「今回、皆さんに提供する薬はかの海を隔てた遠き国から手に入れた逸品。名前を魂癒水」
道行く冒険者やギャラリーがなんだなんだといった怪訝な目で群がってきた。
絆とリーシアが俺の後ろで若干引き気味に俺の指示通りに相槌を打っている。
ああ、リーシアの言葉は通じないし、怪しまれるので喋らないようにしてもらっている。
「それはどんな効果があるのですか？」
絆が棒読みで打ち合わせ通りの言葉を発する。
「知りたいですか？　お教えしたいのは山々ですが、アナタじゃ効果を体感できないと思うので、道行く……そこの方！」
俺はギャラリーに混じっているスピリットを三人指差して手招きする。

「この薬がどんな効果があるかを知っていただくにはアナタ方しかいないので、物は試しと思って見てください」
「お、おう……」
俺に招かれてスピリットが三人、こっちに来る。
「ああ、毒の類ではありませんし、経口ではなく皮膚に塗るのでも効果があるのでお試しを」
俺は魂癒水を別の器に移し、絆が持っていた筆でスピリットの腕に何度か塗る。
最初は怪訝な目で見ていた三人のスピリットだったが、その顔が徐々に驚愕の表情に彩られる。
「な……馬鹿な！」
「ウソだろ！　こんな薬が実在するってのか!?」
「これは……世紀の大発明だ！」
ざわざわと辺りのギャラリーが事態を飲みこめずに顔を見合わせる。
三人のスピリットは自分達の身に起こった出来事を、声高々に叫んだ。
「エネルギーが回復する薬だ！　嘘じゃない！」
ざわめきは一層大きくなる。
「はい。この薬はスピリット専用で、エネルギーを回復する驚異的な神の薬なのです！」
「ふぇえ……ナオフミさんの言葉使いが普段と違いますぅ」
「商売になるとキャラを変えるとかそんな感じ？」
リーシアと絆が内緒話をしている。
うるさい、こうでもしないと注目ってのは集められないんだよ。
仮に買い取り商や薬屋に魂癒水を売りつけたって変に怪しまれるか、因縁をつけられるか……はたまた製造法を話せとか言われかねない。
しかも欲する相手は確実にいる魂癒水を転売されてしまうのは避けられないだろう。
ならすることは一つなんだよ。こうして、こっちが売りさばく。
「今回、販売致します魂癒水は五個……皆さま？　おためしになりませんか？」
「えー……今回は一個、一玉銀です」
まずは実験台にされて顔色を変えたスピリットが自らの財布を見て、銀の棒みたいなのを出す。
玉銀って……この世界の金銭の単位は江戸か!?
金貨は小判か？
「何ならもっとくれ！」
スピリットの三人が顔色を変えて、複数購入しようとして睨みあう。
「喧嘩はいけません」
「一人一個となります！　どうか落ちついてー！」
緊急事態に服用すれば窮地を脱することだってできるかもしれない薬が目の前にあるのだ。
そりゃあ欲するだろう。
で、三人のスピリットは一つずつ魂癒水を受け取って立ち去っていく。
「では残り二個になります。皆さま、どうですか？」
サクラを疑っているようだが、違うぞ？
「急な話ですからねー……では今回、ここで効果を実感していただくために、残り二個を使ってスピリットの皆さまに体験していただきましょう。並んでくださいねー」
再度、二個の魂癒水を別の器に移し、実験にと並ぶスピリット達に筆で軽く塗る作業を、魂癒水がなくなるまで繰り返した。
この頃になると長蛇の列となり、各々効果を実感して信じる気になってくる。
「こ、この薬はどうやって作ったんだ!?」
とか聞いてくる奴が多いこと多いこと。
盾で作ってんだよ。自作することもできるが色々と面倒だ。
なんて言えるはずもなく、俺は『秘密です』と答えて散らした。
あんまり注目を浴びるのは危険でもあるが、やらねば武器強化の素材を集めづらい。
通行手形という高めのものも買わないといけないしな。
で、器に入れた魂癒水がなくなったのを確認し、俺は手を叩いて注目させる。
「さて、スピリットの皆さまはどなたも実感されたと思います。どうですか？　俺達にウソや八百長、サクラはないことは理解していただけたでしょうか」

長蛇の列となったスピリットのコクコクという反応を見て疑惑から確信へと意識がシフトしたのを確認する。

頃合いだな……。

「なにぶん、魂癒水は作り出すのが難しく、数はそこまで用意できていないので……全ての皆さまに提供することは難しいのです。なので明日、また同じ場所でオークション形式で販売しようと思っております」

パチパチと拍手が響く。

ま、順当なところだな。

転売されるのも視野に入れて手を挙げる。

「次回提供するのは先ほどと同じ五本の魂癒水。皆さまふるって参加くださるよう、お願い致します」

と言ってから俺達は足早にその場から去った。

「アレでいいの？　余計な注目を浴びるだけで大して売れなかったらどうする？」

「玉銀って何だよ。単位で吹きそうになったぞ」

「ナオフミさんは何か知っているのですか？」

この中じゃリーシアだけだからな、日本の事を知らないのは。

「この国の通貨なんだからしょうがないでしょ。ちなみに銅文、玉銀、金判って単位。銅文一〇〇枚で一玉銀、玉銀一〇〇枚で一金判だよ」

俺の方の異世界の硬貨と感覚は同じか。

しかし名前が酷いな。吹きそうになって堪えるので精いっぱいだったぞ。

江戸っぽいけど少し違うって感じなのか。

「さっきの話だけどな？　アレでいいんだよ。この町の貴族を炙り出して高値で売りつけるんだからな。口コミで群がってくる」

「そんなことができるの？」

「人の噂ってのは案外馬鹿にできないもんだ。アレだけ列を作らせて嘘ではないことを証明したんだ。ま、楽しみに待っていればいいさ」

フフフフフ……最近は商売を全然していなかったから、なんか楽しくなってきたな。



何だかんだで物を売って金を稼ぐのは嫌いじゃない。

むしろ好きな方だから、腕が鳴る。

「うわー……実はものすごい詐欺師と知り合ってしまったんじゃないかってオレは思う」

「ふぇぇ……」

「リーシアはそろそろ、別世界に驚くのをやめて生き残るために知恵を絞ろうか。あと、なんにしても金は必要だろうが。絆が最初から路銀を持っていたら苦労しなかったんだよ」

「そりゃあ……そうなんだろうけど……なんだかなー。オレも商売は好きな方だけど、尚文ほどじゃないな」

などと話をしながら、俺達は翌日まで時間をつぶすことになる。

一応、近隣の魔物を倒すことでLvアップを図ろう。

まずリーシアのLvを上げようということで、俺が留守番し、絆が近場に生息する魔物を倒しに行った。そして帰ってくるなり首を傾げる。

「オレが覚えているよりも魔物が多いな……？　何があったんだろ？」

「活性化でも起こってんのか？」

「何それ？」

「俺のいた方の世界であった期間限定イベントみたいな現象だ。経験値が通常よりも入る、でわかるか？」

「あー……なんとなくは。そうなのかな？　地味に敵の強さも上がってるみたいだったよ」

その後、俺もリーシアを連れてダンボルを倒したのだけど無限迷宮に居たダンボルよりも強く経験値が多かった。

ふむ……どうやらダンボルは間違いなくバルーンよりも強いのが判明したな。

一体どうしてグラスの世界の魔物の方が強いのかよくわからないが、仮に俺を召喚した世界の方が総合的に弱い世界だとしたら グラス達の強さに納得が……できるのか？

翌日、俺達は再度、露店販売をした場所に戻る。

もちろん、仮面を着けてな。

その頃になると、待ちわびたとばかりに入だかりができている。

スピリットではない連中もいるな？

そりゃあそうだろう。
エネルギーの回復手段が乏しいこの世界で、そのエネルギーを回復させることのできる薬が販売されるんだからな。
研究者や転売目的の商人、単純に欲する冒険者等、薬が欲しい者を探したらキリがない。
その中で、人だかりの後ろの方で目を光らせている役人臭い奴が気にはなるが。
大方、貴族の監視とかそういったところだろう。
絆の話で商業許可証等の類はないのは確認してる。
あったら裏で売りさばいてた。
権力でこのオークションを潰されたりする可能性はあるが、それこそ……民衆の不満は爆発するだろう。
ある意味、今日の注目カードの一つ、みたいな雰囲気が辺りを支配している。
「これはこれは、皆さまお忙しいところ、足を運んでいただきありがとうございます」
俺は魂癒水を絆達に持たせて、並べる。
「さて、それでは……皆さま、効果は実証済みですし、細かい前口上を話すよりも早くオークションを始めましょう！」
「「おおー！」」
歓声が辺りを支配する。
みんな人参を前に吊るされた馬みたいな顔をしているな。
目の前に金の成る木の話が転がっているんだ。
欲望に忠実な目をしている連中を相手に場を支配するのはやりやすい。
ネットゲーム経験がここでも役に立つな。
MMOにおいて、みんなで狩りをしてレアアイテムが出た場合の話だ。
まあ種類にもよるんだけど、機械的に分配とかされないゲームだと、狩りに参加した人が欲しいレアアイテムをオークション形式で落札する。
で、俺はそのオークションで相手にレアアイテムを落札させることは日常的にやっていたんだ。
だからこの空気は言わば俺の庭みたいなもので、周りの連中が喉から手が出るほど欲しがる品を高く売りつけるのは容易い。
「では――……最初に販売した時と同じく一玉銀から始めようと思います！」
「一玉銀五〇銅文！」
「二玉銀！」
「三玉銀三〇銅文！」
即座に各々、大声で値段を付け始めた。
良い傾向だ。
あとはどれだけ吊り上げるかを操作していけばいい。
で、さすがに使い捨ての薬一つに大金を投じるような事態は、まともな状態では起こせない。
監視の目もあるしな。
だが、俺達は素早く金を手に入れて逃げたい。
「三〇玉銀！」
どよめきが辺りで沸き立つ。
ふむ……薬一つで、俺の感覚で言えば銀貨三〇枚相当か。
「さあ！　三〇玉銀でよろしいですか!?」
パンッと手を叩いて先導する。
その後は僅かに銅文で値上げを繰り返していく感じになってきた。
最終的には三〇玉銀八三銅文で誰もが引いた。
「これでいいですか？」
しーんと辺りが静まりかえる。
「それでは最初の一本は三〇玉銀八三銅文で落札だ！」
俺は金を受け取ると同時に落札した人に魂癒水を手渡す。
ただの商人っぽいな。貴族は釣れていない。
ずっしりとした財布の中身を確認し、売り上げを合計する。
これだけの金があれば通行手形は買えるか？

絆に目を向けると、手を水平にして横に振られる。
足りない、もしくはとんとんか。
それじゃあダメだな。
よし！　ここで奥の手に走ろう。
あんまりこの街に滞在するのは危ないし、人が集まりすぎても混沌と化すからな。
俺が合図を送ると、絆が頷いて……魂癒水を持っているリーシアの足を引っかける。
「わ！」
パリンと中身を水にすり替えた魂癒水をリーシアが落として器を割ってしまう。
「うわ！　勿体ない……」
「ふぇえ……すいませんすいません！」
「商品が台無しじゃないか！」
事前に打ち合わせをしていたから演技だ。
まあ、樹の正義病に侵されているリーシアはこれでいいのかと困惑していたけど、これが俺のやり方なんだからしょうがない。
それでも申し訳なさそうに謝るリーシアに演技の罵声を軽く浴びせてから周りの観衆に告げる。
「すいません。不届きな部下がせっかく用意した魂癒水を割ってしまい、残り一本になってしまいました。言葉も覚えない間抜けな奴め！　面倒を見ているのに恩を仇で返すのか！」
「ふぇえええええええ！」
ブーイングがリーシアに向かって殺到し、リーシア目掛けて物が投げ付けられる。
こんなもんだな。これ以上やるとリーシアが不憫だ。
「本当にすいません。最後の一本です。皆さま。申し訳ありませんが、どうか容赦してください」
俺は大きく息を吸ってから周りの観衆に響き渡るように告げる。
「それでは最後の魂癒水のオークションを再開します！」
「三玉銀二〇銅文！」
「八玉銀！」



「一五玉銀！」
「三〇玉銀！」
かかった……そう、残りがあるからとみんな余裕を持ってしまう。
だけど不慮の事故という心の余裕がない状態に追い込んでしまえば、焦りから値段の高騰が起こる。希少な……今までにない薬が今回用意された最後の一本となってしまっているんだ。
もう二度と世の中に並ばないかもしれない。
そういった精神状態に追い込めば、駆けこみで金額が吊り上がっていく。
やがて……。
「三金判！」
「三金判五〇玉銀！」
町の貴族らしき奴が乗り込んで、町の商売人らしい奴と言い争うように高額で値段の吊り上げを行うにまで達した。
もはや、どれだけ上がるのかを観衆は息を飲んで見守っている。
「四金判！」
「く……」
「これでよろしいですか？」
と、俺は告げて、誰も声を上げないのを確認する。
「それでは四金判で落札です！　皆さま、落札者に拍手をお願いします」
パンと手を叩いて落札を確定させる。
貴族が俺達の方へやってきて四金判を手渡すので俺は受け取った。
ま、金貨四枚と銀貨二〇枚相当か。妥当なところだな。
貴族だから、四金判はそこまでの金銭ではないだろうが、日付きが気になる。
製造法とかに探りをいれてきたり、刺客が来たりする可能性は否定できないな。
ま、魂癒水一つでこれだけの値が付いたのなら儲けものだが。
俺の居た世界じゃ用途が集中力向上だから程々に高い程度の薬なんだよな。

勇者には別の効果があるんだけどさ。
これから気を付けなきゃいけないのは周りからの襲撃だな。
「それでは皆様。今日はどうもありがとうございました－！」
拍手が起こる中を俺達は足早に立ち去ったのだった。

## 六話　異世界の装備概念

「ふぇえ……視線がとても痛かったですぅ」
「悪かったな。絆でもよかったんだけど、どちらかといえばリーシアが適任だと思ってな」
「まあ……」
絆が言葉を濁しながらリーシアを見る。
仮面を着けても動きがドジっぽいリーシアならピッタリの役どころだよな。
実際、演技とはいえ不自然さはなかった。
ある意味では、この金はリーシアのおかげで手に入ったとも言える。
「しかし……尚文は凄いな。あんな値上げの方法があるんだ？」
「こうすれば少ない数で最大限の利益が得られるんだよ」
「別に三本とかで売りつければ同じ結果になるんじゃないの？」
「商売人の意識ってのはそう簡単にいくもんじゃない。焦りを生ませてから先導して引き上げるのが重要なんだよ」
五本で売りつけた場合、推定だが、二本目が三五玉銀で、三本目辺りの相場を商人共は見極めてしまう。
若干、誤差は出るだろうが、画期的な薬が目の前にぶら下がっているけれど、引き際をわきまえなければいけないという意識が働いて、ここまで値上がりは期待できないだろう。
金のなる木だと確信した商売人がいるのなら話は変わってきたが、ここにはいなかった。
いたらもっと高額で一本目が売れてる。

「その方法だと、五本で行って一金判八〇玉銀くらいだな。もっと口コミが広がれば高騰を狙えるし、偉い連中に直接売りつければ更に値が上がるだろうが、俺達は暇じゃない」
そうだ。俺達には目的があるんだ。
絆曰く、この国は敵国らしいから安全な国へ逃げるための金を稼がねばならない。
金の成る木だとマークされる前に逃げなければいけないんだ。
「で？　通行手形は買えそうか？」
「余裕で買えるよ」
「そうか、じゃあさっさと買って、残った金で武器強化用の鉱石とか、武具を買い揃える」
「凄いね―……オレの友達にも金稼ぐのが好きな商人がいたけど、尚文ほどの手腕があったか怪しいな」
絆が感心しながら俺達の後ろを歩いてくる。
ま、露店販売が終わった俺達は今度は客としてこの街で物を買う立場になったわけだ。
えっと……まずは武器屋にでも顔を出すか。
で、入った店の展示を確認する。
うお……刀とか長巻とか売ってる。
他に扇とか、鎌、槍とか俺の知る武器屋の親父の店とは扱っている武器がかなり違うみたいだ。
ただ、やっぱり武器屋は武器しか扱ってないか。
リーシアの剣をここで買い替えるのが妥当だろうな。手頃そうな小太刀を買い与える。
「さて……盾はどこで売ってるかな？」
「防具屋でしょ」
ま、そうだよな。
俺達の世界で武器屋が盾や鎧を扱っているのが珍しいんだよな。
武器屋の親父が懐かしいな。
で、防具屋に行くと盾は……あんまり売ってなかった。
盾の品揃えが悪いな。
とは思いつつ、カブトガニみたいな魔物を加工した盾を発見。

ゲームで見たことあるぞ。こういうのあるんだな。
あとはまあ親父の店でも見たような盾が並んでいる。
というか……この辺りはＬｖさえ上げれば変化させられるものみたいだ。
それでも数が少ない。
和風な国じゃ盾の品揃えは期待できないか。戦国時代とかに盾が使用されていたとか聞かないし、何が理由か知らないがこの国は盾の品揃えが悪いんだろう。
……メルロマルクの親父の店以外の武器屋じゃ盾が珍しい方の武器だったのを思い出すな。
宗教上の敵が使う武器ってことで使用が忌避されていたらしい。
「鎧とか買い替えるかい？」
「そうだな……」
「じゃあ予算もあるし、良さげな鎧を買おう。内側にはくさりかたびらを着用すれば安全だと思うよ」
「ケッ！」
俺が空唾を吐いて答えると、絆は直前までの表情を驚きに変えた。
「な、なんでそんな不快そうに答えられなきゃいけないわけ？」
当然の反応だが、くさりかたびらは俺にとっては鬼門だ。
俺にそのくだらない装備を見せつけるな！
「俺はくさりかたびらは好かない」
「ああ……そう……変なところに逆鱗があるね」
「ところで防具屋なのはわかるが、なぜ着物とか羽織が売っているんだ？」
雅な感じがして良くはあるんだろうが、絆が着けているボロボロの羽織とかを見ていると防具として機能するのか疑問に思ってしまう。
まあ、魔法とか特殊な加工がされているのかもしれないが、防具屋で売る必要はないはずだ。
「そう思うなら効果を見てみれば？」
で、着物と羽織に近づいて確認する。
う……なんだこれ？　地味に防御力が高いじゃないか。
見た目と効果が釣り合ってないぞ。
道理で絆が羽織を愛用しているわけだ。
「オレのはグラスがくれたものなんだけどね……」
「違い目をすんなよ」
少しボロイな、と思ったら数年前のものなのか。長い戦いの末にボロボロなのか。
……さすがに着物や羽織を俺は着けたくないぞ。
しかも地味に高い。
とりあえず良さそうな素材で作られた鎧で我慢しよう。
ただ……武者鎧に見える。
良質な木と金属、漆で作られた鎧らしい。
まあ、これで我慢しよう。
リーシアの方は胸当てとかの方が似合うか。
この辺りは売っていたから、買って着させる。
「着替え終わったか？」
「は、はい」
「着ぐるみがもう過去の事に思えてきた……」
リーシア＝着ぐるみだったが、今は胸当てを着けた冒険者だな。
腰に小太刀を付けているからくノ一っぽい。
リーシアがくノ一みたいに動けるとは思えないがな。
それとも、いつか変幻無双流のババアみたいに動けるようになるのか？
いやいや……。
「じゃあ行くか」
鎧がガチャガチャと音を立ててうるさい。サイズも合わなくて違和感がある。
やっぱ武器屋の親父が作ってくれた鎧が一番だな。
蛮族の鎧も鎖がカチャカチャ音を立てる時があったが、不快ではなかった。





とはいえ、防御能力は程々に上がった。

で、市場を歩き回って強化に必要な素材を買い集めて盾に入れる。

実戦で楽に戦える程度には鍛えておかないとこの先、生き残れるか非常に怪しいからな。

まだＬｖが低いからなんとも言えないが、繋ぎで使う盾であっても馬鹿にできない。

「通行手形ってのはどこで買えるんだ？」

「前に立ち寄ったギルドだよ」

「ああ、あそこか」

やっぱ役所みたいな側面があるのは変わらないのな。

なんて思いながら市場に並ぶ大地の結晶も値段交渉をしながら買う。

魔力回復の鉱石で、俺を召喚した方の世界の魔力水と同じくらいの価値だ。

だが、俺やリーシアにとってはカルミラ島のボスよりも少し多いくらいの経験値をくれる驚異的な素材と化す。

純度とか大きさで手に入る経験値量に差があるみたいだけど、経験値を金で買えると思えば利用しない手はない。便利な道具があるもんだ。

まあ、どこまで通用するかは知らないが。

「さて、通行手形を買って、さっさと目的地に向かうか」

「そうだね。長居をしていると……」

絆がチラッと後方に視線を向ける。

するとどう見ても俺達を追跡しているっぽい連中がいるようだ。

大方、金の成る木に見える魂癒水の製造法を捕まえて白状させようとか考えているのではないだろうか？

「ついでにリーシアさん用に札でも買っていく？」

「札？」

「魔法道具の一つかな？　上位者ともなると自分で込めた魔法を具現化させる媒体になるけど、魔法の心得のない人でも使い捨てで使える」

ふむ……悪い手ではない。

「なら俺が持ってもいいんじゃないか？」

「オレは攻撃用の札を人に投げつけても効果が出ないから尚文も同じなんじゃない？」

……ありえる。

俺の盾は相手を傷つけることに関しちゃ、かなりシビアだからな。

爆弾を自作しても制限に引っ掛かるところを見るにおそらく使えない。

俺と絆は対人能力に難があるからなぁ。

リーシアは何をさせても平凡なのが短所だが、人を攻撃できるという、現状では戦力として頼りにせざるをえない要素を持っている。

威力は実際に使ってみなければわからないが、本人の攻撃能力とは別だろうし、役に立つだろう。

「わ、私は使えませんよぅ」

「投げたり相手に張りつけたりするだけだから大丈夫だよ」

「そうなのですか？」

絆が案内する店に行くといろんな札が並んでいた。

木の札、紙の札……石の札なんてパッと見、表札にしか見えないな。

どれも素材からデザインまで色々と拘りがあるように見える。

「とりあえず簡単な火の札辺りでも持っててよ。キャンプとかする時に、火を熾せるから」

と、絆が会計に紙の札の束を持っていって精算しリーシアに渡した。

「リーシアさんの世界の魔法がどういうのかはよくわからないけど、魔力を込めるようにして使えば威力も上がるからいざって時に使って」

「は、はい！」

ま、ここぞという時に備えて損はない。

さて……今度は人目を盗んで大地の結晶から経験値を得るとしよう。

結果、俺のＬｖは35まで上昇した。リーシアは僅か数個で同じくらいまで増加したぞ。

俺とリーシアは同じＬｖになるのに必要な経験値に違いがあるのか？

ここまで来ると店で売っていた盾がある程度使えるし、俺の世界の盾の一部も変化条件が解放された。

あとはその日のうちに逃げるように町を出て首都を目指した。

それでだ。道中気付いたことをここで整理する。絆に関してだ。

ここ数日でやはり絆が相当強い勇者であると感じた。

遭遇する魔物を大半、簡単に仕留めている。使うスキルが独特で、今のところ俺でさえも摑みきれていないがな。

まず、絆が魔物相手によく使うスキルを分析してみよう。

一つめは『一式・落とし穴』だ。

絆の目の前に落とし穴が出現するスキルで、突撃してきた魔物にはよくこれで対処している。

深さは俺の腰くらい。そこまで深いものじゃない。

もちろん、ただ穴を作り出すスキルなので効果自体は期待できないが、相手に大きな隙が生まれる。

絆はその隙を衝いて魔物を一撃で仕留める。

釣竿であったり弓であったり鮪包丁であったりと、様々な武器に変えて仕留めるその動きはなかなかのものだ。
ワニのような鱗が生えた強そうな魔物……大顎鮍りという魔物を相手に、俺が足止めをして絆が一瞬で皮を剥ぎ取って仕留めた時は驚いた。
なにせ倒すと同時に皮が綺麗に剥げていたんだから。
二つめは『一本釣り』だ。
魔物の口に釣竿を引っかけて釣り上げる。
釣り上げられた魔物は仰向けに落下するもんだから隙だらけ。
他にも色々とスキルを持っているらしいが、ここ数日はこの二つのスキルだけでどうにかできている。
そして最後が、謎のルアーをぶつけるスキル。
見た感じだと相手の防御力を下げる……のか？
リーシアの攻撃が深く刺さったところを見るに防御力低下系だと思う。
聞いてみてもいいけど、何度か見ているうちにわかったから聞いてはいない。
何だかんだでグラスやラルクと同等の強さを持つ奴なんだと思った。
これで対人戦闘ができれば万能戦士なんだがな。
手に入る経験値自体はなぜか多めである現状……リーシアがＬｖ42まで上昇した。
やや強めの魔物だからか上がりもなかなかだ。

そして国の首都に到着した俺達なのだが……。
「警備が厳重だな」
「あそこさえ突破できればどうにかなるとは思うんだけどね」
室町時代みたいだった町並みから完全に江戸みたいな町に辿り着いていた。
完全に和風な城が遠くからでも望める。
ただ、やはり住人にちょんまげとかはいない。
現在俺達は龍刻の砂時計がある、冒険者ギルドのような施設を遠くから見つめていた。
敵も馬鹿ではない。



まあ、敵が誰なのかはよくわからないが国のお偉いさんに賢い奴が混じっていたんだろう。
万が一に備えてのことなのか龍刻の砂時計にも厳重な見張りが配置されているようなのだ。
「どうしたものかな……」
四聖の勇者が逃げ出したと想定するとか、間違ってもメルロマルクの連中よりは頭の良い奴が揃ってんな。
強行突破して突っ込むにしても対人攻撃ができるのがリーシアだけじゃ心許ない。
いや、否定しているわけじゃないんだ。
「この辺りで山籠りでもしてＬｖを上げて物理で突破するのはどうだろうか？」
「ちょっとゲーム的発想すぎない？」
絆の指摘はもっともだな。
何がＬｖを上げて物理で突っ込むだ。自分でツッコミを入れたい。
「それに何だかんだでＬｖ上げていたら波の期日が迫るだけだと思うよ」
「む……確かに」
絆がどこの砂時計で登録しているか知らないが、それなら待った方がいいだろう。
旅をして五日経過している。
あと一週間と二日待てば波が起こって国外脱出できるがそれは本末転倒になりかねないだろ。
そもそも俺達のやるべきことはなんだ？
霊亀を操って俺達の世界を滅茶苦茶にしたキョウを粛清することだろ。
ものすごく遠回りなことをやらされそうな事態になっている。
それは避けるべきだ。
時間がもったいないし逃げの戦略だろ。
しかも狙われている立場でもあるし、一週間も潜伏するのは正直きつい。
というかなんで俺はどこへ行っても指名手配される立場になるのだろうか。
「かといって、あの警備の中をどこかのスパイ映画みたいに見つからずに行けというのは酷な考えだぞ」
「まあ……それができるなら苦労はしないよね」
「ふぇえ……どうするんですか？」

「そもそも絆、本当に龍刻の砂時計に行けば脱出できるんだよな?」
「今更何言ってるの? 砂時計にオレが辿り着けば間違いなく成功するから安心していいよ」
それが不安なんだよ。と、言いたい気持ちを飲む込む。
「あんまりじろじろ見てると怪しまれるから少し離れて話をするか」
「うん」
ギルドの建物から離れて俺達は川辺で会話を再開する。
「あの建物は何に使うんだ? やっぱりクラスアップか?」
「転職のこと? それもあるけど、どちらかというとドロップ確認かな。龍刻の砂時計でドロップを確認すると、地方の疑似的な装置よりも手に入る量が多いんだってさ」
「勇者にはいらないものだな」
「そうだね。勇者は自由にドロップを出せるし、不必要だね」
「じゃあ、一般冒険者のフリでもして近寄るのはどうだ?」
「ダメだね。あそこまで行くには厳重な審査があるんだってさ。しっかりした身分証明書を提示しないと行けない。国の重要施設だからね」
ふむ……偽造は無理か。
どこかでコネとかできればいいが、そう上手くいきそうにないか。
「それにこの国の眷属器の所持者が貸ってこないとも限らない……仲が悪い国だからね」
「待て、眷属器の所持者って本か?」
「本の眷属器? 違うよ。この国は……鏡の眷属器だったかな?」
「鏡か。何ができるんだ?」
「さあ……オレもそこまで詳しいわけじゃないから」
何だろう。俺の脳裏に童話の白雪姫が浮かんでくる。
白雪姫の鏡は世界で一番美しいのは誰? って質問に答えているけど、無限迷宮から出たのは? で、場所とかばれてたらシャレにならない。
滞在は非常に危険だな。



「どうしたものか……って、よく考えたら俺達ってどれくらいの強さで、あの警備網を突破できるのかわかってないな」
正面から行って、実は突破できるとかだったら笑い話になるぞ。
「オレは対人攻撃はできないけど、むざむざ捕まるようなことはないと思うよ? 迷宮にぶちこまれたのだって動けなくされていたからだし……」
絆自身の強さを疑っているわけではない。
これまでの旅で相当強いのは理解しているつもりだし、対人戦で攻撃こそできなくても足止めとかはできるのは想定している。
「ただ……重要施設だからかなりの手練れが警備しているのは想像に難くないね」
「とはいってもな」
ラースシールドはそろそろ使えるみたいだから、向かってきた敵を焼き払うとかならできなくはない。そのまま正面突破するのも手だろう。
「オレや尚文は大丈夫だけどリーシアさんが一番の問題になるね」
「なんでだ?」
「だって一斉攻撃をされたら守りきれないでしょ?」
……ん? なんか引っかかるぞ。
俺に守りきれないと言うのか? 盾の勇者である俺に。
基本的に守ることしかできない俺に守りきれないとか、絆は俺を過小評価しすぎだぞ。
もしかして俺は料理と商売担当とでも思ってんのか?
「絆、言ってはなんだが俺には範囲防御スキルくらいあるんだから守りきれないなんてことはないぞ」
「ああ、そうなんだ」
「そうだ。リーシア一人なら簡単に守れるぞ。リーシア程度なら」
「ふぇぇぇ……」
「どうしたの? 何か不快なことを言っちゃった?」
「守りきれないわけがないと言ったまでだ」

「まあ専門だもんね。なら突っ込んでみる？　なにもまともに戦う必要なんてないし、大きな代償を支払う覚悟があるならオレだって対人攻撃ができないわけじゃないんだ」

「カースシリーズか？」

「似たようなものだよ」

似たようなシステムで動く絆の武器に、俺と同様にカースシリーズがないとは考え難い。

俺の持っているラースシールドにある攻撃スキルや霊亀の心の盾のように、専用効果で例外的に対人攻撃ができる武器があるのだろう。

ただ、カースシリーズみたいに代償が大きいだけでな。

「できれば避けたいけど、時間がもったいないし、ここでグズグズしてるよりはいいかもね。最悪、尚文に転送スキルを唱えてもらえばいいし」

事前にポータルスキルの使用が可能かは調べてある。

一応、使うことができそうだけど、俺を召喚した方の世界のポータル地点はなかった。

だから行ったことのある、登録した場所しか現在飛べる場所はない。

「龍刻の砂時計の近くで飛べるかわからないぞ？」

何だかんだで転送不可な場所がないわけじゃない。

龍刻の砂時計の前まで行って、何もできない可能性もゼロじゃないんだ。

警戒するに越したことはないだろう。

「そこは最悪、飛べそうなところまで逃げる……かなー」

「行き当たりばったりだな」

「何もせずにいるよりはいいでしょ？」

「そうだな」

強行突破とかむしろ俺の流儀かと思うが、今までやったことは……ないな。

指名手配されている時に国境にある砦を突破しようかと考えたけどやらなかった。

予定ではするつもりだったけど黒幕である三勇教の教皇が出てきたから未遂で済んだんだ。

「ふぇええ……あの中を行くんですかぁ？」



「何脅えてんだよ。行くに決まってるだろ」

「ふぇええ……」

「これで上手くいったらゆっくり釣りでもしたいね」

「死亡フラグを立てるな。やる前から不吉になるだろ」

「あはは、そうだね。尚文、もしもの時はグラスに……なんてね」

「お前な……はぁ、それじゃあ行くか」

そうして俺達は何食わぬ顔で龍刻の砂時計がある市役所みたいな建物に近づいていく。

ん？　なんか騒がしい感じがする。建物の入り口に人だかりができている。

このドサクサに紛れて近づけるか？

人混みの中に入るか迷って絆の方に意識を向ける。

絆も眉を寄せて頷いた。

「なんの騒ぎだ？」

それとなく住民に尋ねる。

「お前知られえのか？　隣国の天才術師が四聖と眷属器しかできなかった龍刻の砂時計間の転移を開発したんだと。その実験で我が国に来たんだってさ」

「へー……どんな奴なんだ？」

これは渡りに船というやつだな。いや、時間を置くべきか考える必要がありそうだ。

それとなく、建物の入り口から中を盗み見る。

天才術師ね……キョウを彷彿とさせるが別人だった。

外見は、どっかの漫画か何かで見るような学生服に武者鎧を着たような格好とでも言うべきか？

この世界には学校とかあるのか？　なんか変な格好だな。

髪は後ろで纏めていて男ポニーテール。

元康みたいな上じゃなくて下の方で纏めているようだ。

その背後にはなんか女が数名いる。

前に絆と一緒に国の情報を調べた時に聞いたやつか。転送スキルの再現って話。

デマとかガセじゃなかったのな。
「上手くいったな」
「さすがです！」
「上手くいくと信じていました！」
何か女共が天才術師とやらを褒めまくっているぞ。
で、国の代表っぽい奴と握手をしている。
ちょうど警備が厳重な時に来てしまった感が半端ないな。
時間を置いてから強行突破するか。
と、振り返って人混みから抜け出そうとした矢先。
「あああああ――――！」
建物の中から……代表っぽい奴が、絆を指差して大声を上げた。
「お前がなぜここにいる！　逃げられない監獄に――」
「チッ！」
絆が一歩踏み出して龍刻の砂時計へと走り出した。
確かに見つかってしまった以上、今ここから撤退したとしても警備が厳重になるだけだ。
ならば一か八か賭けに出るのは悪い手じゃないな。
リーシアを見るとオロオロと落ち着きのない様子で辺りを見渡している。
いじめられたくなくて仲間に命令されて万引きをしようとしている女子中学生かお前は！
リーシアの手を握ってから俺はそっとスキル名を唱えた。
「流星盾！」
バァッと俺の周囲二メートルに結界が生成されて野次馬と番兵が突き飛ばされる。
「く、曲者だ！」
番兵の声に警備兵共が一瞬で戦闘態勢に入り、龍刻の砂時計に並んでいた冒険者達と天才術師一行が一斉にこちらに振り向く。
俺が番兵を突き飛ばすと同時に絆が龍刻の砂時計目掛けて駆け寄る。

しかし要所の守りを任せられているだけあって警備兵の動きは早く、しかも内部が役所のようになっているので机等が障害物となっている。
しかし、そんなことも意に介さず、絆は机を足場として大きく跳躍して進む。
すぐに室内にいる警備兵が矢を射るが羽織で弾いて駆けていく。
俺達も後を追って流星盾で突き進む。
流星盾は防御能力も高いが、仲間以外の相手は弾き飛ばす効果もある。
刀や槍で突いてくるけど、今のところは壊れる気配はない。
そう思っていたら天才術師一行とやらが俺目掛けて近寄ってきた。
代表の目付きが悪いな。なんかむかつく感じの、キョウに似た目をした奴だ。
「騒ぎを起こす奴は仕留める！　行くぞ！」
「はい！」
「くらえ！」
なんて言いながら取り巻き臭い女共が流星盾に向かって攻撃してきた。
耐えられるか？　そう思った矢先に甲高い音と共に流星盾は破壊された。
「ふぇえええ！」
「いいから下がってろ」
リーシアを守りきれるとは言ったが、案外きついかもしれない。
ラフタリアなら、取り巻きの女共辺りに一撃を加えているところだ。
この世界のことはまだ掴めていないけれど、だいたいの奴は強いんじゃないかと思う。
道中の魔物の経験値が高めだった。つまり比例して冒険者や武道に心得のある者はきっと俺のいた世界よりもLvが高いと思われる。
絆が転職とかクラスアップのことを言っていたが俺のいた世界のように一般は40が上限とは限らない。割と開放的で高Lvがぞろぞろといたらあまり強くない俺の流星盾を突破するほどの強さも十分にありえるんだ。
まだまだ強化が不十分なところがあるからな。
「喰らえ！」

女共が天才術師の声に応じて下がる。
何をするつもりだ？
ま、こっちの勝利条件は絆が龍刻の砂時計に触れることなので、俺に意識を向けられるなら問題はない。
何やら集中したかと思うと巨大な炎の玉を作り出して俺に向かって投げつけてきた。
ん？　何だか上手くいけば跳ね返せそうな気がする。
「おりゃあ！」
盾で飛んできた火の玉を天才術師様に思い切り撃ち返す。
「何!?　ぐあああああああ！」
天才術師は意表を衝かれて炎の玉が命中し、火だるまになって転がった。
結構勢いよく燃え盛っている。
「きゃあああああ――！」
辺りで騒がしい悲鳴が起こる。その声でその天才術師の名前が聞こえなかったぞ。
「く……まだまだぁああ！」
天才術師は黒コゲになりながらも立ち上がり、俺を睨んだ。
案外タフだな。
やがて天才術師は刀を持ちだして俺に斬り付けてきた。
咄嗟に盾で受け止める。
「ふん、愚かな。俺のＬｖの高さを知らずに受け止めやがって、盾ごと斬り裂いて――」
ガツンと妙な衝撃があった。
ま――……攻撃力は程々にあるんじゃないか？
悪いが俺の防御力を突破するには足りないみたいだが。
「自信があったようだが、受けられないほどじゃないな」
受け止めた盾に力を込めて天才術師をドンと押す。
すると一瞬の間を置いて、後ろへ吹き飛んだ。
というところで絆の方に目が行く。



あ、絆が警備兵に追い詰められそうになっている。
警備兵共が少しずつ、ぞろぞろと絆を包囲している。
「エアストシールド！　セカンドシールド！　ドリットシールド！」
ボンボンと絆の前に足場として盾を出現させる。
「尚文、ありがと！」
絆がウィンクしてこっちに礼を告げて盾を足場にして跳躍していく。
もう龍刻の砂時計は目の前だ。
「させるかー！」
天才術師が絆に向かって近寄っていく。
何をするかはわからない。とりあえず妨害を……。
「一式・落とし穴」
そう思ったところで絆が天才術師の足元に落とし穴を呼び出す。
スポッと腰まで落とし穴にはまって、ガツッと転んだ。
「く……だが、この程度！」
「――様！　おのれ、邪魔をして！」
即座に上がろうとしたが既に手遅れだ。
なんか女共が激怒して攻撃しようとしている。
しかしそれよりも早く絆は龍刻の砂時計に触れて、こっちに振り向いた。
「じゃあ行くよ！　帰路の龍脈！」
ふわぁっとポータルシールドとは違った、柔らかな光が俺の視界を埋め尽くす。
「こんなことをして……絶対に許さないぞ！」
天才術師とやらが怨嗟の声を俺達に向けて投げかける。
「知らんな。俺達はお前等に付き合っているほど暇じゃないんだ」
なんかものすごく睨んでくる。初めての敗北とかか？
気持ちはわからなくもないが俺達だって無茶をしなきゃいけない理由もあるし、お前のいる国の常識が通じない

場所だってある。
絆や俺を変な場所にぶちこんだ国のルールなんて守る必要は毛頭ない。
「覚えていろ！　絶対にこの屈辱は晴らしてやる！」
変な因縁がここで生まれてしまったような気がするが、俺は用事が済んだら元の世界に戻るので、できれば会いたくないな。
天才術師とやらが絆を追いかけようと走り出したところで、俺達に絆の転送スキルが作動した。
完全に周囲の光景が切り替わる。
何だろう。この世界に来る途中で通った穴みたいな光を連想させるが、もう少し柔らかい。
俺が言葉を出す前に……視界が変わり、西洋風の格好をした連中が受け付けをしている役所になった。
先ほどまでいた場所の色違いみたいな感じだ。
成功か？
なんて考えていると、その場にいた連中が一斉に俺達の方を向く。
「あ……」
で、視線は絆の方へ集中した。
「キズナ様！」
「ただいま」
「よくぞお帰りになりました！」
俺は辺りを確認した。
で、絆に対して親しげに……その場の代表臭い奴が目頭を熱くして興奮気味に握手を交わしている。どうやら、安全な国へ移動することができたみたいだな。
「さっきの奴が追いかけてくると思うか？」
「帰路の龍脈を再現したのなら、無理だと思うよ。一度行ったことのある龍刻の砂時計じゃないと成功しないから」
なるほど、つまり奴はこっちまで追いかけてくることはできないと。
念には念をとしばらく見張っていたが、変化はなかった。
「どうやら問題はなさそうだな」
と、俺は一息ついたのだった。

## 七話　波の伝承

絆の転送で着いた国は割と西洋っぽい趣の、俺にとっては馴染みのありそうな感じの国だった。
中世の城みたいなのが懐かしい感じがするってのはどうなんだ？
ただ、中世とはいっても国違いのような差異を感じるのは気のせい……か？
俺のいたメルロマルクがイギリスっぽい中世だとしたら、こっちはドイツっぽいとかそんな感じだ。
絆のお陰で俺達を歓迎してくれるらしい。
国の重鎮というか王様っぽい奴が出迎えてくれた。
「キズナ様、よく無事に帰還なさいました。配下の者の話では、かの国の無限迷宮に捕らえられていたとのこと……真実が明らかになったので正式な抗議をする所存です」
謁見の間に通されて俺達は絆と共に話をする羽目になっている。
面倒だとは思うが、絆の話ではラフタリアを捜す手伝いを絶対にしてくれるとのことだ。
「ええ、ここにいる異界の四聖勇者である尚文のお陰で脱出不可能と言われていた無限迷宮から出てくることができたんだ」
異界の四聖勇者という単語を絆が言った直後、周りの連中の表情が険しくなったぞ？
「え……」
「何か？　間違っても彼らはオレを助けてくれた人なんだから無下に扱うような真似は許さないよ？」
不穏な空気を感じ取って絆が眉を寄せて不快そうに言う。
それで聞けばいいが、俺の世界の連中だと聞き入れることはないと思う。
こちらではどうなんだろうな？
「は、ハッ！」
「で？　なんでそんな態度を取ったのか……教えてくれない？」

絆が首を傾げて尋ねると、王様っぽい奴が視線を泳がせる。

絆は無言で近づいて、脅すような口調で詰め寄った。

何だかんだで絆も結構、詰問が得意じゃないか。

「教えて？　ね？」

「わ、わかりました。我等が連合の眷属器の所持者達も知っている事情なので、四聖の勇者であるキズナ様も知る必要のあることでしょう」

そう言って、王様っぽい奴は咳払いをしてから話し始めた。

「まず前提として覚えていただきたいのは、四聖とは世界の危機が起こった時に人々を救う役割とは別の、本来の役目があるのです」

「そんな話あったっけ？」

「あくまで伝承の中で僅かに触れられていることでございます」

これは俺の方の世界でも似たようなことをフィトリアが言っていたな。

波が来るよりも前に四聖が欠けていると波が厳しくなるって話だ。

「この世界では波と呼ばれる現象に見舞われております。キズナ様も理解されていると思います」

「視界に残り時間が出ているね。これが波でいいんでしょ？　じゃあ波とは……何？」

「他世界との衝突融合現象と古い文献には残されています」

ふむ……薄々は感じていたが、グラスの世界を目の当たりにして確信へと変わってしまった。

だが、本題はそこではない。

「次、どうしてグラスやラルク兄さんは尚文の命を狙ったの？」

そう、今までの旅で俺は絆にこれまでの経緯を、グラスと戦ったところまで話した。

「世界がこれ以上の融合を果たすと滅びてしまうという伝承のためです」

「は？　なんで世界が滅ぶの？」

「わかりません。ですが、伝承にはそう記されております」

「……うーん。で？　尚文の命を狙う理由は？」

「四聖とはその世界の要石のような存在なのです。波が起こった時にその世界の四聖全てが失われたら、負けた世界は滅び、勝った世界は延命ができると記されています」

「ふーん……」

絆の声が冷たくなっていく。

俺だって驚きだ。

他世界の四聖を波が起こっている時に殺すと世界が延命できるなんて事実……知らなかったぞ。

なるほど、グラス達の狙いはそれなのか。

他世界の四聖を殺すことで自分達の世界を延命させる。

そういえばラルクも似たようなことを言っていたような覚えがあるな。

俺達の世界のために死んでくれとか……キョウも似たようなことを言っていた。

霊亀を操った時に、どうせ滅ぼす世界なんだから利用したっていいだろうって……。

これはその意味もあったのか。

他に霊亀の上にあった寺院の壁画に書かれていた桂一という過去の勇者の文もこれを伝えたかったんじゃないだろうか。

この情報だけでも、結果的にとはいえ、別の異世界まで来た意味はあったな。

「尚文、困ったことになったね」

「そうだな。仮に俺とお前で戦うことになっても勝敗は付かないだろうしな」

「そうじゃないよ!?」

突っ込みを入れてくる絆に、俺はリーシアを守るようにして盾を向ける。

今までの会話から絆が俺達をどうこうするとは思えないが、その仲間が同じとは限らない。

俺がそう思っていることが伝わったのか、絆はすぐに王様っぽい奴に告げた。

「他の世界を犠牲にして、自分達は生き残る……それしか方法がないの？　色々と試した？」

「そ、それは……」

言い淀んで王様っぽい奴は絆から顔を逸らす。

「はぁ……そんなことをしてたのね。まったく……オレがそんな真似を推奨すると思ってたの？」

「いいえ……」

「伝承だけを信じるなんてバカバカしい。どのような現象であるのかをちゃんと調べてからでもいいでしょ?」

うわ、素で善人臭いセリフ。寒気がするぞ。

「相手の世界を滅ぼすのは最後の手段であって、推奨されるものじゃない。それにオレは人と戦えない勇者だってわかってるでしょう?」

「いえ、四聖は世界を守る要石であり、他世界の四聖を殺す役目を持つのは眷属器なのです」

ああ、俺の世界も四聖による他世界侵略は禁止してるようだったしな。

俺がこの世界にいるのだって例外処理っぽかった。

考えてみれば指揮官が最前線で戦って、もしも討ち取られたら総崩れだ。

創作物では主人公がそんな風に戦ってかっこいいんだろうが、現実は非情だな。

で、グラス達は眷属器の所持者とか言ってた覚えがある。

なるほど、一応筋は通っているようだ。

「どっちにしても変わらないでしょ。尚文もオレも対人攻撃の能力は基本的に低いんだから」

「一人じゃまともに戦えないってのは同じだな」

対人戦ができないわけじゃない。何だかんだで防御力が高い俺が先頭に立って、みんなを守りながら敵を倒すのは変わらないからな。

……この結論に絆も至っていると思っていいな。

その点で言えば人に傷を与えることができない絆の方が致命的な気もする。

ネットゲームじゃ対人要素があるゲームで、狩り専門という魔物を倒すことだけに意識を割いているプレイヤーがいる。

そのプレイヤーは魔物相手だとかなり強いが対人となると全く戦力にならない。俺のネット仲間にもそういう奴はかなりいるし、ギルド戦とかにまったく顔を出さない連中だっている。

言うなれば絆はその色が非常に濃い。

俺のいる世界の眷属器の所持者……七星勇者が怪しいが、そいつら相手に絆は一人じゃ戦えないどころか足手まといになりかねない。

対人能力に難点を抱えているにもかかわらず、他世界の刺客を返り討ちにするようなことを推奨するのか?



ゲーム的に言えば俺はともかく絆は致命的だ。

例外で俺のラースシールドみたいな武器があるようだが、それでも厳しいだろう。

「とにかく、世界のためといって他の世界を滅ぼしていい理由にするのは早すぎると思う。オレからグラス達に言うから、グラス達がどこにいるか知っていたら教えてほしい」

「それが……グラス様を驚異的に強くする画期的な方法があると、波が発生した時に若と共に他世界に行ったきりでして……」

若? 若って誰だ?

雰囲気的にラルクか? もしもそうだったら俺も若と呼ぶことにしよう。

アイツ、俺の事を坊主と連呼するしな。

「はぁ……となるとその足で尚文達と合流してこの世界に戻ってきた……のかな? とにかく、グラス達を捜すところから始めなきゃいけなさそうだね」

「はい。ですがキズナ様、できれば御身は安全な場所で全てを見守っていただきたいのですが……そちらの異世界の四聖に命を狙われる危険があると思うので」

「尚文達がそんな真似をするはずないでしょうが」

「お前を殺したら日本に戻れるんだったら考えるぞ」

「ふぇえええ! な、何を話しているんですかぁ?」

リーシアが俺の言葉に奇声を上げる。

うるせえな。少しは脅迫もしておかないと舐められっぱなしだろ。

完全に観光ガイドな状況の絆だけど、何を仕出かすかわからないんだぞ。

「本気でやる気はないくせに。尚文は本当に人が悪いなぁ……」

「勝手に抜かしてろ」

「オレがグラス達を説得するから一時休戦してほしいんだよ。どうやらこの世界の眷属器の所持者が起こした事件だし……グラス達も協力的だったってことは許されない蛮行だったんでしょ?」

「まあお前等と争っている暇はないな」

「でしょ? 味方は多いに越したことはないからさ」

こっちにも事情はあるが……先ほどの事実に関して大きな問題があるのは確かだ。
それをきっと絆も気付いている。
だからこそ、この……世界同士で四聖を殺し合うという戦いの話を信じていないのだ。
「わかった。で？　これからどうするんだ？」
正直に言えばラフタリアの捜索を最優先したい。
ラフタリアやフィーロがいないのでは話にならん。
「とりあえずは……みんなの捜索を第一に行おう。本の眷属器の所持者がいる国へ外交で文句を付けなきゃいけないしね」
「安っぽい言い回しだな。遺憾の意とか言えよ」
「難しく言えばいいってもんじゃないでしょ。とにかく、国の人達に協力してもらって世界各地を調査させてもらうから」
「俺達みたいに逃亡中かもしれないってところか？」
帰路の写本というスキルが使えない国へ飛ばされていたら安全な国へ逃げるのも一苦労だろう。
俺達だってかなり大変な状況だったのだ。
もしも、俺達が迷い込んだ無限迷宮みたいな監獄が他にもあるんだったら、ラフタリアやグラス達が迷い込んでいても不思議じゃない。
俺達が助けに行かないとダメだろう。
「前に人捜しが得意な人がいるって話をしたでしょ？　その人を呼ぶから、わかってるでしょ？　エスノバルトを呼んで」
絆はそう言って王様っぽい奴に誰か人を招集するように頼んでいるようだ。
……とりあえずは、これで話は済んだと見ていいのか？
「うん。それじゃあお願い」
「明日にはいらっしゃると思います」
「だってさ。じゃあこれからどうしようかね。尚文」
「ラフタリアやグラスの消息が掴めるのなら待つしかないか……」
俺は絆に顔を向けて答える。
「できるならいつでも行動できるように準備しておきたい」
「根を詰めすぎても良くないよ。今できることをするっていうのは賛成だけどね」
むう……案内がいる分、俺がいた方の世界よりはマシだけど、どうもわからないことが多くて歯痒いな。見知らぬ町や国で物怖じすることなどなかったのだが……。

## 八話　狩猟具の勇者の帰宅

その人捜しが得意な奴を呼ぶというので俺達は翌日まで待機することになった。
「これから、どうするんだ？」
「そうだね。ここでなら帰路の写本が使えるし帰りはすぐだね。ついてきて」
「何かあるのですか？」
リーシアが不安そうな表情で尋ねる。
「変なところへ連れていくなよ。時と場合によってはポータルで逃げるからな」
「しないしない。まったく、これだけ一緒にいるのに疑うとか……」
ふむ……確かに人間不信も限度を超えているような気がしなくもない。
ラフタリアがいたらツッコミを入れてくる頃だろうな。
ああ、ラフタリアは一体どこにいるんだろうか。
不安でしょうがないな。
「とりあえずついてきてよ」
「はいはい。どこへでも行く」
俺達は絆の後に続く。
城下町を抜け、街道を道なりに歩いていく。
この辺りはメルロマルクを彷彿とさせる風景をしているな。

そう思いながら歩き、出てくる魔物を適当に仕留めて進む。足取りは速い。

で、城下町を出て少し進んだ先にそれなりに大きな町があった。

見た感じ商店は程々で住居がほとんどを占めているようだ。

振り返ると城下町が見える。衛星都市というやつだな。

ここから城の方へ通っている住人とかいそうだ。漁港があるっぽい。

で、しばらく歩いていくと、それなりに大きな石造りのマンションみたいな家の前で絆は足を止めた。

「ここはさ……オレがみんなで住める場所ってことで建ててもらった家なんだ」

「へー……」

家には鍵が掛かっている。

絆は懐から鍵を取り出して扉を開けた。

ギィ……ッと音を立てて扉が開いて絆は中に入る。

中は普通に石造りの家……だとは思うけれどちょっと文化的かもしれない。

一階は客間なのかテーブルが置いてある。台所もあるようだ。

「ただいまー」

……返事はない。

建物の中に入った絆は室内を何度も確認する。

そのまま二階に上がっていった。

一階で休んでいればいいのか？

手頃な椅子に腰かけて絆が戻ってくるのを待つ。

リーシアも旅の疲れからか座り込んでうつらうつらし始める。

それからしばらくして絆が降りてきた。

「勝手に寛いでいるがいいよな？」

「うん」

「で？　何をしていたんだ？」

「留守なのは……わかっていたんだけどね。久しぶりの我が家に戻ってきて……何も変化がないことに驚いてさ」



「そうか？」

我が家ねー……異世界で自分の家なんて作ったことがないから今一つピンとこない。

だが、絆にとってこの家が我が家だったのだろう。

「殆ど埃が積もってないんだ……。長い間、無限迷宮に収監されていたから、ここもなくなってしまったかと思ってた」

「残っていて良かったな。誰か清掃してくれていたんじゃないか？」

「多分……ね。グラスかな？」

「真面目そうだもんな」

「うん……」

今気付いたんだけど、客間の隅にある棚に写真が飾ってある。

そこには絆とグラス、そしてラルクやテリス……他に知らない連中が勢ぞろいで写っていた。

みんな朗らかというか楽しげ……達成感に満ちた表情をしている。

一目で友情とかの繋がりがわかる写真だ。

この中でどれだけ絆との繋がりが残っているのか……家の状況から考えて心配する必要はなさそうだな。

……何だろうか。正直に言えば……少し羨ましいな。

俺はこんな幸せそうに集合写真を撮るような間柄の仲間は少ない。

せいぜい信頼している仲間といえばラフタリアやフィーロ……メルティくらいなもんだな。

リーシアは正直言って行く場所がないし、目的があるから俺と一緒にいるだけだし、エクレールや変幻無双流のババアもまだ信頼関係を結ぶほどの仲ではない。

ラフタリアの同郷であるキールだって、まだ俺の事を信頼なんてしてないだろう。

いずれ俺も絆みたいに信頼できる仲間達とこんな写真を撮るような関係になる時が……来るのだろうか？

……永遠に来ないような気がする。

俺はこんなに嬉しそうに一緒にいられる仲間達なんていない。

……わかっていたが、少しつらいな。

異世界の連中なんて信用できない。

そう決めて、信じることを放棄して進んできたんだ。
きっと世界を平和にして、元の世界に帰る時も絆みたいな信頼し合う仲間達と幸せそうな集合写真なんて撮れない。そう思えた。
「色々と聞いていいか？」
「何を？」
「ここに来るまでにある程度は聞いていたが、具体的にグラス達とはどんな経緯で知り合って、ここで生活をするようになったんだ？　嫌なら話さなくていい」
「別に嫌じゃないよ。オレとグラスが出会ったのはもうずいぶんと昔の話だよ」
俺の問いに絆は良い思い出を振り返るように語り始める。
まだゲームの世界に飛び込んだと思っていた頃の絆は気ままに釣りなどをしながら少しずつ強くなろうとしていた……らしい。
国の援助も程々、今よりもこの国は国力が低く、跡目争いとかいろんな面倒事があったそうだ。
それで……絆がグラスと遭遇したのは隣国での出来事だったらしい。
とある流派の門下生達が……扇の眷属器の選定を受けたんだと。
扇の眷属器に選ばれた者が竜退治に出るとかそんな話だったとか。
流派の門下生が上からドンドン眷属器に挑戦しては選ばれずにいた。
だが、そこで出生の関係から見下されていたグラスが扇に選ばれて眷属器の所持者になってしまったらしい。
「出生？　なんで見下されていたんだ？」
外見も強さも、かなり上の方に入るであろう真面目っぽいグラスを馬鹿にするなんてそいつら馬鹿じゃないのか？　変な家の出とかで疎まれていたりしたんだろうか？
……まあ実際、俺も、世界が大変なのに宗教の関係で差別を平然とするような場所に召喚されたわけだが。
「そこはグラス自身の問題だし、オレが勝手に話していいものじゃないから聞き流してほしいな」
「あー……わかった」
「後は、そうだね。選ばれなかった兄弟子達が密かに不満を言って、旅立つと同時に仲間から追い出した感じかな」
「どこの世の中にもクズはいるんだな」
選ばれなかったから選ばれた奴を仲間はずれとか……どんだけクズなんだろうな。
「ま、グラスが死んで次の眷属器の所持者になるんだとか妄想してたみたいだよ。後で戦ったし」
「そこはいい。グラスとはどう出会ったんだ？」
「隣国の草原で魔物と戦っていたところにオレが通りがかって……意気投合して、一緒に倒しやすい魔物を探して……ってのが始まりさ」
俺とはずいぶん違うんだな。
俺の場合は攻撃できないから攻撃手段が欲しくてラフタリアを購入して……。
この時点でもう関係に違いがあるか。
やはり俺は……誰かと平等で話はできないんだな。絆とグラスの関係みたいなのを俺はラフタリアとの間に築ける自信はない。
「その後は順々に仲間が増えていって騒がしくも楽しい旅になっていった感じだね」
と、絆が写真の人物を指差して色々と紹介していく。
やはり、俺とは違うんだと自覚させられるのに十分な出来事だった。
ここは絆にとって掛け替えのない大切な場所なんだろう。
俺にはそんな場所がないことに若干の悔しさを覚えた。だが……俺は元の世界に戻るために戦っているんだ。羨ましいと思うのが間違っている。
そう……思い込むことにした。

その日は絆の用意した家で休むことになった。
幸いにして空き部屋が何部屋かあったので割と久しぶりにゆっくりと休めたような気がする。
そんな夜のこと。
絆の家のテラスで町並みを見ていると、絆が外出するのを見かけた。
どこへ行くんだ？
ふと振り返る。部屋の中ではリーシアが黙々と何かを書き記している。
……まあ、何かあったらポータルで逃げればいいか？

音を立てないようにして俺は部屋から出て絆の後を追う。

見知らぬ町並みを歩いていくと、夜の砂浜が見えてくる。

絆はランプを片手に海の方に歩いていき、武器でもある釣竿にルアーを付けて海に投げる。

……また釣りか。

やはりというか、絆は釣りが趣味なのか、暇さえあれば釣りをしていた。

「ん？　ああ、尚文か」

「ここは穴場か何かなのか？」

「んー……ここじゃニシンくらいしか釣れないかな」

「ニシンねー……日本にいる魚も釣れるのか？」

俺もピッチに冤罪を被せられて無一文になった時に釣りをしていた。

見覚えのない異世界の魚だったので、名前はわからない。

「一応ね。目利きをするとそう出るから」

「へー……」

絆が釣竿のリールを巻いて再度、海へ投げる。

「ここで釣りをしてると、帰ってきた！　って気持ちになるよ」

「そんなものかねー」

「尚文も元の異世界に戻った時に思うかもよ？」

「割とあっちじゃ根なし草だったからなー……」

一応はメルロマルクの城が拠点なのか？

正直居心地は悪いけど……ポータルで帰れたから便利だっただけだな。

絆みたいな自宅はない。

強いて言うならフィーロの引く馬車の中が自宅と言えば自宅か。

う……なんか絆と比べて負けたような気持ちになってくる。

「お!?　釣れた！」

絆がぴちぴちと跳ねるニシンを釣り上げて自慢げにしている。



あー、はいはい。凄いな。

「さてと……手始めはこんなところかな。じゃあ奥の手を――……」

絆が何やらごそごそと緑色に光る宝石が付いたルアーを取り出して釣竿に付ける。

「これで上手くいけば面白いものが釣れるから見ててよ」

「ニシンしか釣れないんじゃないのか？」

「これも聖武器の力かな？　まあ、見てててって」

そう言いながら絆が何度かキャスティングを繰り返していると、釣竿がガクンと曲がる。

「ヒット！」

絆は興奮気味にリールを巻いて……魚が水面に浮上してくる。

「デカ！」

そこにはあまりにも大きな……ニシンが姿を現していた。

絆がそのまま釣り上げる。

「どう？　さすが異世界って感じだよね」

「もはや魔物だな」

「否定はしないよ」

これは明日の朝食とかに出てくるのだろうか？

大きすぎると大味になるからあまり褒めたくはないのだがな。

煮付けとかにするのも悪くはないか……？

刺身は……ニシンの刺身はあまり聞かないような気がする。

「ルアーを替えることで釣れるのか？」

「一応ね」

「スキルか何かか？」

「ううん？　アクセサリーだよ？　尚文も武器に付けないの？」

「付けないな」

「結構馬鹿にできないよ？」

「強化方法か？」

絆の強化方法は俺の盾とは理が違うらしくて使えなかった。

だから強化方法であるなら俺が盾にアクセサリーを付けても意味はない。

「大きな枠に当てはめるならそうなのかな？　このルアーを付けないと大きなニシンは釣れないし、ステータスチェックすると釣り変動ってのが作動するね」

……待てよ。似たようなものを見たことがある。

昔、武器屋の親父が盾に付けるアクセサリーをくれたことがあったな。

最終的に流星盾に似た結界を生成して壊れてしまったが、もしかしたら盾にアクセサリーを付けることで、本来は持たない加護を得られる可能性があるぞ。

これは試してみてもいいかもしれないな。

「ちなみにこのルアーは戦闘にも使えるし、割と気に入ってるよ」

「じゃあ俺も頼んでみるか。自作するのも悪くはないな」

武器屋の親父がくれたあのアクセサリーを思い出すに、俺が何かできるようなものではないと思ったが、絆の話じゃとりあえず作ってもよさそうだ。

親父に出会えたら改めて聞いた方がいいような気がするが、念のため絆に聞いてみるか。

「魔力付与とかで何か仕込むのか？」

「あー……そういうのは付与師……細工師とも違う細かい付与をする人に任せるんだけど、土台がないと付与師は何もできないって」

ふむ……じゃあ細工師が介在する意味はあると。

そう考えると俺でもできることがないわけじゃないんだな。

「ただ、聖武器や眷属器に付けると想定外の付与になるから付与師泣かせでもあるらしいけどね」

うーむ……仮に俺でも扱えるアクセサリーを手に入れたとして、異世界に帰った時、代わりが利かない事態になったら困りそうでもある。

より良い素材を手に入れたけど、付与が上手くできなくて……ってパターンだな。

とはいえ、今は利用しない手はないか。



「じゃあ暇があったら自作してみるか」

「尚文が作るの？　ならオレのルアーも作ってくれない？」

「なんでお前に作ってやらなきゃいけないんだよ」

「それは……一緒に旅をした仲じゃないか」

「まあ……練習で作ってみてもいいが、ルアーとなるとプラモなんかの次元なんじゃないか？」

「木製とか金属製とかあるじゃないか」

他にも形とか色々とあるな。

キラキラと光る装飾や、目の辺りは成り金っぽく宝石とか使って、かなりケバイ感じにしてみよう。

魚は光るものに集まるみたいだし……などと絆に作ってやる適当なルアーを考えてみる。

俺のはどうするかな？

親父が作ってくれたのを真似ておけばいいか。

盾の宝石部分に被せるカバーっぽい感じで……ふむ、作ってみるとするか。

今のところは、調合とかすることが少なくて手が空いているところだ。

気まぐれで作るのも悪くはない。

なんて思いながら絆が釣りをする光景を見ていたのだった。

## 九話　式神

翌日の昼。

昨夜、絆が釣り上げた大きなニシンを調理して朝食を食った俺達は、人捜しが得意という奴が来るのを城に戻って待っていた。

「そろそろ来るってさ」

「本当なのか？」

リーシアはぶつぶつと何やら紙に書いた文字を見て呟いている。いい加減、待ち疲れたな。





なんて思っていると、絆に城の連中が声を掛けてきた。

「あ、もう来たみたい。じゃあ行こうか」

「やっとか。ほら、リーシア行くぞ」

「は、はい」

勉強熱心なのはいいが、お前は何を勉強しているんだ？

なんか『おはようございます。おはようございます』と同じ単語を復習しているように見えたけど。

で、リーシアを連れて絆と共に玉座の間っぽいところに顔を出すと……頭にサークレットを付けた魔導師みたいな服装……というのか？

手の込んだ装飾が付いたローブを着た少年っぽい奴が、これまた凝った錫杖を持って城の連中と一緒に待ち構えていた。

髪の色は銀色っぽいなぁ。肌も整っていて、切れ長な目が印象深い。

目の色は赤っぽいけど、黒か？　なーんか不思議な色合い。
美少年だなぁ。髪が長いと女の子と間違えそう。
そんな奴がふわふわと浮いて待っていた。
絆が見せてくれた集合写真に似た奴がいた気がする。多分同一人物だろう。
「お久しぶりですね、キズナ。定期的には行方を探っていたのですが……気付くのに遅れてしまいました」
「居た場所が居た場所だからね。仕方がないと思ってたから」
「この子もさみしがっていたんですよ。受け取ってください」
「ありがとう。エスノバルトが持っていてくれたんだね」
「ええ、最初はグラスが面倒を見てくれていたのですが、彼女も忙しくて……しかも危険な場所に連れていくわけにはいかないとワタシに預けていったのですよ」
絆はそう雑談をした後、木札？　を受け取り……軽く振る。
すると……札から煙が出て、ペンギンが姿を現した。
大きさは俺の腰くらいだろうか。
こう……ペンギンと称するのが一番しっくりくるが、表情が豊かで全身を使って喜びを表している。
なんというか……ヒヨコから少し成長した頃の、喋り出す前のフィーロみたいな奴だ。
なんだアレ？
「ペン！」
「久しぶりだね。オレもまた会えてうれしいよ」
「ペン！」
ペンギンは絆に飛びついて頬擦りをしている。その動作は昔のフィーロのそれと全く同じだ。
「そういえば、六日ほど前でしたか……その子が騒いだのは。あの時気付いていればもう少し早く行動できたかもしれなかったのですが……」
「敵地だし、エスノバルトに任せるのは危険だよ。結果は変わらなかったと思う」
「旧交を温めるのはいいが、説明してくれないか？」
仲間内でしかわからないことを話されてもこちらは全然会話に入ることはできない。



「ああ、ごめんごめん。彼の名前はエスノバルト。で、この子は俺の式神であるクリス」
「式神ってそういや前に言ってたな。魔物とどう違うんだ」
「式神というのは人や物によって手に入る……魔物とは違う存在というのが正しいかな。この子はオレのボディーガードの役割があった子なんだ。対人攻撃ができないオレのね」
「違いがわかりづらいが……続けてくれ」
俺の認識で当てはめてみよう。
オンラインゲームの中には魔物を使役して戦わせることができるゲームが存在する。
この場合は単純に手に入れた魔物を戦闘に出すことで、プレイヤーの補助をしてくれる。
俺に例えるとフィーロとかがその役目を持っている。
それ以外で使うものとなると、召喚とかプレイヤーが干渉して呼び出す疑似的な戦力だろうか？
ゲームごとに違いがあって、境界は曖昧だな。似て非なるものと思うことにした方がいいだろう。
「はじめまして……異界の聖武器所持者様……船の眷属器の所持者であるエスノバルトと申します。以後よろしく」
「盾の勇者である岩谷尚文だ。俺の後ろにいる奴はリーシアだ」
自己紹介はある程度はした方がいいのか？
何でも見通しそうな顔をしているが……ま、こんなのさえ面倒臭がったら話にならないか。
「ということはグラスと同じく眷属器って武器を所持した奴なのか？　船はどこだ？」
「ここですよ」
そう言ってエスノバルトはローブの裾を上げて足元を見せてくれた。
足元には円盤みたいなものがあって、エスノバルトを乗せて浮いていた。
ＵＦＯ？　なんとも変な奴だ。
「よろしくお願いします」
亜人というか、この世界独自の連中か？
「何かコイツ、違和感がある気がするのは気のせいか？」
ここに来るまでにこの世界の連中を見てきたが、このエスノバルトという奴、何か違う。

「やっぱり気付いちゃったか。そう、エスノバルトはこの世界を守るために代々遣わされている魔物の末裔なんだ」

「ええ……」

そう答えるエスノバルトの雰囲気に、俺は誰になんとなく似ているのか気付いた。

フィトリアだ。

こう……どこがと聞かれると答えづらいが纏う空気とでも言うのだろうか？

じゃあ見た目は魔法が得意そうに見えるけど、実は武闘派とかか？

ペンギンを絆に渡していたし……正体はペンギンとかか？

どこの世界でも鳥類が世界を守っているのか……なんて思っていると。

「本当の姿は可愛いウサギなんだよ」

「キズナ、人をつかまえて可愛いとか言わないでください」

「ウサギ？　ペンギンじゃないのか？」

「なんで？」

「いや、絆の式神がペンギンだって言うから……」

「ペン？」

何だろうなこのペンギン。

カルミラ島に存在する伝承の魔物ペックルを連想するな。

頭にそっと赤いサンタの帽子を被せたくなる。

「ああ、そこから。この子は……オレとグラスが式神生成をしたらなぜかこんな形になっちゃっただけだよ」

「ふむ……」

ま、本当の姿を見たいとか思っているわけじゃないし、いいか。

するとエスノバルトがしばし考えるように手で顎を撫でていた後、ボフンと姿を変える。

ウサギが直立で立っている。

カルマーラビットファミリアを見ているような既視感があるな。

錫杖と知的な目つきがなければ魔物と間違えかねない。

だが、間違いなくコイツはこの世界でフィトリア枠に該当する存在なのだろう。



いても不思議じゃないよな。

「こちらの姿の方がお話ししやすいでしょうか？」

「珍しいね。エスノバルトがその姿で話をするって」

「ナオフミさんの人柄なのでしょうか……不思議と嫌ではないと感じさせてくれるのですよ」

「へー……尚文って動物には好かれるのかな？」

フィーロに抱きつかれた時の事を思い出す。いやいや、アイツは刷り込みで俺の事を好いているだけだろ。

「……で？　お前が人捜しが得意な奴でいいのか？」

「……無限迷宮に迷い込んでしまっていたキズナを見つけられない程度ですが……」

「謙虚なのはいいが、程度を知れよ。お前を頼りに今まで待っていたんだからな」

ここでできませんとか言われる方の身になれ、というかフィトリアのように、実は万能だったりしないのかコイツは？

そもそも逆に考えてみれば絆がこの世界にいないことを占える程度には能力がある、ということだ。

実際、絆は無限迷宮という異世界みたいな場所にいたんだからな。

ま、どちらにしても頼りにするには少々不安な奴だ。

フィトリアみたいな奴かと思ったけど、なんか違うし。

「複数の方法がありますが、どれがいいですかね」

エスノバルトがローブの中からジャラジャラと物を取り出して広げる。

占い師が持っている棒の束とか水晶玉……他に札？　トランプみたいのもあるしアルカナカードだったか？　というのもあるようだ。

胡散臭いウサギだな。先ほどより威圧感がない。

船の眷属器の勇者らしいけど……途端に信用できなくなってきた。

「エスノバルト、尚文になら式神を授けてもいいと思うんだ」

「なるほど、人捜しなら式神がいいかもしれませんね」

「式神にはそんな技能まであるのか？」

「それ以外にも勇者なら結構面白いことができるようになるし、護衛にピッタリだとオレは思うよ」

「ペン？」

俺は絆が抱えているペンギンを指差して尋ねる。

ペンギンが首を傾げる。

そうだ、お前だ。

お前……本当に絆の護衛なのか？　ものすごく頼りにならない気がする。

「それにしても式神を落としちゃ話にならないだろ」

「う……」

護衛とはぐれちゃ意味がないな。

……なるほど、式神とは俺がいた異世界だと使い魔とかそんな感じなのかもしれない。

魔法書で読んだような覚えがある。

その使い魔を呼び出すのに必要な道具をなくしていたから呼び出せなかった。

生憎俺は使い魔なんて使役してなかったが……自分の身を守るには確かに使い魔とかがいればいいかもしれない。

俺にはラフタリアやフィーロがいたから必要性を感じてなかったからな。

「この子がいればすぐに見つけられると思っていたのですが……」

「無限迷宮に落とされちゃお手上げってわけでね」

肩を軽くすくませて絆は答えた。

「この子はグラスと一緒に作った子で、グラスの居場所を指示してくれるとは思う。だけど尚文の仲間まではカバーできないんだ。一緒にいたらいいけど、そうとは限らないでしょ？」

「……そうだな」

ラフタリアがどこにいるのかを俺は掴みきれない。

奴隷紋も相当近くにいないと反応しないようだし、このままじゃラフタリアを捜すのも一苦労だ。

「では、式神生成の儀を行いましょうか……やりやすいように龍刻の砂時計へ行きましょうか」

エスノバルトがウサギから人の姿に変身してふわふわと移動を始めた。

全員で龍刻の砂時計のあるギルドっぽい建物のところまで来る。



そこでエスノバルトはシャランと錫杖を鳴らして、トンと床を叩く。

すると魔法陣のような幾何学模様が床に広がっていく。

淡く輝くその文様は幻想的な光景だと思う。

魔法を使いこなす大きなウサギというのも相まって、俺を召喚した異世界にある龍刻の砂時計でのクラスアップよりも異世界に来たと実感させてくれる。

「まずは媒体にするものと担い手の血を……」

「媒体？　札とか宝石とかか？」

「それも必要だけど、この場合は使い魔を形作るのに必要なもの……かな。オレがクリスを作った時は様々な魔物の素材を使ったんだ。強い護衛が欲しいと思ってグラスと一緒に決めてね」

ふむ……とはいえ悩ましいな。

こういう新しく何かを作るのは言ってはなんだが、凝り性な俺からすると迷うものだ。

キャラクター作成をする時にランダムでボーナスポイントを振り分けることができるゲームだと悩む人間は多いと思う。

ゲームを開始もせずにいかに多いボーナスを引けるかと作戦を練り続けるんだ。

そういう意味で俺も凝り性な方だった。

持っている素材の中で一番良いものはなんだ？

霊亀辺りの素材か？　使い魔とか……調査中に霊亀から採取したものとかがその筆頭だ。

ただ、亀になりそうだよな。

霊亀と聞いてオストを想像するが、どちらかというと亀は防御系のイメージだ。

防御しかできない俺に防御系の使い魔が増えても無意味だ。

「一度作ってしまえばいつでもやり直しはできるから安心していいよ。あくまで最初の……具体的な形を取るための媒体でしかないから」

「拘る必要はないと？」

「本来は拘るものらしいけど、聖武器の所持者なら……抜け道があるんだ。もちろん、オレとは系統が違うからできないかもしれないけど」

ああ、勇者独自のってやつか。なら拘る必要性もない。

面白くないとも思うが、素材にまで拘っていたらキリがないのも事実だな。

「尚文が捜している子が持っていたものとかがいいと思うよ？　それを使えば持ち主まで導いてくれると思うし」

ふむ……確かにラフタリアを特定するものがいいかもしれない。

ただ、現在俺が所持しているものの中でラフタリアのものってあったか？

基本的に本人のものに俺は手を出したりした覚えはない。

装備は与えているが返却してもらったことはないしな……。

「龍刻の砂時計からの力もあります。武器に入れた素材とかも引き出せます。何かありませんか？」

エスノバルトが錫杖を振るうとピコンと盾のアイコンが浮かんで、入れたものの一覧が出る。

龍刻の砂時計はこんなこともできるのか。何かないか探してみるとしよう。

そう思いながら盾に入れたものの一覧を見ていて、あるものに目が留まる。

「こ、これは……」

ラフタリアはラクーン種という亜人だ。

そして、ラフタリアからもらったとある素材を盾に入れているのだが、その素材からまだ新たな盾は出現していない。

そう……まだラフタリアが幼かった時に散髪した髪が盾の中に入っていた。

これがいいか。

出せるかどうかわからないが、出ると信じてポンと指示する。

すると淡い光と共に盾から……ラフタリアの毛髪が出てくる。

「これがいい」

「わかりました。では少量の血を」

エスノバルトが魔法でラフタリアの毛髪を浮かせ、俺は指の先を軽くナイフで切って血を滲ませる。

……初めてラフタリアを購入した時の事を思い出す。

思えば、ラフタリアと奴隷契約した時もこんな感じで魔法陣が敷かれていた。

「では式神生成の儀を執り行います」



エスノバルトがそう告げてラフタリアの毛髪と俺の血に魔力らしきものを振りかける。

船の眷属器が淡く輝いて、エスノバルトの魔法に力を貸しているように感じる。

辺りにふわりと蛍火のような明かりが浮かび上がる。

すごく幻想的な光景だ。

式神か……作り出される者がラフタリアの所在へ導いてくれるのか？

材料はラフタリアの毛髪。

ラフタリアの所在を教えてくれるというのならこれ以外で考えられるものはない。

『今ここに願うは彼の者を守り、力となる者、彼の者の魔の欠片にして眷属の創造也。産まれいずるは守りの使者――』

ふわりと俺の周りを漂っていた淡い光がラフタリアの毛髪の元へ飛んでいき、毛髪を包み込んでいく。

なんか凄い光景だな。

これだけカッコつけて失敗したとか言われたらたまったもんじゃないとは思うが、見入ってしまう。

式神か……絆の式神に目を向けると、大人しく絆に抱きついているようだ。

どこかの騒がしい奴とは違って、大人しいといいんだがな。

仲間が増えると思っていいのか？

うーん……どんな扱いをすればいいのか悩むな。

Lvとかあるのか？　それとも別の何かがあるのだろうか？

どちらにしろ、俺の護衛を兼任するらしい存在なのだから、ある程度考えて運用しないといけないだろう。

「これは――」

エスノバルトが何か切羽詰まったような声を出す。

「なんだ？　失敗か」

「いえ……想像よりも具現化が早い！　この媒体の持ち主は一体――!?」

光が一層強まり、目が眩む。咄嗟に盾を向けて、守りに入るが……。

パチパチと俺の盾が光に反応する。

「ふぇええ……」

「落ちついて！　エスノバルト！　大丈夫？」
「う……うぐぐ……だ、ダメです。抑えきれません！　皆さん、避難を！」
バッとエスノバルトが杖を掲げるのをやめて大きく下がって伏せる。
リーシアを守るように立って、盾を構えているが、視界に先ほどから何かが浮かんでいる。
式神の――

**式神の盾の条件が解放されました！**

**式神の盾**
**能力未解放……式神使役　式神強化**

ボフンと大きな煙が閃光と共に湧き立ち、辺りが白く染まる。
「ゲホ！　ゲッホ！」
手で何度も煙をあおいで飛ばすが、煙たいのが一向になくならない。
そう思いながら息苦しいのを堪えて、煙の根元に目を向ける。
「ラフー！」
ピョンと煙の中から何かが俺に向かって飛びかかってきた。
「な、なんだ⁉」
咄嗟に受け止めて飛びかかってきた物体を確認する。
すると俺に飛びかかってきたのは……タヌキのようなアライグマのような何かだった。
何かというのは具体的に、何なのか説明するのは難しいからだ。
昔アニメで見た可愛らしいアライグマのようで、何か違う。
狸っぽいというか……茶色いふかふかの毛皮、ふにふにの四肢で若干メタボっぽい。
犬では絶対にない耳と顔つき……うん、アライグマとも狸とも言い難い不思議な顔つきだな。
尻尾は体と同じくらいの太さと長さがあって……あえて言うなら子供が好きなマスコットとかそんな感じ。



ただ、狸っぽいマスコットは相当珍しい方だけどな。
そんなマスコットっぽいアライグマのような狸のような生き物の両脇を掴んでいる。
なんとなく優しげに片手を上げて肉球を俺に見せながら親しげな目で俺に向かって鳴いているのだ。
「ラフー！」
「状況からして……コイツが式神という奴でいいのか？」
盾を新しく出現した式神の盾に変化させる。
同時に奴隷紋と似たような、新しい項目が出現した。
どうやらこれが式神らしい。
Ｌｖとかは……どうもなさそうだ。ステータスはそこまで高くはないな。
式神強化という技能を発動させる。
すると手持ちの素材で式神のステータスをドーピングさせたり、様々な技能を授けたりできるようだ。
バイオプラントを弄る時のような項目の他に、手持ちの素材でも強化可能と記されている。
「ラフー！」
尻尾を振って、式神は俺に愛嬌を振りまく。
肌触りは悪くないな。少しごわごわしてるけど、気にはならない。体温も程良い。
「ふぇええ……」
リーシアがおずおずと脅えた様子でこっちを盗み見ている。
何を警戒しているんだか。
「どうやら上手く式神を作り出せたようだね」
「ペン！」
「一時はどうなるかと思いましたが……上手くいって良かったですね」
エスノバルトもホッとしたように近寄ってくる。
「これが式神か？」
「ラフー！」
式神が、スタッと俺の盾の上に乗ってなんか両腕を上げてポーズをとっている。

どうだ！　と言わんばかりだ。

「そうだよ。で、武器に式神を強化するものとか出なかった？」

「出た。式神強化だとさ」

「うん。それそれ、尚文なら好きなんじゃないかと思って」

「お前もそういうの好きそうだよな」

「わかる？　オレもこういうのに凝る方なんだ」

「ほう……気が合うな」

「ふふふふ」

「ふふふふ……」

「ふぇえ……なんか邪悪な感じがしますぅ……」

リーシアが含み笑いをする俺と絆の会話に脅え始めた。

脅える必要はないだろ。

どっちかというとアンタも好きだねーという、同好の士を見つけたような会話だったんだが。

「と、とにかく、その式神ならば、捜し物がどこにあるか、ある程度導いてくれると思います、キズナも一緒にグラスさんを捜してみましょう」

「だとさ」

「ラフー」

俺が式神に向かって声を掛けると、式神はコクコクと何度も頷く。

あざとくも見えるが、なかなかに愛嬌があるな。

声がなんとなく幼い頃のラフタリアを彷彿とさせるような気がしなくもない。

「尚文、その子に名前を付けないの？」

「名前？　そうだな、式神なんて呼んでたら味気ないもんな」

「ラフー！」

式神が胸を張って自己主張する。

しかし……ラフーっていうのは鳴き声なのか？



変な鳴き声だ……。

よく考えたらラフタリアに対してかなり失礼なことをしているような気がしなくもないが、この際しょうがない。

フィーロはフィロリアルから取ったし……うん、ラフタリアから名前を拝借しよう。

「ラフちゃんだな」

「ラフー！」

「ラフーって鳴くからラフちゃん？　安直すぎない？」

「お前のペンギンはなんでクリスなんだよ」

西洋っぽいファンタジーのキャラクター名みたいだぞ。

間違ってもペンギンに付けるような名前じゃない。

「ちょうどこの子を作ったのが、オレが召喚された日から数えてクリスマスだったからだよ」

「ああ……だからクリスね」

安直なことに変わりはないな。

「だが、俺の方の名前の由来は間違っているぞ。ラフーと鳴くからラフちゃんじゃない。毛髪の持ち主の名前がラフタリアだからだ」

「……あんまり変わってないと思うよ」

否定はしない。そもそもラフーと鳴くとか何の冗談なんだろうか？

「ラフー！」

「ああはいはい。じゃあ別の名前がいいか？」

「ラフ？」

首を傾げたラフちゃん（仮）はすぐに首をブンブンと振る。

「ラフー」

どうやら気に入ったらしいな。

まあ、本人？が気に入っているならいいだろ。

「妙に自我が強いですね。肉体と精神がしっかりするのにもう少し時間が掛かるはずなのですが……」

「素材はお前等からすると異世界の人のものだからなぁ。不測の結果になったんだろ」

ラフタリアってなんか浮いてた感じがするし、どこか特別なんだろう。
俺が育てたお陰で色々と特別な育ち方もしたし、その辺りが盾を通じてラフタリアの毛髪に影響を及ぼしてしまったのかもしれない。
「さて、じゃあラフちゃん。ラフタリアがどっちにいるか占ってくれないか？」
俺の願いにラフちゃんは目を瞑り、尻尾を膨らませ……何かしている。
魔法か？　式神の技能だろうか？
「グラスはどこにいるか教えて？」
絆の方もグラスの行方をクリスに尋ねていた。
「ラフー！」
「ペン！」
そして……二匹とも同じ方角を指差す。
「……横から失礼。ではこの世界地図ではどこですか？」
エスノバルトがこの世界の地図を出して二匹の前に敷く、すると二匹とも同じ場所を指差した。
結果が同じということは、ラフタリアとグラスは一緒に行動していると見ていいのだろうか？
だが、その結果に対して絆とエスノバルトが困ったように唸る。
「良くない結果なのか？」
「まあ……オレ達が逃げたところと同じように関係の良くない国だね。あの天才術師って言われてた相手が所属する国だよ」
「お前等、敵国多いよな」
「そうなんだよね。乱世の兆しとでも言うのかな？　オレが無限迷宮に捕まっていた原因もそういう部分から来ているし、これからどうなるのかな……」
絆は不安そうに声を漏らした。
どこの世界も争いは絶えないようだ。
そういう意味では俺達の世界よりも不安定なのかもしれないな。
メルロマルクとシルトヴェルトは元々戦争するような間柄だったらしいが、世界の危機ということで一応協力関係を結んでいる。



それ以外の国も基本的に波と戦うことを世界会議とやらで決めていたみたいだしな。
逆にこっちの世界では、国同士が争っているような印象を受ける。
もしかして、メルロマルクの女王は有能なんじゃないかと思えてきた。
「……とはいえグラス達はこの世界では強い方なんだろ？　なにせ眷属器に選ばれた存在なんだから」
「そうなんだけど……龍刻の砂時計のところまで来ることができていないということは何かしら苦戦していると見ていいかな」
あのグラスが苦戦している状況ね……一応は強くなってきている俺達だけど、そこへ迎えに行くことはできるのか？
なんか嫌な空気が充満してきたような気がする。
俺や絆は武器の性質上苦戦しただけで実際の強さならかなりのものだと思っている。
その俺や絆の弱点がないグラス達が立ち往生って相当な状況なんじゃないか？
「本の眷属器の所持者がいる国か？」
「……同盟国だね。下手をするとグラス達が捕らえられて引き渡されるかもしれない」
「急いで行くのが得策か」
「うん。ここで手を拱いているよりは遥かにマシだ。すぐに行こう」
「決まりだな」
少々頼りないが、絆にも戦力が増えたようだし、行くか。
「で、絆は仲間を連れていかないのか？」
出発の準備を整えているのはいいのだが、絆の方で仲間が増える様子はない。
「エスノバルトは戦闘は苦手だし……他にも頼れる仲間がいないわけじゃないんだけど」
絆がエスノバルトに視線を向けると、エスノバルトが軽く咳をする。
「キズナの仲間を招集するには数日掛かります……なにぶん、各地に任務で出かけておられるので」
「その間にグラス達に何かあったら大変だ。だから先行して行くべきじゃないかな？」
まあ、わからなくもない。

手堅く戦力が集まるのを待っている間にグラス達が捕らえられてしまったら話にならない。
ラフタリアも同行している可能性が高いんだ。
キョウの野郎に捕らえられたらそれこそ厄介だし、俺はラフタリアを守らねばならない。
毎回毎回、常にギリギリだな。
俺は溜息をついて呟く。
「せめて頼りになる兵士とか国の連中がいればいいんだがな」
「そういう人材は国の守護から離れられないから……」
どこも人手不足というやつなのか。
こりゃあ仲間が足りないと嘆いていた俺と同じ悩みを絆も持っているんだろうな。
「よし、じゃあ出発だ。龍刻の砂時計からの転移で行けるのか？」
「いや、エスノバルトがいるなら高度な転移が使える」
「キズナ、私の船の力で転移することは可能ですが、帰りはどう致しますか？」
「俺のポータルを使うか？」
「それもいいね……一応、時間を決めておこう。その時になったら打ち合わせの場所にエスノバルトが来てくればいい。ダメなら……」
「わかりました。連絡用の札をお持ちください。上手くいけば交信できるでしょう」
便利な道具があるんだな……って俺がいた異世界にもあるか。
どのような機械なのかよく知らないけど城からの要請とかをギルドで知ることができたし。
で、エスノバルトは建物から出てから乗っていた円盤から降りて、円盤の形状を変化させて船に変える。
「では皆さん、船に乗ってください。転移を開始しますよ」
「……ホント、俺の知ってるやつに似た武器だな」
フィトリアの馬車にも転移能力があった。
ポータルスキルは仲間に入れていないと使用できないようだが、エスノバルトの船はフィトリアの馬車のように乗っている相手を巻きこんで転移ができるようだ。
これってポータルとは違うのだろうか？



どうもこの世界の移動手段がわからない。
などと思いながら俺達はラフタリアとグラスを捜しに出発したのだった。

## 十話　刀の眷属器

エスノバルトの船に乗り、空飛ぶ船で移動を開始したと思ったらすぐに転移が作動して、辺りの景色が青白く光る道を船で移動している。
どこかで位置を登録したとかじゃないとなると相当なモノなんじゃ？
「改めて思うけど、さすがは船の眷属器だね。自力で行ったらどれだけ時間が掛かったかわかったもんじゃないよ」
「どんな能力なんだコレ？」
「龍刻の砂時計の繋がりに乗って高速で移動できるんですよ」
うーん……と、つまり龍刻の砂時計同士が結んでいる線に乗っかって移動する能力を持っている？
で、その路線上なら転送可能とかそんな感じなのだろうか？
どうも複雑なシステムに見えるぞ？
「隠れて上空を飛んで転送を使えば、不意打ちとかに便利だよね。前に何度かしたことがあるよ」
「はぁ……じゃあこの近くにラフタリアやグラスがいるのか？」
「いえ……妨害も多いので……できる限り接近できるところまでしか近寄れません」
「不便な能力してんな」
やり方次第で役に立つのかもしれないけど。
しかもエスノバルト自身の戦闘能力はそこまで高くないらしい。
「じゃあここからは空飛ぶ船で移動か？」
「目立ちすぎますよ」
飛行船で移動するとか、的になれと言っているようなものか。
でも高高度に居れば……ってこの世界にも空を飛ぶ魔物とかいるだろうから難しいか。

「後方援護や空爆はできなくはないですけど……どちらにしても要らぬ騒ぎを増やします。逃げる時にのみお願いしたいところです」

「じゃあグラス達と合流が成功したら呼ぶから回収してほしい」

「わかりました。では御武運を」

そうエスノバルトが言ったのとほぼ同時か、視界が切りかわって俺達は地表に降り立っていた。

妨害もされるとか言っていたし、頼りにしすぎないようにするか。

「じゃあ、ラフちゃん。ラフタリアがどこにいるか教えてくれ」

「ラフー」

ラフちゃんが指差す方角を見る。

同様に絆のクリスも同じ方向を指し示していた。

辺りには森が広がっている。

松の木みたいなものも多いし、竹が目立つな。

なんかやっぱり和風な国っぽい。

そうして地図を片手に俺達は進んでいった。

「この国はどんな国なんだ？」

「オレ達が逃亡した国の隣国、文化形態は似た感じだね。ただ、どちらかというと幕末みたいな格好が目立つかな」

違いがわかりづらいが……と思ったところで、森が開けて町が見えてきた。

うん、絆の説明がピンと来た。

木造の家なんだけど、こう……昭和臭のするような大きな看板がある。

右読みの雰囲気のある文字と、中途半端に文明開化したようなちぐはぐな建造物。

アレは電灯で電球か？　すごく不自然な町並みだ。

で、道行く冒険者っぽい連中は新撰組みたいな衣装を着ている。

村人は和服だな。袴が目立つ。

「ふむ……関所とかまたあるのか？」

「こっちは管理もかなり曖昧かなー。国境以外は関所はないと思う。前の国とは似ているけど緩いね」



「なんとも……」

いろんな国があるんだな。

その点で言えば俺がいた異世界は貴族社会の王権制だから、楽といえば楽なのか？

全部把握しているわけじゃないけど。

「じゃあ俺達の服装は目立つんじゃないか？」

「そこまで目立ちはしないよ。隣国とはそこまで険悪じゃないし、流れの冒険者と思われると思うよ。ほら、似たような格好の人がいるでしょ？」

絆が指差すと、俺と似たような鎧を着た冒険者が当たり前のように歩いている。

「それなら安心だ。早くラフタリア達を捜そう。見つけたらすぐに撤退な」

「そうなんだけど……クリス、グラスはどこかな？」

「ペン」

相変わらず指差す方角はラフちゃんと同じだ。

俺達は式神が指し示す方角へと進んでいくことになった。

ラフちゃんとクリスの導きで向かった町で俺達は……なんか長蛇の列にぶつかった。

「なんだ？」

「えっとー……」

絆が列の先頭辺りを見に行って戻ってくる。

「なんか見世物小屋があるみたい。かなり盛況だよ？」

「へー……」

見世物小屋ねー……そういやメルロマルクの商店街にもあったような気がする。

ただ、興味がなかったからどんなものか見たことはないけど。

しかし凄い列だな。俺達が売った魂癒水のオークション会場よりも人がいる。

町の端から端までズラーッと列が続いているようだ。

どれだけ凄い見世物なんだ？　それともこの町には娯楽が欠乏してるのか？

「並んで見てみる？」
「興味ない。暇もない」
今の俺達はラフタリア達を捜すのを最優先にしているんだ。寄り道をしている暇はないだろう。
「だろうね。ワザワザ並んで見るほど暇じゃないし……」
「ラフラフ！」
「どうしたんだラフちゃん？　興味でもあるのか？」
どうも列の先に興味があるのか、ラフちゃんがしきりに鳴く。
ラフちゃんはラフタリアの毛から生まれた存在だ。
ここまで反応されると、気になってくるな。
「見世物って何ですか？」
リーシアの問いに絆が背伸びをして見世物小屋の看板の文字を読む。
「『天から舞い降りた背中に羽のある幼き天女！　一人四〇銅文！』だってさ。それって天使なんじゃないの？」
……背中に羽のある幼き天女？
フッと俺の脳裏にフィーロの姿が浮かぶ。
ラフタリアに意識が行きがちだが、アイツも捜さないといけないんだよな。
「なあ、絆？　この世界には羽の生えた……天使を彷彿させる種族っているのか？」
「聞き覚えがないなぁ……尚文の方の世界には？」
「亜人種にハーピー系みたいのがいるらしいのは聞いたことがあるが、俺の仲間に背中に羽の生えた奴がいる。パッと見は……天使だぞ？」
一応証言と一致している。
天女なんて柄じゃないが、外見は確かに神々しい。
黙っていればな。
「ラフー！」
「ふぇええぇ！　もしかしてフィーロちゃんじゃないんですかぁ!?」
ありえる。



あぶねー、ラフちゃんが騒いでリーシアが詳しく聞かなかったら気付かず通り過ぎるところだぞ。
どうする？　並んで確認するか？
とりあえず列の先頭の方へ歩いていき、小屋から漏れ出る声に耳を傾ける。
「……やー！　ごしゅじんさまー！　メルちゃん助けてー！」
パチンと鞭を叩くような音が聞こえてくる。
今まで聞いたことのない、痛切で悲痛な叫び声だったぞ。
あのフィーロがこんな声で泣くことがあっただろうか？
「ほら、サッサと綱を渡れ！」
「やー！　うう……」
うわ……見世物小屋の外まで聞こえてくるぞ。
「あの天女、何を言ってるんだろうな？　嫌がっているんだろうけどさ、ひでえ話だ」
って見世物小屋から出てきた客が呟く。
ああ、フィーロの言葉をこの世界の連中は理解できないのか。
とはいえ見世物にするってのはどうなんだよ？
ま、見栄えが良いのは確かだろうけど、正体は鳥の魔物だろ？
「ふぇええ！」
「リーシア！　静かに！　同じ言葉を喋ってると勘付かれたらお前も捕まるぞ」
「ふぇ――」
自ら必死に口を押さえてリーシアはコクコクと頷く。
「……やっぱり仲間だった？」
絆が真剣な表情で聞いてくるので俺は頷く。
「助けるにしてもオレと尚文じゃあ難しいだろ？　クリスやラフちゃん、リーシアさんに任せられる？」
「これでフィーロがオークションとかで売りだされたりするんなら金を集める方法がないわけじゃないんだがな。最悪、町の貴族にでも取り入って確保させる手がないわけじゃないが……」
俺が考えつく方法なんてこの辺りがせいぜいだろ。

取り入るとして、魂癒水とかをアピールして製造法辺りをチラつかせることでどうにかできるけど……問題はその貴族に根掘り葉掘りこちらに探りを入れられかねないし、フィーロを助けても人質にされるのが目に見えていることだ。

あまり一ヶ所に滞在し続けるのも危ないし、フィーロがどういった経緯で捕まったのかを調べないと動きようがない。

これで一介の冒険者辺りがフィーロを生け捕りにしたとかなら、取り入った貴族の権力でどうにかできるが、この町の貴族が関わっているなら話は別になってしまう。

下手すれば手のひらで踊らされるぞ。

「どうする？　そっちの手でいく？」

「……できれば権力者に取り入る案は避けたい。手続きに時間が掛かるし、裏に何があるかわかったもんじゃない」

そもそも絆を脱出不可能な牢獄に入れたような国と繋がりのある国だ。

メルロマルクばりの差別意識があるのは簡単に想像できるし、俺達を意識のない間に牢獄にぶち込んだ可能性もゼロじゃない。

要するに権力者が俺達の人相を知っている可能性が捨てきれない。

隣国で騒ぎを起こしたばかりだしな。

幸いにして、魂癒水を購入した貴族の反応からして当面は問題はないとは思うが……長く滞在すればするほど不利になる。

「この見世物小屋……誰が取り仕切っているか調べられないか？」

「うん。それくらいならギルドの方で調べられるんじゃないかな？　ここまで大規模となるとどこが主催かわかると思う」

で、ギルドへ行ってあの店の出資者が誰かを調べてみて貴族に取り入る案は却下した。

そう、あの見世物小屋の出店には貴族が関わっているようなのだ。

となると、かなり強引だが……やるしかないか。

俺は絆とリーシアを手招きして囁く。

「とりあえず……夜、寝静まった頃を見計らって潜入してみよう」



あのフィーロがあそこまで悲痛な声を出しているんだから、急がねばならないだろう。

上手くいけば御の字、失敗するようなら次の手に走る。

失敗した時のリスクがあるからどうしたものか……ま、その辺りは気にしてたらキリがない。

「わかった」

「逃走経路に関しては手がある。早めに……行動開始するぞ」

「は、はい！」

さて、ここでフィーロを救出するために色々と準備をしなくちゃいけないな。大々的な戦闘になるし、盾を見繕う必要も出てくる。

基礎能力の高そうな盾の中で持っている素材を使って強化できそうな盾を見繕う。

ヌエの盾が……うん、キメラヴァイパーシールドの下位互換で使えそうだ。

能力も現在、使える盾の中では高い。

**ヌエの盾（覚醒）　0／35　C**
**能力解放済み……装備ボーナス、防御力3**
**専用効果　雷耐性　夜恐声　雷の盾（中）**

今はこの盾を強化して使うとしよう。

和風な魔物だと思っていたが、どうやらこの世界でも互換があるようで助かったな。

ちなみに覚醒させることで雷の盾（中）へと変化したが……その前は（微小）であんまり役に立つ盾じゃなかった。

夜恐声ってのが何なのかよくわからない。

これも覚醒することで出た効果だ。

まあ、どちらにしてもフィーロを救出するのが最優先だ。

# 十一話　天女救出作戦

夜……町が静まりかえるのを待ってから俺達は市場の方へと向かった。
絆と一緒に忍び足で町の屋根伝いに進んでいる。
リーシアがドジを踏みそうで目が離せないのが嫌なところだな。
一方ラフちゃんは意外と身が軽くて手間が掛からない。媒体の持ち主と同じく奥床しくて良いな。
「この国と隣国じゃ夜間の外出には提灯が義務付けられているんだけどね」
「どこまで江戸風な国なんだ？」
町並みや人の格好は文明開化風なのにな、色々と混在している。
懐かしき江戸……じゃないな。
住民からなんちゃって江戸時代な雰囲気が漏れ出している。
こう……ジャパニーズＥＤＯ！みたいな外人のイメージが混ざった国といった感じだ。日本人なら違和感が凄くある。
「こうして移動していると忍者とか出てきそうだな」
「オレの知り合いにいるよ？　忍者、前に見せた写真にも写ってるよ」
あの中に忍者がいたのか？
コイツの仲間は色々な意味で個性的すぎる気がする。
グラスとかラルクとかを含めてな。
テリス？　知らんな。
「本当か？」
「まあね。もしも会えたら紹介するよ」
「あんまり会いたくないなぁ」
俺の頭にごじゃると喋る影が浮かぶ。
個性がないのが常なのに、奴だけ口癖で覚えられている間抜けな忍者っぽい奴。
「っと、話はそれくらいにして……」



見世物小屋が見えてきた。
「あの中にいると思うか？」
「多分としか言いようがないね。どっちにしても小屋の上は居住区になっててそっちにいるかもしれないけど……」
そういや至近距離なんだから魔物紋で反応が出ないか？
と、魔物紋で俺はフィーロのいる位置を大まかに探る。
迷宮内では反応せず、迷宮を出たばかりでも機能していなかったので、あまり頼りにしていなかったが……反応があった。
どこにいるか方角を調べると……どうやらあの小屋で間違いないようだ。
「じゃあ……姿を隠すスキルを使うから」
絆が釣竿に手を添えてスキルを唱える。
「全隠蔽狩！」
ふわぁっと俺達の姿が何か膜のようなものに覆われて隠れるのがわかった。
そういえば絆は狩猟具の勇者なんだよな。
狩猟って相手を奇襲することも前提にあるだろうから、こういう細かなこともできるのか。
俺は今まで狩っていた魔物のせいかもしれないが、隠れるとかのスキルは持っていない。
ありそうなのはクローキングシールドとかハイディングシールドとかか？
ラフタリアがその辺りでできそうだ。
「ラフちゃんも隠れる魔法とか使えないのか？」
「ラフー？」
うーん……無理っぽいな。首を傾げている。
元がラフタリアだから多分、できると思うんだが。
しかし、今はいろんな技能を覚えさせるのを優先させた方が良さそうだな。
「じゃあ行こうか？」
「そうだな……ところでこのスキルの効果はどんなもんなんだ？」

「魔法で察知でもされない限りは問題ないと思うよ。足音とか声も味方以外には聞こえなくなる」
「便利だな」
「範囲版を覚えるのが大変だったけどね。単独なら低Ｌｖで習得できるんだけど」
「愚痴は程々にしておけ」
「私も唱えますか？」
念には念をとリーシアが聞いてくる。
お前の資質からして唱えられなくはないのだろうが……器用貧乏だもんな。
「ラフタリアならともかく、専門じゃないリーシアに任せる仕事じゃないだろ」
「で、でも……」
「気持ちはわかるが、絆のスキルを頼りにしよう」
「効果時間がそこまであるわけじゃないから早く行こう！」
ピョンと屋根から降りた絆が見世物小屋の方へ向かっていく。
俺達も後を追って、見世物小屋の裏へ回った。
「やはりというか、鍵が掛かってるね」
「鍵開けなんてできるもんじゃないからなぁ……」
「この鍵……警報装置付きで、壊すと音を出すみたい」
「厳重なことだな」
「細工師なら警報装置とか壊せるかもしれないけど……」
……前にも似たような、細工師が必要だとかいう事態があったな。
俺は鍵……パッと見、古臭い錠前に手を触れる。
ピッキングすると警報が鳴るんだよな？
かるーく魔力付与の要領で触れると、装置の全容が見えてくる。
ああ、確かに考えもせずに弄ったら確実に何か起こるな。
だけどこれ……どうにかできそうな気がする。
仕掛けとしては音を立てるだけらしく、どこかに通報するタイプのものじゃない。



防犯ブザーみたいにいつでも解除できるやつだと思っていい。
「防犯装置自体を壊せばお前が錠を破壊できるか？」
「ん？　できると思うけど……何するつもり？」
俺は魔力を両手に集めて……装置の重要そうな部分に一気に流し込んだ。
「ピ――」
甲高い音がする直前、錠前がスパークした。
その後は高音が出せずにピービー低い音を出している。
それも俺が掴んでいたお陰か、絆の隠蔽スキルの範囲で揉み消せている。
「ほら！」
「え？　あ、うん！」
絆が武器を鮪包丁に変えて錠前をスパッと細切れにした。
それだけで完全に沈黙。
後は土でも掛けておけば音は消せるだろう。
「アクセサリーも作れるみたいだし、尚文は細工の心得があるの？」
「俺を召喚した世界じゃな。魔力付与くらいできるだろ？　難しくないぞ？」
まあ、宝石とかの能力を引き出す時の感覚を熟知するまでには多少失敗する必要がある。
その点、破壊するだけなら、割と簡単だな。
今回は音が出る部分に集中して……パソコンの基盤に水をぶっかけるような感じで流し込んだので壊せたけどな。
複雑なものだと無理だろうが、安物っぽくて助かった。
「料理もできて細工もできるなんて多芸だね」
「いいから行くぞ」
「そういえばラフタリアさんが自慢してましたよ。ナオフミさんは手先が器用だから私にも何かアクセサリーを作ってもらいましょうって」
ああ、考えてみればリーシアに何か能力が付与されるアクセサリーを付けさせるのは手だよな。
俺も言われた覚えがある気がする。

修行や他の勇者共を捜す旅や霊亀戦ですっかり忘れてた。

見世物小屋の中に侵入した俺達は室内を見渡す。

昔の長屋みたいな内装でかまどが手前の方にある。勝手口なんだろう、靴を脱いで二階へと向かう感じでそれ以外の店の奥には空の檻が見える。他にも見世物にする何かがあるのだろうが、今回はフィーロだけを取り扱っていると見ていいな。

「そっちじゃない」

絆が見世物小屋の表側の方へ行こうとするので呼び止める。

「でもこっちにいるかもしれないだろ？」

「近いから方角がわかるんだ」

俺の視界にフィーロのいる方角が映っている。

それを追っていけばフィーロがどこにいるかすぐにわかる寸法だ。

本来は脱走した奴隷を追いかけるのに使ったのではないだろうか？

同様に魔物もか？

どちらにしろ、フィーロがどこにいるのかわかって助かるな。

俺達は土足で二階に上がって中を確認する。

廊下があり、その先に何部屋かある。

見た感じ……廊下側に商人なのか貴族なのかよくわからないが見張り臭い奴が酒を飲んで酔い潰れたように爆睡してる。

そこまで広い小屋じゃないからすぐにフィーロを見つけられるだろう。

しかし……酒を飲んで酔い潰れてこんなところで寝るとは、酔っ払いはどこの世界でも共通なんだな。

微妙に暗いが過去に取った夜目が利く技能で多少は見えるから助かるな。

「ふぇえ……ナオフミさん。手を離さないでくださいよー」

リーシアの方は暗すぎてよく見えないようだ。

逆に絆は問題なく進んでいく。



狩猟具の勇者……狩りをする勇者なんだから夜目くらい利いて当たり前か。

「どっち？」

視界には右側の矢印が出ているので、俺は右を指差して戸を開けて室内に入る。

室内には布団が敷かれ、豪快に寝ている身なりの良さそうな男がいる。

更に奥には……金袋か？

コイツ、フィーロを見世物にしてかなり稼いでいるんじゃないか？

非常に不愉快だ。

フィーロは俺が育てた娘みたいな奴なんだぞ。昼間の泣き声だって相当なもんだ。

コイツには制裁を加えてやりたいが……まずはフィーロを救出するのが最優先だ。

そう思いながらフィーロを捜す。

どこだ？　辺りを見渡すが、フィーロがいない。

人間形態で寝かされているとか檻に入れられているとか想像していたのだが、当てが外れたぞ。

もしくはフィロリアル形態か？

だが、室内でフィロリアル形態になっていたら床が抜けるんじゃないか？

せいぜい小さな鳥かごがあるくらいだが……。

というところで魔物紋の矢印が鳥かごを指し示す。

「ピイ!?」

鳥かごの中にいる雛鳥っぽいのが俺達に気付いたのか声を出してバタバタと羽ばたく。

く……さすがに人間相手には気付かれないようにできるが魔物とか野生動物は騙せないか!?

「尚文！　このままじゃ寝てる奴が起きる！」

絆が釣竿を鮪包丁にして鳥かごの魔物を仕留めるかどうか確認してくる。

が……。

「絆、ちょっと待ってくれ。なぜかコイツに俺の仲間であるフィーロの反応があるんだが……」

「え？　でもそこにいるのは雛鳥だよ？　確か、ハミングフェーリーの雛鳥だと思うけど」

ハミングフェーリーね？

なんでコイツがフィーロの反応を示すんだ？
「ピイピイ！」
ハミングフェーリーの雛鳥は檻に全身をぶつけて、俺の方へ羽を伸ばす。
その動作が……昔、初めて人化したフィーロが俺に手を伸ばした時と重なって見える。
「まさか……お前、フィーロなのか？」
ポツリと漏らすとハミングフェーリーの雛鳥はコクリと頷く。
どうやら間違いない。
「とりあえず、騒ぐな。騒ぐと奴が起きてしまう」
フィーロ？は、うんうんと頷いて静かに鳥かごの支え枝に留まる。
どうなってんだ？　何がどうしてフィーロが別種の魔物になって鳥かごに入れられてんだ？
フィーロの背中にはべったりと札が付けられていて、鬱陶しそうにしている。
もしかしてアレがフィーロを別の魔物にさせて、鳥かごに入れているのだろうか？
「この鳥かごを壊せばいいのか？」
「待って、何か細工されている可能性が捨てきれない」
「ちょっと調べてみるぞ」
俺は魔力付与の要領で鳥かごに手を添える。
……何かを増幅させるような感じがして、フィーロに付けられた札に呼応しているように見えるな。
「その札が何かわかるか？」
「使役札だね。魔物を使役するために使う札だよ……だけど使わない時は普通、札に魔物を封印するものだけど……しかも体に溶けずに肌に付きっぱなしってのも変だね」
「フィーロは俺の所有物みたいなものだからな。魔物紋があるから上手くできず中途半端に使役しているってところか」
なんとも下衆な奴だな。
昼間の声から察するに相当なことをしていると見ていいだろう。
報復してやるにも俺と絆じゃ人間相手じゃ無理だ。



となるとラフちゃんとリーシアとクリスだけど……。
「リーシア、アイツに寝ている間に報いを受けさせるか？」
「ふぇえ……ゆ、許せないですけど私じゃできるかわかりませんよぉ」
だよな……制裁を加える手段が心許ない。
リーシアじゃ不安だ。
かといってラフちゃんは対人攻撃ができるほど強くない。
「まあ、リーシアさんの攻撃力を引き上げる方法がないわけじゃないけど、余計な騒ぎになりかねないからここは逃げよう」
「クリスはどうなんだ？　十分に攻撃力があるならやらせるべきだろ」
「ペン？」
「クリスに任せたら……相手にもよるけど怪我じゃ済まないかもしれないよ？」
どんだけ強化してんだよお前の式神は！
だが、手段がないわけじゃないのか。
「使役札を剥がせば拘束は解けるか？」
「簡単に取れないと思うよ？　専門の札とか魔法を駆使しないと……」
「上手く引っ付いていないからポロッと取れるといいんだがな」
「ピイ……」
「魔物紋と似たような項目設定がしてあると厄介だな」
主から離れると作動して死ぬとか、居場所がわかるとかな。
目の前に来ているんだ。
何かでフィーロを助ける方法はないかと魔物紋の項目をチェックする。
んー……そういえばフィーロに付けているのは高度の魔物紋なんだよな。
念のために発動させてみるか。
「フィーロ。少し痛いかもしれないが、我慢してみてくれ」
俺はフィーロに魔物紋を発動させて、正しいかチェックする。





フィーロの腹部に魔物紋が浮かび上がって、苦しげにフィーロが呻く。
が、その時、使役札がペリッと捲れた。
フィーロは気付いたのか、使役札を引き剥がそうと頭を捻ってくちばしで摘む。
付け焼き刃の使役札と深く付けた高度の魔物紋じゃ次元が違うか。
「ピイイイイ！」
「絆、フィーロが使役札を引き剥がそうとしてる。使役札と連動している鳥かごを破壊するぞ」
「もういいの？」
「ああ、鳥かごには警報装置は付いてない。あってもこの状況じゃやるしかないだろ」
「わかった」
絆が鮪包丁で鳥かごにスパンと何度か素早く切りつける。
するとパラパラと音を立てて鳥かごは切断された。
それと同時に魔物紋がスパークしてフィーロが勢いよく札を剥がして捨て去る。
直後、魔物紋の作動を止めるとフィーロがボフッと人型に変身して俺に引っ付いてきた。
「ごしゅじんさま！」
ガシッと抱きついてフィーロは顔を上げる。
「やっと、やっと助けに来てくれたんだよね？　夢じゃないよね」
「ああ、助けに来たのは本当だ。夢じゃないぞ」
すげー珍しい泣きべそをかくフィーロが俺の目の前にいるぞ。
「ラフー？」

ラフちゃんがフィーロの前に顔を出して鳴く。

「んー?」

「ラフー」

「ごしゅじんさま、この子だれー?　ラフタリアお姉ちゃんに似た匂いがするー」

鼻が良いな。さすがはフィーロか。

「この子はラフちゃん。式神という……生き物だ。作り出す媒体にラフタリアの髪の毛を使っているから匂いも似るだろ」

「ふーん……これからよろしくね。ちっちゃいお姉ちゃん!」

「ラフー!」

なんとも微笑ましい二匹だな。そう思っていると。

「なんだ!?」

ガバッと後ろで寝ていた奴が起き上がってこっちを見る。

で、状況的に金の卵であるフィーロが今、逃げ出そうとしていると認識した。

「何者だ!　姿を見せろ!」

そして枕元に隠していたらしき刀を取り出して構える。

「そいつは俺の金づるなんだ!　サッサと返してもらおう」

「く……」

一度発覚すると効果が薄れるのか、俺達を隠していた絆の隠蔽スキルが消え去る。

「ぶー!」

「どうやって使役札を剥がしたか知らんが!　さあ!　こっちへ来てもらおうか!」

そこでブツンと何か、紐が切れるような錯覚を覚える。

たぶん、俺の千切れっぱなしになっていたはずの堪忍袋の緒だと思うが、いつの間にか再生して結び直されていたらしい。

別の異世界に来たことで甘くなっていたか?

「ほう……俺の配下に手を出した分際で、偉そうなことを言うんだなお前は……」



もうどうでもいいか?

コイツに報いを受けさせることを最優先したい。

「リーシア。絆。コイツに地獄を見せてやりたいんだがいいよな?」

「に、逃げないのですかぁ!?」

「逃げる?　それはコイツを拷問して精神を破壊してからだよ」

「ラーフー」

お?　ラフちゃんも俺の気持ちをわかってくれるか?　一緒に不吉な笑みを浮かべてくれたぞ。

しかし、ラフタリアはこういう反応をしない。

やはり個体差があるんだろうか。

などと、どうでもいいことを考えながら、俺はゆらっと体を揺らしてフィーロを捕らえていた見世物商の方に一歩踏み出す。

「曲者だ!　であ――」

踏み出すと同時にヌエの盾の専用効果、夜恐声を作動させる。

盾から『フォー……』という音が軽く響いた。

ごみ専用効果か?

で、見世物商が曲者と言った直後辺りに……。

『キィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイン!』

と超音波みたいな音が室内に木霊し、声がかき消される。

黒板をひっかく音を倍加させたような音だ。

咄嗟に絆とクリス、リーシア、フィーロが耳を押さえた。

「ふぇえええ……」

「な、何この音?」

「あ……あ……」

ん?　見世物商がガクガクと震えだす。

「あああああああ……」

その表情は恐怖に彩られているようだった。
「や、やめろ！　来るな！　近寄るな！」
ぶんぶんと手を振り、逃げるように部屋の隅へと見世物商は移動する。
これは……どうやら俺に敵対する相手に状態異常を与える効果のある盾のようだ。
幻というか、本人の深層意識に働きかけ恐怖心を煽るんだな。
「ラフー」
ラフちゃんの尻尾が膨らむと同時に魔法を紡ぎ出す。
お？　ラフタリアと同じく幻覚系の魔法を使えるみたいだ。
目を凝らすと、見世物商が何から逃げているのかおぼろげに浮かぶ。
なんかぼんやりと幽霊っぽい……コイツのトラウマな相手が追い詰めている……のか？
「お前等が俺に歯向かっていいはずがない！」
自分が見世物として利用した奴らが蘇って怨嗟の声を出している幻でも見ているくさいな。
「だ、誰か！　こいつ等を――」
うん。これ以上騒ぐと人が来そうだな。
俺はツカツカと詰め寄って、刀を持って暴れる見世物商に掴みかかる。
「何をする!?」
刀を俺に向かって振り被ってきたので、受け止める。
カンという音と共に、刀は俺の肩で止まる。
雷の盾（中）が作動して見世物商が感電し、仰け反る。
「な……馬鹿な……化け物!?　ぎゃああああああ!?」
「いいから……恐怖はまだ始まったばかりだ」
絆、余計なツッコミを入れるな。
「尚文、凄く悪人みたいな台詞だよ」
「俺の配下を見世物にした罰、受けてもらおう。シールドプリズン！」
ダメージは入らないみたいだから俺もプリズンの内側に入れて囲む。



盾で作られた檻が出現し、見世物商と俺を閉じ込める。
俺は見世物商の耳元にヌエの盾をかざして夜恐声を大音量で聞かせる。
音量の調整はできるみたいだ。
「うわぁあああああああああああああああああああああああああああああ！」
見世物商の絶叫が盾の檻の中で木霊する。
うっせえな。
「さて……事情を聞くとするか。お前はどこでどうやってフィーロ……違うな、天女を手に入れた？」
「だ、誰が話すものか！」
「あっそ！」
夜恐声の音量を更に強める。
「ぎゃああああああああああああああああああああ！」
で、一旦止めてから再度尋ねる。
「早く白状した方が身のためだぞ。俺は……お前がこうして苦しんでいる顔を見るためにここにいるんだから」
「ヒィイイイイ!?」
ニヤリと笑うと男が震えあがって恐怖で涙を流し始める。
おや？　漏らしたのか下半身から液体が漏れてるな。
だが、フィーロが感じた恐怖はこの程度じゃないと思うぞ？
お前に見世物にさせられた者達はこの程度じゃ許しはしないだろうな。
「ほら」
「お、親から譲ってもらったんだよ！　意識を失っている天女がいたからって！」
「お前の親は何者だ？」
「こ、この町の貴族だ！」
意識を失っているフィーロの外見が見世物にするのによさそうだったから捕まえたと……。
とことんゲスだな。
「お前のバックには他に誰かいないのか？」

「俺は……この辺りの一族の代表として見世物小屋の管理を任されてただけだ！」

一族単位で近隣の町の管理をしてる……？

江戸っぽいから奉行とか……か？　家柄で支配している国なのかも。

その辺りは絆に聞けばいいか。

まあ、コイツから絞り取れそうな情報は全部聞き出せたと見ていいな。

「御苦労、褒美に極上の恐怖を与えてやる。楽になれると思うなよ？」

「ラフゥウ……」

ノリいいなラフちゃん。一緒に笑ってコイツを苦しめようじゃないか。

「ヒ、ヒイイイイイイイイイイイイイイ！」

ああ、ムカつく奴が苦悶に呻く声はなんと心地が良いことか。

下衆な奴を苦しめるってスッとするよな。

俺を苦しめたクズやビッチもこれくらい苦悶の声を出してくれたらいいのに。

「あああ、ああああああああああああああ！」

発狂するかのように体中の穴から液体を滴らせ、嘔吐し、それでももがく様を楽しみ、恐怖に支配されたまま暴れさせる。

やがてスイッチが切れたように泡を吹き、白目をむいて失神した。

「意識を失えば助かるなんて思うなよ」

「ラフラフ！」

更に俺は夜恐声を見世物商の耳元で奏で続ける。

おお、意識を失っても効果があるようだ。

ピクンピクンと痙攣を繰り返している。

意識がなくても、夢の世界というやつで恐怖に支配されるみたいだ。

便利だなコレ。拷問に使える。

今度からこれを使ってみるかな、ふざけた奴に。

まあ精神異常攻撃だから限度があるというか、強い奴には効かないような気もする。



そう思いながら俺は盾の檻が消えるまで、意識を失っても苦しむ見世物商に夜恐声を聞かせ続けた。

「うわ……」

ぐったりと意識を喪失して倒れる見世物商を見て絆が声を漏らす。

いろんなところから様々な物を漏らしているし、未だに悪夢にうなされて顔は恐怖に彩られてるからな。見たら死ぬとかのビデオを見た人間の末路みたいな、壮絶な表情をしてる。

人間、案外タフだよな。

これだけの事があっても実際は死なないなんてさ。

「ふぇええぇ……」

リーシアは見世物商の顔に脅えて震えている。

この専用効果、リーシアに使ったら即座に発狂しそうだな。

使わないいけど……。

「さて、報いは受けさせた。サッサとずらかるぞ」

「そ、そうだね……尚文は怒らせないようにした方がよさそう。だけどズラかるって犯罪者みたいだよ」

やってることは犯罪じゃないか？　完全に強盗だ。人質奪還だけどな。

「ごしゅじんさまありがとー！」

「ああ、はいはい」

なんて話をしていると店の外でビーという音が響いてきた。

なんだ？　と思って戸板を外して外を見る。

すると、役人臭い連中が店を取り囲んでいるようだ。

「アレって見世物小屋の摘発だと思うか？」

「違うんじゃないかな？　俺達の犯行がばれて通報されたとか……かな？」

見張りがどこかで見ていたとか隠蔽スキルで隠していたけど警報を聞かれたとかかな？

「犯人に告ぐ！　早くこの店から出て投降せよ！」

うん。間違いない。

騒ぎを聞き付けて町の連中が野次馬のように集まっている。
「ど、どうするんですか!? あんな人達から逃げきれるんですか!?」
「リーシア。お前は樹と一緒にいたんだから、こういう時にどうやって逃げるか……わかるだろ？」
「ふぇえ？ イツキ様は弓の勇者で在らせられる、と皆が言って戦いますよ」
アイツ、そんなことをしていたのか。
アホだな。
まあ樹の場合、メルロマルクで有名な弓の勇者だし、権力も程々にあった。
わざわざ逃げなくてもよかったのかもしれない。
「それで、どうするの？」
フィーロが俺にぐりぐりとすがりつき、絆が首を傾げて俺に尋ねる。
俺はフィーロにパーティー勧誘を飛ばし、フィーロが了承するのを確認してから答える。
「こうするんだよ。ポータルシールド」
フィーロを助ける前に町の外で取っておいたポータル位置を選択。
一瞬で視界が切り替わって脱出は容易く成功した。
当初から成否にかかわらずこうして逃げる予定だった。
「うわ！」
絆が驚いて辺りをキョロキョロと見渡した。
「やっぱり帰路の写本とは違うんだね」
「規格の違いってやつじゃないのか？」
「かな？ 何はともあれ、これで追っ手を撒けるね」
「そうだといいんだがな」
あの暗闇だったから問題はないと思いたい。
背格好とかで特定されたら困るんだが、警戒してもキリがないな。
「とにかく、早くこの町からズラかるぞ」
「はい！」



「はーい！」
「やれやれ、結局は逃げる羽目になっちゃうのか」
と、俺達はポータルで移動した足で夜中に逃走を開始するのだった。

## 十二話　ハミングフェーリー

夜中の旅で距離を稼いだ俺達は翌朝、隣町に到着した。
「近隣の町で罪を重ねた者達だ！ 見た者は即座に奉行へ通報するように！」
と、立ち寄った町で手配の看板が掛けられているのを見かける。
人相書きで、俺達の背格好が描かれている。
ただ、暗闇だったからかそこまで明確な特定はできていないみたいだ。
あ……式神でラフちゃんの特徴が思い切り載ってるな。隠さないとダメだな。
「ラフちゃん、ゴメンな。今、この場にいると俺達がフィーロを取り返したのがばれる」
「ラフー！」
ポフンとラフちゃんは札に変化して俺の手に収まる。
絵柄がピコピコと動いて、いつでも呼び出せるっぽいな。
絆も同様にクリスを札に戻していた。
で、フィーロに関してだけは顔を含めて明確な特徴として描かれている。
背中に羽を生やした女で外見は幼子。
俺達に連れ去られたとか絆が手配看板を読んで教えてくれる。
「ピイ！」
そのため、フィーロにはハミングフェーリーの姿に変身して俺の鎧の中に隠れてもらっている。
「悪事千里を走るとは言うけど、もう隣町に手配が来てるね」
「なんとも仕事が早いことで……」

逃げることはできそうだが、後々不安になってくる。
「こいつ等何したんだ？」
町の人が噂話を始めているっぽいな。
一応、聞き耳を立てておこう。
「隣町で見ることのできた天女を誘拐したんだと」
「天の使者が天女をお迎えに来たとかじゃねえのか？　忽然と姿を消したと聞くし」
かぐや姫か。
世界観的に間違ってもいない気がするけどさ。
しかし……何だかんだで民衆の噂も真実に近いところを突いてくるな。
今は旅を続けるのがよさそうだな。
「その子のＬｖ上げはどうする？」
やはりフィーロのＬｖも１に戻されていた。
いや……もしかしたら世界を跨いだ影響で１になってしまうのかもしれない。
「リーシアと同じく、俺と絆は一緒にいると上がらないけど経験値は入るから問題ないだろ。当面の問題はクリアしたしな」
俺自身はＬｖは程々に上がっているし、強化もある程度はできた。
それよりもだ。
「問題はフィーロの姿がフィロリアルじゃないことだな」
そう、なぜかフィーロはハミングフェーリーというこの世界の魔物になってしまっている。
人化することは可能みたいだが、人化すると身元がばれるから町ではさせられない。
「フィーロ、わかってると思うが人の姿になるなよ。また捕まるからな」
「ピイ！」
俺の鎧の隙間に隠れてフィーロが鳴いて震えている。
怖い経験をしたもんな。
「しかし……馬車を引くフィーロが使えないんじゃ移動が面倒だな」



実は内心、あてにしていた。
後足のフィーロの背に乗れば移動が簡単になるし距離も稼げる。
それが蓋を開けてみればフィーロはフィロリアルの姿になれず、この世界独自の魔物の姿にしか変身できないときたものだ。
「人力車ならあるよ？　金に余裕もあるし買うかい？」
「……誰が引くんだよ」
「この中じゃ尚文じゃない。武器で技能とか取れれば持つ手も軽くなるかもよ」
「ふざけんな」
何が悲しくてリーシアと絆、そしてフィーロを俺が人力車で引いていかねばならんのだ。
ああ、フィーロに人型で引かせるという手もあるな。
……幼女に人力車を引かせて旅をする。
昔、フィーロが馬車を人型で引いたことがあったな。
アレはやばい。絵的に非常にやばい。問題がありすぎる。しかも目立ちすぎる。
「フィーロは馬車を引きたいか？」
「ピイ！」
ブンブンと拒まれてしまった。
ハミングフェーリーってどんな魔物なのかはわからないが馬車を引く性質はなさそうだな。
とりあえず、今は移動を優先するしかないか……。
町で補給をする必要はないから通り過ぎてから、フィーロを懐から出す。
するとフィーロは人型に変身して俺達の前に立つ。
「ふー……」
「とりあえず、フィーロはこの国を出るまでは人前に人型で出せないな」
「怖かったー」
「そうだろうな。すげー声で泣いてたしな」
「ごしゅじんさまありがとう」

ぐーっとフィーロの腹が鳴る音が響き渡った。

「ごしゅじんさまお腹すいた」

「ああ、はいはい」

市場で買った干した果物をフィーロに与える。

ボリボリとフィーロは頬張った。

「ご飯……」

「食べてる最中に催促するな」

「もっとー」

ぐー……って食べながら腹を鳴らすとか器用なことをされた。

これは……フィーロの魔物姿が雛鳥であるのに関わりがあると見ていいかもしれない。

……また成長期に入ってるとかか？

現在の姿は魔法で変化してるとか、なんだろうなぁ。

異世界に来て雛鳥に逆戻りとかどんな理由があるのだろうか？

この辺りに詳しい奴がいたら尋ねたいな。

「俺と絆には経験値は入らないが、少し魔物の多そうな場所に寄り道していくか」

「釣りとかするのもいいよ？」

絆が武器を釣竿にして目を輝かせる。

なんだ？　前々から思っていたが絆は釣りが趣味なのか？

「釣りねー……フィーロの食欲に釣り合うほど、短時間で釣れるならいいが」

「日本よりは釣れるけど入れ食いは難しいかな」

「じゃあ無しだ。もしくは手掴みや禁止漁法を使う！」

「それはダメ！　釣り人のマナーに反する！　邪道だよ！」

絆って妙に釣りに対して熱意がある。異世界の見知らぬ川で禁止漁法……例えば雷の魔法を降り注がせて浮かんできた魚を手に入れるとかやってもいいだろうに。

謎の拘りを発揮するな。



これが勇者の資質というやつか？

……いやいや。

「……まあ、狩りをするのは簡単だし、悪くないか。尚文の仲間も増えたんだしね。ただ、この国に来た目的を忘れちゃダメだよ」

「当たり前だろ。俺の目的はラフタリアだ」

ラフちゃんの札に触れながら俺は宣言した。

ぶっちゃけ、ラフタリアがいないと安心できない。その点で言えばラフちゃんはどことなくラフタリアが近くにいるような錯覚を覚えさせてくれるから助かる。

強いて言うなら安心する。

「ねえごしゅじんさま」

「なんだ？」

「このお姉ちゃん誰？」

そこからか……一晩一緒にいたのにな。

「オレの名前は風山絆。訳あって尚文と一緒に旅をすることになった、この世界の四聖だよ」

「ふーん。よろしくね！　釣竿の人」

やはり持っている武器で認識するのな。

「残念だがフィーロ、絆の武器は釣竿じゃないぞ」

「そうそう」

絆がフィーロの目の前でコロコロと武器の形状を変える。

「え？　え？　え？」

フィーローがキョロキョロと絆の武器を目で追う。

「さて、フィーロちゃん。オレは何でしょう？」

「うー……」

フィーロが珍しく困っている。

絆も遊んでるなぁ。

「ま、釣竿の人ってのも悪くはないけどね。まさしく釣り人って感じがして」
「気に入ってるならからかうなよ」
「そこは尚文に合わせただけだよ」
「じゃあ、キズナ……お姉ちゃん」
お？　フィーロも学んだな。
しかし絆のお姉ちゃんね？　少し違和感があるぞ。
合法ロリみたいな外見してるのにな。
「尚文、何か変なこと考えてない？」
あ、気付かれた。視線を逸らそう。
「なんで視線を逸らしたの？」
「そんなに気になるか？」
「ま、まあ……」
「合法ロリがお姉ちゃんか、と思ってな」
「ちょっ」
小さく声を漏らす絆。
そして俺達の会話を無視してフィーロが言った。
「キズナお姉ちゃんじゃダメなの？」
「いや、問題ないよ。よろしくね、フィーロちゃん」
「うん！」
「絆ちゃんでもいいと思うがな」
「尚文」
俺はもう一度視線を逸らした。
やがて絆はフィーロと握手をしてから俺に言った。
「じゃあフィーロちゃんのために狩りでもしながらグラス達を捜そうか」
「そうだな。Ｌｖも不安がないわけじゃないが安全なところまで行ってから上げていくか……」



ってラフタリアを捜さなきゃいけないだろ。
俺は奴隷紋を再度作動させて確認する。相変わらずラフタリアを示す反応はない。
やはりラフちゃんを頼りに行くしかないか。
フィーロと同じように見世物にでもされていたらたまったもんじゃないんだが。
……フィーロがかぐや姫なら、ラフタリアは……ラフちゃんはぶんぶく茶釜だな。
かちかち山でないことを祈ろう。
「町には寄っていくんだよな？」
「寄れるならだけど……式神に案内させるんだから必要ないんじゃない？」
む、そうか。だがどこかで情報を仕入れた方がいざという時に役立つかもしれないだろ。
「この世界の亜人はエルフとかドワーフみたいな奴が大半で、ケモノ耳や尻尾を生やした奴は珍しいんだったな？」
「そうだね。かなり希少だよ」
ふむ……じゃあラフタリアもどこかで捕らえられている可能性があるじゃないか。
く……できれば無事でいてほしいが、フィーロと同じく捕らえられているのではないかと思ってしまう。グラス達も一緒だったらいいが。
アイツ等は勇者二人を同時に吹き飛ばせる程度には強いからな。
そんな感じで俺達はフィーロとリーシアのＬｖ上げついでに進んだのだった。

## 十三話　狩猟具の勇者の技能

「おーいしー！」
夜、遭遇した魔物を解体して、焼き串にしてフィーロに与える。
ラフちゃんも程々に食べてくれていて、微笑ましい。
日は落ちて、今日は野宿になりそうだな。
「フィーロちゃん美味しい？」

「うん」
「尚文は料理が上手だもんね」
「血抜きが面倒だけどな」
倒した直後の魔物って血なまぐさい。
この臭みを香料で誤魔化したりしているが、それでも俺からしたら臭みが強い。
「そこは技能とかでどうにかなるんじゃない？　オレも解体技能は持ってるし」
「まあ……」
そう、絆は俺よりも解体技能が高く、絆に捌いてもらうと肉とかは俺よりも品質が高い。
……それでもまだ臭みが強いが。
ま、フィーロもリーシアも気にしないから問題ないけどな。
で、成長期を迎えたフィーロは常時腹を空かせて飯を催促している。
これは前にいた世界でも同じか？
食いしん坊鳥であるフィーロだもんな。
案外、Ｌｖの上がりは良く、フィーロは現在Ｌｖ30にまで上昇した。
あっちの世界でも序盤はこんな感じだった気がする。
ただ、それに合わせてフィーロの魔物の姿も変わってきている。
フィロリアルの姿に変身するかと思ったが、なんかハヤブサみたいな魔物へ成長した。
「ハミングフェーリーってどんな魔物なんだ？」
「ん？　音を運ぶ鳥って意味の通り、音楽が好きな鳥だよ。出世魚みたいに徐々に姿を変えるんだけどね」
「そうだ！　ごしゅじんさま見てて」
絆と話をしているとフィーロがトコトコと俺達から少し離れて立つ。
その後、背中の羽をはばたかせ始めた。
フィロリアルは飛べない鳥だ。跳ねることはできるけどな。
だからか、フィーロの人型時の背中の羽って飾りにしか見えないほど、動かない。
もちろん戦闘時には風を掴むように広げて受け身を取るために使っているがな。



羽ばたいたからといって飛べるわけではなさそうだ。
だが……。
ふわぁっとフィーロが浮かんでいる。
え？　確かフィロリアルは飛べない鳥で……ってよく考えたら今のフィーロはハミングフェーリーって魔物なんだから空を飛べるってことなのか？
「どう？　フィーロ飛べるよ」
「ああ、すごいすごい」
世界を渡ったせいでフィーロの魔物としての部分に変化が起こってるわけか。
「人型時の戦闘方法とか色々と変化を加えられるかもな」
「うん！　空を飛ぶって楽しい！」
まあ、いいんじゃないか？
フィーロ自身が飛ぶ能力を得られるのは悪い話じゃないし。
「で、ハミングフェーリーはどんな攻撃方法があるんだ？」
「普通の鳥型の魔物みたいにツメで相手を攻撃するでしょ。他に音を操ることができるね。歌声が綺麗で有名」
「フィーロ、フィロリアルの時の技能は使えないのか？」
「んー……えっとねー力が足りないからわかんないけどできると思うー」
ハイクイックとかスパイラルストライクとかは使えるのか。
ただＬｖが足りないから、まだ難しいと。
ボフンと魔物の姿に変身したフィーロが羽ばたいて俺の肩にとまる。
その姿はフィロリアルクイーン時のフィーロの色合いをした、スラッとしたハヤブサみたいな魔物だった。
フィロリアルクイーンのようなブヨッとしたペンギンなのかフクロウなのかよくわからない体型ではない。
カッコ良いんじゃないか？
大きさも俺の肩にとまる程度で可愛げがある。
「これで成鳥か？」
「いや」

「違うのか？」

「それはハミングフェーリーの成長段階の途中にあるハミングファルコンだよ。その先にも色々と形が変わっていくらしいよ」

「らしいって、ずいぶん大雑把なんだな」

「全部を知ってるわけじゃないし、Ｌｖで変化するらしいからね……一部じゃ伝説のハミングフェーリーなんて話があるくらいだし……」

嫌な伝説だ。

なんていうかフィロリアルと同じ匂いを感じる魔物の系譜みたいだぞ。

「ごしゅじんさまー」

「おい、魔物の姿で喋るぞ！」

「覚えたんじゃない？　オウムみたいに応答できるらしいから」

ああ、コンニチワ！　とかオハヨウ！　みたいな感じか？

鳥臭いは有名だな。臭いのはお前だ。

「ラフー？」

ああ、ラフちゃんは良い匂いだな。なんか消潔にしたがるからフィーロよりも匂いは遥かに良い。

「オレが知るのだとその先で色々と分岐するけど、フィーロちゃんはどこへ行くんだろうね」

「あ、フィーロ小さくもなれるよ」

フィーロが光って雛鳥に変わる。

そういやフィロリアルの時も普通のフィロリアルの姿に変身できたもんな。

すぐに元に戻るが、変身にバリエーションが付いてるのか？

便利だが、騒がしくなりそうだ。

「背中に乗って飛べるようになると移動に便利そうだね」

「俺の世界じゃ飛竜がそれに該当するみたいだけどな。そんな種類もいるのか？」

「うん。ハミングフェーリーの中にいるよ」

うわぁ……まあ元々が馬の代わりに背中へ乗れるくらいの魔物なんだし、フィーロの役割的にはそっちの方がいいのかもしれない。

「こっちにもドラゴンとか難しい漢字の龍がいるから似たようなものかな。いろんな種類のハミングフェーリーになれるならかなり優秀な子だと思うよ」

「えっへん」

「ああ、はいはい。すごいすごい」

なんて話をしていると、リーシアがフィーロに声を掛ける。

「フィーロちゃん、ちょっと話をしませんか？　少しこの世界の言葉を覚えたいです」

リーシアがフィーロを手招きし、何やら文字の分析をしてる。

そう簡単に文字を読み解くことができるのか？

まあ武器が翻訳してくれる俺相手じゃ、翻訳の手助けとかできないけどさ。

「いいよー。フィーロねー……少しだけならなんて言ってるかわかるようになってきたところだったんだよ」

とか言いながらフィーロがリーシアに説明を始めた。

「でねー。おはようは、おはようでねー、こんばんは、はー――」

問題はフィーロが人に物を教えるのはあまりにもド下手であるという点だな。

リーシアも困っているような表情を浮かべながらも解読をしているようだ。

上手くいけばいいがな。

夜空を見上げ、俺はラフタリアの安否を心配する。

グラス達の方は心配しなくても大丈夫だろう。何だかんだで強い連中だ。

問題はラフタリアだ。

現在この世界に来ている仲間の中で俺と合流できていないのはグラス達を除くとラフタリアだけになっている。

どこかで心細くて泣いていなきゃいいが。

と思っていると俺の頭の中に浮かんでいるラフタリアが不機嫌になる。

そんな子供じゃありませんとか今にも聞こえてきそうな感じだ。

心配なのはフィーロと同じく幼児化とかしていないかだな。

そうなると戦いづらいだろう。

最悪なのはこの世界独自の人種に代わってしまっているパターンか。
ラフタリアの特徴である狸のような耳と尻尾が別のものに代わってしまうんだ。
そうなると顔で判断するしかない。奴隷紋が機能してくれればいいが……。
なんて思いながら俺達の旅は続いた。
で、その道中でのこと。
「はい、ありがとうございます。では……」
リーシアが俺達から小銭をもらって町の本屋らしきところへ行き、本を購入して帰ってきた。
あくまで、ただそれだけのことだったのだが、俺はある事実に気付いた。
「リーシア、お前……」
「ふぇ？　な、なんですか？」
「この国の連中の言葉がわかるのか？」
「あ、はい！　一生懸命勉強して、フィーロちゃんからも発音を聞き取って覚えました」
凄く誇らしげにリーシアはそう言った。
挙句、本の解読をして文字すら数日でマスターするに至っている。
なんだコイツ？　ステータスが軒並み低いくせに頭脳労働部分に関しては天才なんじゃないのか？
元々メルロマルク以外の言葉も話せたみたいだし文字も同様に覚えていた。
で、まだ一週間と少ししかこの世界に居ないのに言語をマスターしたとかどんだけなんだよ。
リーシア、お前は完全にインドア派だろ。
あきらかに戦うことよりも天才的な才能を持っているじゃねえか。
「オレもこの世界の文字を覚えるのに結構時間掛かったんだけどなー」
絆が冷や汗を拭って呟く。
「そこまで難しいですか？　癖はありますけど……」
何か不思議そうな顔をして答えられるが、得てして天才とはこんなものなのかもしれない。
いや、リーシアは人よりもステータスが全体的に低めだ。ここに謎を解くヒントがあるのかもしれない。
きっとリーシアは本人が望もうが望むまいが関係なく、ステータス魔法で直接見ることのできない隠しステータス、知識とか知恵に該当する部分に振り切っているんだろう。
「お前はホント、向いていないことに力を注いでいるんだな」
なんか……哀れでしょうがない。
戦闘の資質もあるらしいが、それよりも後方援護とか勇者達を陰ながらバックアップするポジションに収まっていればよかったんじゃないかと思えてくるぞ。
つーか、樹に懇切丁寧に異世界言語を教えてやれよ。
そうすれば樹も俺に対してあんな失礼なことを言わずに済んだだろうに。
まあ樹が人に教えを請うなんてことをするとは思えないが。
「ふぇええ……な、なんで可哀想な人を見る目でみるんですかぁ……」
「んー？」
フィーロの方は元々天才肌だしな。産まれて三日で人の言葉を完全に理解した。
今までなんとも思ってなかったが、地味に凄いよな。
どうもこの世界の言葉も大体わかるらしいし、勇者じゃなくても言葉がわかる天才がここに二人いるということなんだろう。



「ラフ？」
「ラフちゃんは喋らなくていいからなー」
既にフィーロがいるしな。喋るペット枠は二匹も要らない。
「ブー！　ごしゅじんさまなんか失礼なこと考えてる」
知らんな。
とにかく、リーシアは本人の資質的にステータスに載らない部分に振り切っていると思えばいいだろう。記憶力も相当なのはカルミラ島で話をした時にわかった。
リーシアが樹に助けられた出来事で、近くにいた俺達の事を言ったら即座に思い出していた。
そういう意味では凄い奴なのかもしれない。
「なあリーシア」
「なんですか？」

「お前、元の世界でどんな勉強してたんだ?」
没落貴族で自力で勉強とかしていたとかなのだろうか?
「波が来るまでフォーブレイの学校に通っていましたよぅ」
「ああ、そうなのか」
ん? 女王の話じゃビッチもフォーブレイという国の学校に通っていたとか言っていたような気がする。もしかしたら近い学年だったのかもしれない。
「成績は?」
「う、運動以外はできました。専門はまだ悩んでいて選んでなかったですけど……」
ふむ、リーシアがここまで自信があるように答えるところを見るに、やはり成績は良かったのだろう。
全然勉強していませんよぅ、とか言いながら試験で百点取るようなイメージがある。
魔法の資質とか含めて、器用貧乏で戦闘は不向きだった、とかで脳筋しかいない学校でハブられたとか想像できる。
時代が時代なら良い仕事にありつけたんだろうけど……可哀想な奴だな。
しかも決断力がないから専門科目を選べなかったオチまで付いてやがる。
「じゃあリーシアさん、今度勉強を教えてよ。わかるかどうかわからないけど」
「いいですよ」
と、リーシアが答えたところで絆が振り返った。
なんだ?
「勉強を教えてくれる程度には頭が良いらしいよ」
「ふぇえええぇぇぇぇ!」
絆の誘導にハマッたリーシアが情けない声を上げる。
「結構凄いんじゃない?」
「本人の望まぬ才能らしいがな。戦闘ができる正義の味方になりたいんだと」
「ぶっちゃけ向いているように見えないけどねー」
「俺もそう思う。だが、強くすると約束したからな」



「ナオフミさん……」
などと俺は絆と一緒にリーシアを見ていたのだった。

## 十四話　帰路の龍脈(りゅうみゃく)

「速報だよ! 寄ってらっしゃい見てらっしゃい!」
と、町で派手に新聞らしきものを配る商人を見かける。
町人がその新聞を受け取って凝視しているようだった。
俺もそれとなく受け取って絆(きずな)に見せる。
「読めるか?」
「なになに……刀の眷属器(けんぞく)の所持者が見つかる……が、逃亡されてしまい、現在国総出で追跡中……?」
「この国は刀の眷属器とやらがあるのか」
刀……ちょっとカッコいい武器だな。少年漫画でよく使われる武器だ。
剣と並んで主人公が使う武器ベスト3だな。
とはいえ、俺の方だと剣の聖武器があるのだが、錬(れん)のせいでイメージが悪い。
こっちの世界でも、刀を使っている奴は上から目線で俺は最強だ! とか言い出しそうだ。
刀の眷属器の所持者とやらには警戒するとしよう。
「未(いま)だに刀の眷属器に選ばれる者が出ていなかったみたいだね。確か国の首都の重要建築物に厳重に管理されてて、見ることはできても所持者を選定するのは安易に挑戦できないようにされているとか聞いたな……」
まあ、眷属器って世界を守る勇者の武器みたいなものなんだろ?
グラスやラルクがどういう経緯で手に入れたかは知らないけど、選ばれた人にしか抜けない岩に突き刺さった剣みたいなのが想像される。
……?
七星勇者と呼ばれる連中も似たような感じじゃなかったか?

眷属器という代物は、あっちの世界でいうところの七星武器という線が濃くなってきたな。
で、選ばれたものが触れると武器が所持者と認めるとか、そんな感じなんだろうか？
オストとも似たような話をした覚えがある。
ま、誰でも使いこなせるわけじゃないんだろうけど、国にとって困る相手に所持されたら威信に関わるから管理していたんだろう。
「一応、国の強さの象徴みたいな武器だから……逃げた者の行方を追っているみたいだね」
「へー……」
自分から挑戦したにもかかわらず……なんで逃げているんだ？
「なんか変だなこの記事」
「何が変なの？」
「眷属器の所持者に関する具体的な記述が意図的に削られてるような……同行者も男女三人とか不確かすぎる。男が二人なのか、女が二人なのか、わからない」
考えられるのは、この国の者ではなく、手に入れた眷属器を持ってどこかの国へ逃亡しようとしている、とかか？
戦争の引き金になりそうな事件だもんな。
確か俺のいた異世界でも勇者の武器ってだけで物騒な話になったとメルロマルクの女王が言ってた覚えがある。
四聖勇者を抱え込むとそれだけで権力を得られるらしいからな。
そんな怪しい奴が眷属器に選ばれたら逃げるだろう。
「ん ー？」
リーシアとフィーロは首を傾げていた。
ああ、ちなみにラフちゃんは俺に抱きかかえられていて、ずっと指差している。
大人しくて可愛らしいな。
で、ラフちゃんの案内のまま俺達は進んでいった。
その途中で検問に引っ掛かった。
「止まれ！　現在、この先には犯罪者が潜伏している。すまないが、通りたくば迂回せよ」
なんか武士みたいな奴が槍で道を塞いでいる。



どうしたものか……まあ、要らぬ騒ぎを起こすわけにもいかず、俺達は言われるまま迂回することにした。
のだけど……ラフちゃん達の指差す先が変わった。
どうやらラフタリア達は封鎖された地域にいて立ち往生をしているっぽい。
良かったと安堵すると同時に嫌な汗が出てくる。
犯罪者が潜伏している場所にいるなんてついていない。
ある意味、嵐の真っただ中に巻きこまれているようなもんだぞ。
最悪の場合、グラス達が刀の眷属器の所持者と敵対している可能性もありえる。
嫌な胸騒ぎを覚えながら俺は絆と顔を合わせる。
「どうする？」
「決まってるでしょ？　屋根伝いで侵入して捜せばいい」
「待て、絆。少し手があるんだ」
「何をするんだい？」
「フィーロ」
「なーに？」
現在のフィーロはハミングファルコンという飛べる鳥型の魔物なのだ。
つまり、偵察にはうってつけだ。
現在も俺の肩に当たり前のようにとまっている。
まあ、この世界に来て人型になっていると酷い目にあうというトラウマのせいかもしれない。
見知らぬ町ではできる限り魔物の姿で俺から離れようとしない。
手に収まっているラフちゃんと合わせると、盾の勇者というよりは魔物使いって感じだ。
「この辺りを軽く飛んでラフタリアがいないか捜してくれ」
「えー……またフィーロ狙われそう……」
すごく嫌そうにフィーロが答える。
確かに今の姿は完全に鳥だ。
狩人か何かに弓で射抜かれたら一巻の終わりだな。

「もう大丈夫だろ。さっき空飛ぶ野生の魔物を見ただろ？　それにここは捕まっていた国じゃないんだから少しくらいは大丈夫だ」
「絶対に大丈夫？　フィーロが攻撃されたらごしゅじんさま助けてくれる？」
「ああ、助ける。俺が嘘を吐いたことがあるか？」
「うん、あるよー」
「……そうだったな。だが、今回はお前を頼りにしている。頼めないか？」
目の届く範囲で隔離された地域を上から調べるだけなんだ。問題あるまい。
もしも攻撃されても一発でわかるだろ。
「わかったー」
ついでに奴隷紋を作動させてラフタリアが近くにいないか確認しよう。
そう思って……奴隷紋を開いた瞬間、唖然とした。
ラフタリアの登録部分がいつの間にかなくなってしまっていたのだ。
い、一体どういうことだ？
ブワッと嫌な汗が噴出し、背筋が凍りつくような錯覚を覚える。
まさかラフタリアが死……。
「ラフー？」
咄嗟にラフちゃんを抱きしめて心を落ち着かせる。
うん。なんとなくラフタリアが近くにいるような感じがしてホッとするな。
「ラフゥ……」
ラフちゃんが照れくさそうに頬に手を当てている。
とりあえず頭を撫でてあげよう。
「ごしゅじんさま何してるの？」
「いいから調査してくれ。ラフちゃんもラフタリアの居場所を指差してほしい」
「ラフ！」
相変わらずラフちゃんは同じ方角を指し示している。



これは……うん。おそらくラフタリアが死んでしまったせいで奴隷紋が消えたわけじゃない。
何かしらの事情があって奴隷紋を解除した、あるいは解除された……とかなのだろう。
そう思い込むことにしよう。
「というわけでフィーロ、少し飛んで見てきてくれ」
「はーい」
フィーロがバタタと羽ばたいて高く飛んでいく。
俺達はその姿を目で追った。
見た感じだと……特に攻撃される気配はない。
やがてフィーロは俺のもとへと戻ってきた。
「あのねー、なんか追いかけっこしてるのがいたよー」
「誰が追いかけられていた？」
「布を被っててよくわかんない。もっと近づこうと思ったけど、なんか怖い魔物が追いかけてたから逃げてきたー」
「怖い魔物？」
なんだ？　こんな町の中に魔物が侵入してる？
いや、フィーロと同じような使役魔とかいう魔物を使役している奴が追跡をしている可能性もあるか。
「行くしかなさそうだね」
「確認する意味でな……できればその追いかけられている連中ではないといいんだがな」
絆が建物の屋根目掛けて釣竿の針を投げて引っかけ、登り始める。
手早いな。リールが回転して登る速度もなかなかのものだ。
「エアストシールド、セカンドシールド、ドリットシールド」
俺の方は盾を出現させて、階段のような足場にしてとんとんと登っていく。
「ほら、リーシアも続け」
「ふぇえ……」
屋根に乗った俺達は武士っぽい奴等の目を盗んで、隔離された地域を屋根伝いに移動する。
ラフちゃんとクリスの指差す方角が少しずつ変化していく。

やがて開けた空き地のような場所に出る。
向こうの屋根まで少し距離があるな。
一度、降りてから登り直すか。
そう思って着地し、足を進めて……ばったりとローブを羽織った連中と遭遇してしまった。
「く……」
くそ、ラフタリア達を捜しているのに厄介な連中に出会ってしまった。
ここでこいつ等を追っている連中と鉢合わせしたら面倒だぞ。
念のためにこちらも仮面を被って誤魔化しているがな。
ポータルで逃げてもう一度様子を見るか？
咄嗟に戦闘態勢に入る。
が、そこで――
「ラフー！」
ラフちゃんが鳴いて連中の一人を強く指差した。
同様に絆のクリスもその隣にいる奴に向けて鳴いている。
「尚文、ちょっと」
「なんだ？」
「もしかして……」
俺は仮面を外してこちらの素顔を相手に見せる。
同様に絆やリーシアも仮面を外した。
すると相手も敵意を喪失したのか戦闘態勢を解除して一歩踏み出す。
「ぼ、坊主！　それにキズナの嬢ちゃん!?」
先頭にいた背丈の高い奴が顔に掛かっているフードを外して顔を見せる。
その顔はラルクだった。
ローブを脱ぐと、この国の冒険者に合わせた格好なのか新撰組みたいな服を着ている。
どうもこの世界って、布でも強靭な防御力があるみたいなんだよな。



空色の模様のある羽織、ラルクの顔の作りから似合うと思ってしまう。なんでもソツなく着こなしてしまうんじゃないか？
まさかラルク達が追われていたとは……なんとなく考えないようにしていたことが、そのまま現実化していたぞ！
偶然ってこえーな！　おい！
ラルクの後ろにいた一人が絆に向かって駆け寄った。
「キズナ！　一体どこへ行っていたんですか！　それよりもなぜ、ナオフミと共にいるのですか！」
ローブを脱いでグラスが涙目で絆を抱きしめた。
うわぁ……冷静を絵に描いたみたいなグラスがそんな顔をするなんて、凄く珍しいものを見たような気持ちになる。
誰にだって大切なものがあるとは思うが、クールな奴がこういう顔すると違和感が凄いな。
「再会を喜ぶのはいいですが、追っ手が来ています。注意して！」
同様にテリスもローブを脱いで顔を見せてくれた。
こっちは袴を着てる。柄は宝石をモチーフにしたものっぽい。
藍染とかで模様を付けているのか？　なんか少し異なる気がする。
動くと宝石の模様が動いて見えるのは……気のせいか？
残った一人は……ラフタリアでいいのか？
ラフちゃんは最後の一人……俺の方へ駆けよってきた奴を指差している。
「ラ、ラフタリア？」
「はい」
ローブを脱いだ相手――ラフタリアが俺に顔を見せてくれた。
毛並みの良い丸っこい耳、スラリと背中まで伸びる柔らかな髪、深く吸い込まれそうな瞳、張りのある綺麗に揺れる尻尾。
久しぶりに会ったラフタリアはなんとなく輝いて見えた。
そのラフタリアも俺との再会を喜んでくれているのか笑顔で俺の元へ来る。

で、服装なのだけど、赤い巫女服のようなものを着ていた。
なんだ？　電撃が走ったように俺は何かを感じ取った。
もう一度ラフタリアをよく見る。
ラフタリアが着ている巫女服はシンプルな形状だ。
上は白い衣に赤い線が縫いこまれており、若干リボンのようにも見える。
しかしその赤が白衣の白を邪魔しておらず、あくまで白を際立たせる程度の繊細さだ。
下の緋袴は名前の通り緋色をしており、ラフタリアの姿を良く見せている。
しかも尻尾はちゃんと出るように加工されているみたいだ。
履物は白足袋に草鞋を履いている。
うん、ラフタリアにめちゃくちゃ似合っている。
なんで巫女服？　ものすごく似合うんだが。ここまで似合うとは思わなかった。
こう……キョウを倒して元の世界に戻ってもこの格好をさせたいという想いで頭が一杯になってくる。
おかしいな、俺は巫女に関しては普通のオタク程度で、ラフタリアに無理に着させたいと思うほどではなかったはずなのだが……。
「やっと逢えました。ナオフミ様！」
「ずいぶん待たせてしまったようだな。すまない」
「いえ……状況が状況でしたので……ナオフミ様は大丈夫だったのですか？」
「まあ、色々あったがな」
無限迷宮とかいう厄介なところにぶちこまれたし、俺達を無限迷宮に閉じ込めた敵国内を警戒しながら首都まで移動したり……強行突破したり。
うん。まさしく色々あった。





「しかし……似合うなその格好」
「ナオフミ様が褒めてくださいました……何か不思議な感じです」
俺ってそんなに褒めなかったっけ？
「元の世界でもその格好になるのはどうだ？」
「私のこの格好がそんなに気に入ったんですか？」
「似合うと思う」
そう言うとラフタリアの頬がほんのり赤くなった。
照れているのか。
まあ、ラフタリアの実年齢は子供だからな。
褒められたら年相応に嬉しいだろう。
「だろー？　やっぱそう思うよな！」
ラルクが我が意を得たりとばかりに言う。
お前がラフタリアをこんな格好にさせたのか。
良い仕事してるじゃねえか。さすがはノゾキ魔。
なんて呆れていると何か猛獣の鳴き声が聞こえてくる。
長く話している暇はなさそうだ。
「絆、救援の札を使え」
「待ってて」
絆が札を額に当てて意識を集中する。
しかし……。
「ダメだ……通信妨害をされているみたいだ。ここから逃げなきゃ呼び出せそうもない。ラルク兄さん達の様子を見る限り帰路の写本も使えないだろうし」
「じゃあポータルで飛ぶか？」
「任せられる？」
「ああ、少し人数が多いがな」



ポータルで何人飛べるかはまだ確認できていなかった。だけど、今はそんなのを気にしている暇はない。
とりあえずラフタリア達を仲間に引き入れる。
「ポータル――」
言い終わる前に何か異様な気配を感じる。
それはこの場にいる全員が共通して感じていることのようだ。
で、視界にポータルのアイコンが浮かぶ。
転送不可。
は？　この世界に来て初めて飛ぶことができない事態に陥ったぞ。
これに似た感覚というなら……霊亀に挑んだ時と似ているような気がする。
「おっと、まさか本当に俺から逃げられると思っているのか？　ん？　数が増えているな」
声の方角を見ると、ラフタリア達を追っていたと思しき連中と、彼らに使役される魔物らしいのが……立ちはだかっていた。
「お前等は！　ここで会ったが百年目！　あの時の雪辱を果たしてやる！」
なんていうか完全に上から目線で俺達を睨んでいる。
コイツ見覚えがあるぞ。
確か俺達が龍刻の砂時計を使って転送をした時に戦った天才術師とかいう奴だったな。
「ああ、そういやいたな。こんな奴。名前……なんてったっけ？」
できれば会いたくなかったが、どっちにしてもいつかは戦うことになっていた気がする。
見たところ、取り巻きの女共が前よりも多い。なんていうか、鼻につく奴だな。
元康みたいな空気とでも言うのだろうか？
「今度こそ報いを受けさせてやるわ！」
「国を騒がせた罪！　神妙にお縄につきなさい」
「そうだ。よくも私達に恥をかかせてくれたな！」
女共に囲まれて、なんか嬉しそうな顔をしていやがる。
気持ちの悪い連中だな。凄く薄ら寒い関係に見えるのは俺の気のせいか？

女連れで何かましてんだ、とか言いたくもなるが、俺が連れている仲間も似たようなものだから黙っておこう。
「私達の名前も知らずに我等が国にいる……だと!?」
「愚かな！」
「聞いて驚きなさい。貴方達の前にいるのをどなたと心得る。この国の最高の魔術師にして人々の希望――」
しかし……なんか元康とも違う気がするな。
元康はキザだから女共に愛想は良いけど、コイツの場合は女共の態度が樹寄りに感じる。
何なんだろうか？
名乗り口上が似てて名前の方は俺の耳を素通りしてしまった。
「――なのよ！　恐れ慄きなさい！　アンタ達が話をできるような方じゃないの」
「知らん。えっと……名前なんだったか？」
どうもコイツの名前が耳を素通りして頭に入らない。
こう……樹を不快に思ったせいか、こういうタイプの人間を外見で覚えてはいても名前を覚えたいと全く思えなくなってしまった。
「どこまでも不快な……その身に俺の名前を刻みつけてやる」
俺みたいな野郎に名前を覚えてほしいとか、意味がわからんな。
で、その背後には大きな白い虎っぽい化け物が唸り声を上げている。
目付きは野獣そのもので、涎を垂らしていて……なんとも獣臭い。
ただ……何か変な気配がするような。
気配とか、俺も長いこと異世界にいたせいで感覚が鋭敏になってしまったのか？
「どうやらそこの盗人とは仲間みたいだな。道理で腹立たしい奴だと思った」
「盗人？　何を言っているんだ？」
「ナオフミ様……」
ラフタリアが申し訳なさそうにローブの中から手を出して……俺に武器を見せる。
その手には、なぜか刀が一振り……剥き身で握られていた。
……えっと、刀の眷属器の所持者が見つかったが逃亡中で、ラフタリアの奴隷紋がいつの間にか消えている。
で、眷属器の所持者を追いかけているとかそんな話だったよな。
追っ手はこいつ等で間違いない。
どうなってんだ？
いや、わかってはいるけれど、理解したくない感情が邪魔をする。
「なんで逃げたんだ？　この国の連中が重鎮として歓迎してくれなかったのか？」
そもそもラフタリア達はなぜ盗人扱いで逃亡生活をしているんだ。
グラスやラルクという強い連中がいるにもかかわらず。
「それが……」

## 十五話　刀の選定

ラフタリア達の話を掻い摘んで説明するとこうだ。
敵地に落ちたラフタリア、グラス、ラルク、テリスはＬｖの力を減退させる厄介な場所に建てられた牢獄に収監された、らしい。
俺と絆がさすがにありえないと懸念していた場所に。
収監された者の能力が減退する魔法が常時掛かり、看守は逆に強力な力を得る……そんな場所だとか。
俺みたいに無限迷宮のような厄介なところに入れられたわけではなかったのがせめてもの幸いか？
グラスやラルクの協力もあり、ラフタリアは幻覚の魔法を使って窮地を脱したという。
ま、減退してると言っても眷属器の所持者が負けるはずもないか。
しかし、ラフちゃん頼りでギルドとか国の情報機関を調べてなかったのは、俺達の手落ちだったな。
ラフタリア達が脱獄してこんなに大々的に追われていたのなら、もっと早く情報を得ることができていたかもしれない。
もっと隠れて行動しろよ、俺達みたいにさ。
「というか眷属器の所持者なんだろ？　大々的に討伐とかされなかったのか？」

「私達が活動していることが表沙汰になると私達の所属する国に攻め込む大義名分ができてしまう。と、いうことなのでしょう。それを避けるために情報操作をしたのが裏目に出たようです」

グラスがそう説明する。

なるほど、だから隣国に居た俺達にはあやふやな情報しか流れてこなかったのね。

いわゆる国交問題になって厄介事が増える。

世界を守る勇者みたいな連中を指名手配するのは外聞も悪い。

しかも権力の象徴っぽいから秘密裏に処刑でもして所有者のいない眷属器があると見せた方が効果的とでも認識したのだろうな。

眷属器って厄介なんだな。国民に次の所持者が見つかればそれだけで権力の象徴にできるわけか。

四聖は召喚された異世界人限定だから、そういう悩みは殆どないらしいし。

メルロマルクの女王の話だと、召喚するための道具が必要らしいけど、眷属器とかよりは扱いが難しいと思える。

俺達が居た方の世界だと所有者の生死がわかるから、国交問題の証拠にもしやすいんだろうな。

「で？　居場所がわかりづらかったのは理解したが、その後はどうしたんだ？」

「話を続けます。脱獄した後のこと――」

後はどうにかして国外へ脱出しようと、潜伏しながら国の首都にある龍刻の砂時計へと向かった。

戦力は十分にあるから強引に龍刻の砂時計まで到達すれば逃げきれると踏んでいたそうだ。

俺や絆と同じ発想だな。

その道中でラフタリアはグラス達に多少Ｌｖを上げてもらったらしい。

「嬢ちゃん、ちっちゃかったんだぜ。十歳くらいにしか見えなかった」

「ああ、やはり成長がリセットされたのか」

とはいえ、フィーロみたいに別の種族にならなくてよかったな。

ラフちゃんみたいに変身できたら、それはそれでいい気もするが、本人的には嫌だろう。

「すぐに戻って残念だったぜ。坊主も見たかったろ？　嬢ちゃんの幼い姿」

「昔見た覚えがあるが……まあ、見られるんだったら見たかったな」

しかも巫女服だろ？　すごく似合うんじゃないか？



可愛さ倍増だろ？

やばいな。巫女服気に入りすぎだろ、俺。

ま、幼いラフタリアの思い出は大切に脳に保存しておく。

その時の話はラルクに後で詳しく聞いておこう。

「ナオフミ様！」

む……顔を真っ赤にしたラフタリアに怒られた。

「そ、それで大変でしたよ。この姿に戻るのも……二度目の成長痛を経験するのは苦痛でした」

「成長痛だけじゃないだろ」

「どういうことですか？」

「ラフタリアは小さい頃、フィーロと同じで食べるのが好きだったろ」

「成長期です！」

間違ってはいない。

亜人というのはそういう種族らしいしな。

「それでなんで、ラフタリアが刀を持ってんだ？」

「えっとですね。首都の眷属器が鎮座している広場で催しがあったんですよ。眷属器の候補者が挑戦するという」

「……敵国とはいえ、眷属器の所持者が現れるかもしれなかったので私達も民衆に紛れて見ていたのですよ」

グラスが不快そうに呟いた。

その後はあんまり良い結果にならなかったのが一目瞭然だな。

敵国とはいえ勇者がどんな人物かを確認したいと……まあ、本の眷属器の所持者がとんでもない奴だったから気持ちはわかるな。

上手く話が通じそうな相手なら協力するのも悪い手じゃないだろう。

「ふん。お前等におめおめと逃げられたんだからな。国も本腰を上げて俺に眷属器を授けようとしたんだ！　なのにお前等ときたら！」

うるせえなコイツ。

戦争回避のために知恵を絞れよ。国土を増やすことばかり考えて、波を何だと思ってんだ？

「で……あの方が国の重鎮を連れて刀の眷属器を大勢の観衆の見守る中、抜くことに挑戦しようとしたその時……」

俺の脳裏にその時の映像がイメージされる。

今、俺達と敵対している妙な奴が岩に突き刺さった刀を抜こうとしている。

辺りにはその挑戦で眷属器の所持者が出るかと期待に胸を膨らませる民衆。

その民衆が近寄らないように警護する兵士達。

一歩、また一歩と足を進め、刀に手を触れようと手を伸ばしたその瞬間！

刀が光となって輝き……なぜか観衆の中にいたラフタリアの手に向かって飛んでいき、実体化した。

「ということがありまして……なぜか私が刀の所持者に選ばれてしまったんです」

「思えばありえた可能性だったのかもしれません。なにせラフタリアさんは扇の眷属器の所持者である私と、鎌の眷属器の所持者であるラルクと異世界において渡り合える力を持つ方なのですから」

まあラフタリアは結構強いからな。

勇者ではなかったが、数々の困難を俺と乗り越えてきた。

ラフタリアがいなければ難しかった問題も沢山ある。

「で？」

「刀の所持者になれなかったことに腹を立てたあの方が私を盗人扱いして、凶悪な魔物を引き連れて追いかけてくるようになったのです！　必死に逃げる私達でしたが、どこまでもしつこく追いかけてきて……」

「その刀は俺のものになるはずだったんだ。だから返してもらうんだよ。この盗人共！」

俺は無言でラフタリアの方を見る。

正直に言えばグラスの方の世界の眷属器になんでラフタリアが選ばれなきゃならないんだと思う。

眷属器の所持者って異世界に行って四聖を殺すのが役割みたいな話なんだろ？

それってつまりラフタリアが俺と敵対することになるじゃないか。

そもそもなんで異世界人のラフタリアなんだよ。

無理があるだろ。

……いや、それを言ったら異世界人である俺が盾の勇者をしているのがおかしいのか？



「私は何度も無理だと眷属器に語りかけるようにグラスさんやテリスさんにお願いしました。ですけど刀の眷属器は私から全然離れなくて」

「むしろ離せるのか？　離せるなら俺は迷わず、自分の盾を捨てるが……」

武器に語りかけるなんてことができるのだろうか？

なら俺はこの盾を迷うことなく捨てたいぞ。

攻撃できないなんて厄介極まりない。

そのお陰で色々と助かったところもあるが、なにも守り専門なんて無茶なことをしなくても守れるだろ。

よし。

「盾、今すぐ消えろ」

「元も子もないことを言わないでください！」

「だからお前を殺して、新しく刀の所有者にならなきゃいけないんだよ！」

敵の叫びに一緒に居る白い虎が雄叫びを上げる。

「さっきから、だからだからってうるせえな……」

思い通りにならなくて駄々を捏ねるガキみたいな奴だ。

見ているとイライラしてくる。

三馬鹿勇者を思い出す。

「話はわかった。つまり眷属器に選ばれた奴が気に食わないから国総出で追いかけていると」

「そうなります……降り掛かる火の粉は払っていたのですが、こう数が多くて……首都からどうにかここまで逃げてきたところでキズナとナオフミに再会したと」

「そんなわけだ。坊主とキズナの嬢ちゃん。どうにかならねえか？」

ラルクが悪びれもせずに聞いてくる。

俺達はヒーローか！　どっちも対人能力低いだろ。

つまり……アレだろ？

ここでこいつ等を仕留めても次から次へと湧き出す国の追っ手から逃げなきゃいけないと。

じゃないと国の威信どころか国自体が危うくなるんだな。

そりゃあ必死で追いかけてくるか。

「強さを見せつければいいんじゃないのか？　お前等強いんだろ？」

「諦めねえんだよ。こいつ等妙にＬｖが高くてな」

「ふん。お前等異国の眷属器の所持者程度が俺達に敵うわけねえだろ。馬鹿じゃねえの？」

「馬鹿はお前だろ。思い通りにならないからってワガママをほざくな！」

「なんだと⁉」

眷属器って要するに四聖武器と同じく世界を守るために存在する武器だろ！

その武器が選んだ勇者を、気にくわないから消そうという発想がおかしい。

そんなんだから刀の眷属器に選ばれなかったんだろ。

「……」

よく見るとラフタリアをはじめ、グラスやラルク、テリスもそれぞれ疲労の色が濃い。

俺達とは違ってかなり厳しい旅を続けていたというところか……。

思わず溜息が出るな。

絆に視線を向ける。すると絆はコクリと頷いた。

「いいだろう。一時的とはいえ協力関係だ。その腐ったクズ二号にはラフタリアに喧嘩を売ったことを後悔させてやる」

「クズ二号って何？」

「俺が勝手に決めたアイツのあだ名だ。俺を召喚した世界にも似たようなのがいたんだよ」

「ナオフミ様は相変わらずですね」

「凄いセンス」

「うるせえ。とにかく、俺はお前みたいなクズが大嫌いなんだ！」

ラフタリアを守るように俺は前に出て言い放つ。

敵……名前は覚えてないがクズ二号は俺の睨みに対して舐めた目を向けて手を上げる。

すると周りから白い虎が二匹追加で現れた。

さっきから何なんだこの生き物？　コイツのせいでポータルが妨害されてんぞ。



「ラフー！」

ラフちゃんが俺の肩に乗って威嚇する。

「悪いが下がっていろ。敵う相手じゃない」

ラフちゃんの能力はそこまで高くない。

俺の指示に従って、ラフちゃんはラフタリアの足元に行く。

「な、なんですか？　この子は」

「ああ、この世界にある技術で作られた式神っていう使い魔だ。その子が俺をラフタリアのところまで導いてくれたんだ」

「ラフー」

「そ、そうだったんですか。ですがなんでその……私の名前みたいな鳴き声で鳴いているんですか？」

「……」

「なんで黙るんですか！」

ラフタリアが俺を詰問してくる。

いや……俺は悪くないぞ。

ラフタリアを特定できるものを媒体にして作ればいいって話だっただけで。

「……昔、髪を切った時に盾に入れたラフタリアの髪の毛を媒体にして作ったからだと思う」

「ああ……掃除のために盾に入れたんだーって思ってたアレですね。って勝手になんてことをしているんですか！」

「俺は悪くない。ラフタリアの身の回りのものを使った方がいいって言われたから使っただけだ！」

「ラフー！」

ラフちゃんが喧嘩をしないでほしいとばかりにジャンプして自己表現をしている。

「とにかく……わかりました」

「ラフー」

と、ラフちゃんはラフタリアに登って額に額を合わせる。

「あ……？　はあ……」

「どうした？」
「いえ、なんか私にも式神の登録が完了したと出まして」
ほー……これはアレだな。
絆がグラスと一緒に作ったというペンギンと同じことが起こっているんだろうな。
「あの、尚文？　戦闘に入ろうとしているんだから程々にしてくれない？」
白い虎達が俺達の方へ一歩、また一歩と少しずつ距離を詰めてくる。
「何なんだコイツ？」
「こいつ等は俺達の世界に出現した四聖獣の一体、白虎の……複製体だぜ。坊主、言うなれば坊主の世界で出た霊亀の模造品だ」
「なに!?」
つまりグラス達の世界の守護獣？
が、なんでこんなにいるんだ？
そもそも討伐されていないとかそんなのか？
でも青い砂時計とか波が静まるとかの話じゃなかったか？
「過去に討伐された白虎を複製して戦闘用の使役魔にした、この国の決戦兵器。キズナ、貴方も気を付けて」
「守護獣って、伝承にいるやつでしょ？　オレもグラス達が何をしていたか国の人達に聞いたから知ってるよ。あんなのと戦ったんだ？」
「もっと大きかったですね。あそこまでの強さはありませんが……数が多くて手を焼いています」
絆も知ってた感じなのになんで俺だけ知らないんだよ！
「知ってるなら俺にも話せ！」
「面倒そうにしてたから言わなかっただけじゃないか」
まあ、ぶっちゃけラフタリアと早く再会したいと思っていたし、そんな話よりも少しでも強くなる方法とかを考えていたかったのは間違いない。
「ふぇえ……た、戦うんですよね」
「ああ、そうだな。正直厳しいかもしれないが、こっちにも戦力はあるんだ」

できればリーシアは、キョウと戦った時のような覚醒をしてほしいとは思うけど、どうも強さにむらがあるというか感情の高ぶりが関わってくるんだよな。
一応は言ってみるか。
「リーシア、わかっていると思うが、今目の前にいるのは身勝手にラフタリアやグラスを殺そうとしている連中なんだ。遠慮なんかするなよ」
「は、はい！」
前よりは幾分かマシな構えでリーシアは武器を向ける。
……うーん。あの動きができそうな気配はない。
そこまで期待してはいけないか。
怪我をさせないよう……できる限り守っていかねばな。
「フィーロもがんばる！」
ボフンと人型になったフィーロが、後方で魔法の詠唱に入る。
どうも世界を移動してから戦闘スタイルに変化が出ているな。
無理な運動ができないというか後衛寄りになっている。
それが悪いというわけじゃないが。
「私達も忘れてもらっては困りますよ」
「ええ」
グラスとテリスも戦闘態勢に入った。
目的を絞るか。
「どうやらポータルの邪魔になっているのはその白虎のコピーみたいだ。こいつ等を屠れば俺が転送を使える。みんな、行くぞ！」
「はい！」
「おお！」
ずいぶんと人手が多いから、状況を把握しなきゃいけないな。
「ふん。眷属器の所持者とやらの実力、見せてもらおう！」

クズ二号が偉そうに言い放ち、刀を持って俺達と相対する。
その周囲には仲間の女と……複数の白虎だ。
「尚文、オレは対人攻撃ができないのはわかってるよね？　できれば……あの連中は任せられない？」
「わかった。じゃあ絆、お前には白虎の方を任せる」
「それなら大丈夫……オレの得意な相手だ」
戦いの幕開けは……白虎の遠吠えで始まった。

## 十六話　無詠唱

状況を整理しよう。
現在、俺が装備している盾の中でリスクなしだと一番強いのはヌエの盾だ。
反撃効果はそこまで優秀ではないな。
だが、勇者の強化方法を存分に使っているから、かなりの防御力を持っている。
少なくとも物資不足であまり強化できなかった、という状況ではない。
仲間は推定で強い順に並べるとグラス、ラルク、絆、ラフタリア、テリス、フィーロ、リーシア……というところかな？
ラフちゃんとクリスは戦力としてカウントしていいのか非常に困る。
クリスは絆を守るように前方に立って、白虎と睨み合いをしている。
で、ラフちゃんはラフタリアの隣で毛を逆立てて戦う姿勢を見せているようだ。
守護獣である霊亀に匹敵するであろう、グラスの世界の守護獣の複製体……どれだけの強さを持っているかはわからない。
とりあえず、グラス達でも苦戦する化け物だったと認識すべきだ。
その化け物を使役するクズ二号と、その仲間達……しかも時間を掛ければ掛けるほど、国の増援が来るというおまけ付き。



状況は最悪だけど、逃げたとしてもどこまでも追ってくる気配があるな。
無理ではないとは思うが……やるしかない。
「はぁ！」
「グルァアアアア！」
白虎の一匹がグラスと絆の方へとツメを伸ばして襲い掛かる。
グラスは扇を広げて受け止めた。
「く……踏み込みが甘い！」
と、グラスが扇で反撃するが、白虎の動きは良く、見事に後ろに飛びすさって避けられてしまう。
速さはなかなかのものみたいだ。
そりゃあ虎型の魔物だろ？
虎って現代の認識だと地上の最強の一角を担う動物だったはず。
異世界でも強い方のカテゴリーに入るのだろう。
しかも四聖獣に該当する白虎ともなれば、ゲームによっては大ボスだ。
もちろん、これがゲームだとは思っていない。
だけど、それ相当の強さがあると思って間違いないだろう。
「ふぇえええ！」
「リーシアお姉ちゃん！　ファスト・ウィンドカッター！」
白虎がリーシアの方に狙いを定めて跳躍、俺が後ろ脚を掴んで止め、フィーロが風の魔法で顔面に切りつける。
が、あんまり効果はないようだ。せいぜい猫だましか。
く……攻撃担当のフィーロがそこまで強くないとなると厄介極まりない。
「坊主、じっとしてろよ！　飛天大車輪！」
ラルクが俺の捕まえた白虎に向かって車輪のような光の軌跡を生み出すスキルを放つ。
ブシュッと鮮血が散るが致命傷には至らないのか白虎の毛が赤く染まっただけだ。
「グルァアアアアアアアアア！」
白虎は怒りの雄叫びを上げる。

「ナオフミさん！　輝石！　紅玉炎！」
テリスが炎の魔法を唱えて俺もろとも白虎を焼き焦がす。
テリスの紅玉炎という魔法は俺を焼くことはない効果を持っているみたいなんだよな。
「グルァアアアア!?」
業火にさすがの白虎も悶えているようだ。
「俺を忘れるんじゃねえぜ！」
「忘れてなんてねえよ。エアストシールド！」
盾を生成してクズ二号の刀を受け止める。
「何!?」
「お前は盾がどんなもんかは知らないだろうから、侮ったりはしないよな？　前回戦った時に痛いほど理解しただろ？」
俺に攻撃手段がないとはさすがに思ってはいないだろう。
だからその警戒を利用させてもらおう。
「うりゃああ！」
「グルゥ!?」
思い切り力を込めて白虎を投げ飛ばしてクズ二号に当てる。
「うぁあああああ!?」
ま、投げただけでダメージなんて入らないみたいだけど、これで僅かに隙ができる。
その間に俺は魔法の詠唱に入るとする。
……オストと共に唱えた魔法――リベレイション。
あれを俺はまだ唱えることはできないし、範囲に拡張させる術も理解していない。
だけど、少しでもみんなの力になるために俺は今できるベストを尽くす。
「ツヴァイト・オーラ！」
最初に掛けるのは……短期決戦という意味でグラスが最適だな。
強い順に掛ける。



そうすることで少しでも戦いが楽になるようにするんだ。
「ありがとうございます！　行きます！」
絆と呼吸を合わせてグラスが扇を広げて踊るようにスキルを唱える。
「輪舞零ノ型・逆式雪月花！」
辺りに花びらが舞い、グラスの高火力のスキルが飛んでいく。
だが、致命傷を与えるには至らず、白虎は煩わしそうに顔に付いた花びらを拭う。
一応は全身に切り傷を与えているが、決定打が足りない。
「輝石！　粉守！」
テリスが、防御力が低下する魔法を唱えて白虎達の防御力を下げていく。
その隙をラルクが衝いて接近、鎌を思い切り大振りで切りつけた。
白虎の毛皮が切り裂かれ、骨が露出し、白虎が仰け反る。
「あんまり舐めた真似はしないようにな？」
俺がクズ二号に言い放つ。
クズ二号は不快そうに顔を歪ませる。
「盗人の眷属器と犯罪者共が偉そうに……俺の本気を見せてやる！」
クズ二号は片手を前に出して、俺達の方へかざす。
するとクズ二号の手から火が複数出現して俺達に向かって飛んできた。
なんだ？　特に詠唱する気配がなかったな？
ま、でかいのをぶっ放したら跳ね返されるのを理解して、小粒の魔法を複数放ったんだろうが。
「無詠唱!?」
テリスがハッとしたように言った。
ああ、魔法には詠唱があるもんな。その詠唱をせずに魔法として形にするとか、俺も物語とかで読んだ覚えがある。
「どうだ！」
「どうだと言われてもな……」

飛んできた火の玉を俺は弾いて飛ばす。
見た感じだとファスト以上、ツヴァイト未満の威力だと分析する。
妨害不可を視野に入れたら悪くはない性能だとは思うが、俺相手では意味がないな。
というかコイツ、Ｌｖ幾つか知らないが、そこまで強くないんじゃないか？
当たりどころが悪かったら怪我くらいはしそうだけど、致命傷になるかどうかは怪しい。
「甘く見てはいけません。眷属器に匹敵する技量を彼は持っています」
グラス達に目を向けると、焦りの表情を浮かべながら言ってくる。
ああ、Ｌｖ自体は高めとかそういう連中なのか。
「たぁあああああああああああ！」
「報いを受けろ！」
「流星盾！」
クズ二号の仲間らしき女が切りかかってくるので俺は流星盾を発生させる。
攻撃を受けるよりも早くバリアのような膜が発生し、結界を形成した。
同時に流星盾の結界に攻撃が命中、前回は破壊されたが、今回は盾の強化が大分できているので防げるようだ。
ならば、と敵の武器を押し上げるように俺は素早く前へ出た。
「行きます！」
ラフタリアが、武器を押し上げられて隙だらけになったクズ二号の仲間の女に切りつける。
「させるか！」
クズ二号が一斉に沢山の火の玉を放ってラフタリアに向けて放ち、攻撃を妨害する。
ラフタリアは刀を円を描くように回転させ、火の玉を弾きながら俺の後ろまで飛んできた。
なかなか良い動きをするようになったな。ちょっとカッコいいと思った。
「喰らえ！」
押し上げられた槍を放し、懐から小太刀を取り出して仲間の女が切りつけてくる。
「ナオフミさん！」
リーシアが絆からもらった札を投げつける。



上手く魔力が乗っかっているのか不思議な軌道を描いて、小太刀を持つ女の手に張り付いて燃え上がった。
「くう……」
思わぬ妨害にクズ二号の仲間は呻いて距離を取る。
リーシアも思いのほかやるじゃないか。
札を投げるのが得意なんじゃないか？
そういや、キョウ相手にも剣を投げて命中させていた。
投擲する武器に対して適性があるのかもしれない。
「まだまだ！　この程度で終わると思うなよ！」
クズ二号がバスバスと連続で魔法を発動させてくる。
火の魔法に始まり、水、風、光、と様々な属性の魔法の玉を作り出しては俺に投げつけてくる。
無傷というわけではないが、痛いというほどでもない。
かすり傷程度のダメージを受け続けているような感じだ。
「ハア！　オラオラオラオラ！」
飛んでくる魔法の玉のせいで土煙が発生して視界がすこぶる悪い。
「ツヴァイト・オーラ」
その間に俺は仲間達に次々と援護魔法を掛け、ついでに自分にも掛けた。
すると大して痛くもなかった魔法の雨あられが更に痛くなくなる。
アレだ。雨の日に傘を差さずに歩いている程度の鬱陶しさ。
「グルゥウウウウ！」
煙にまぎれて白虎がもう一匹、俺達に向かって飛んできた。
直接的な攻撃で脅威なのは白虎の方だろう。むしろ陽動がクズ二号の目的だと分析したいのだが、どうも本気で攻撃してきているような気がしてならない。
「絆！　一匹、こっちに来てんぞ！」
「数が多いんだからしょうがないでしょ！　少しは対処して！」
むう……まあ、状況次第で対処しないといけないのはわかっていたからしょうがないか。

バスバスと相変わらず飛んでくる魔法の雨……いい加減鬱陶しいな。
幸いなのはクズ二号の仲間が掛かってこないところか。味方に当たったら話にならないもんな。
援護射撃に一緒に魔法を唱えてきたり、矢を放ってくる程度だ。手裏剣もあるな。
「フィーロ」
「なーに？」
「アレ、どう思う？」
「んー……」
フィーロが指をクズ二号に向ける。
「てい」
フィーロの指から風の刃が出てクズ二号に命中する。
「い!?　なんだ!?」
クズ二号の腕に風の刃で傷が付き、痛みでクズ二号は魔法を中断させる。
「無詠唱になんかプライドがあるようだが……大事なことをお前は理解してないんじゃないか？」
敵に助言するのはアレだが、それでも俺は土煙を散らして答える。
『力の根源たる盾の勇者が命ずる。理を今一度読み解き、彼の者を癒せ』
「ツヴァイト・ヒール」
受けたダメージは一発で回復できる範囲だったので、俺の怪我は即座に治療される。
「な……なんだその魔法は！　聞いたことがないぞ!?」
無詠唱って確かに凄いとは思うが、フィーロだって真似できる芸当だ。
なんか俺も魔法の本で読んだ覚えがあるぞ。
熟練の魔法使いは無詠唱で魔法を使うことができる。
だが、大きな問題として詠唱で発動する魔法に比べて威力が落ちるらしい。
そりゃあそうだろう。
力を込めずに武器を振るうのに原理は似ている。
全く力を込めずに振ったとして、仮に剣だったら相手の皮膚を軽く切るだけにとどまるだろう。もちろん、力の



込め方や振り方に差異はあれど、あくまで無詠唱というのは力を込めずに発動させるようなもんだ。
小手先の技術や咄嗟の追撃なら悪くはない。
だが、問題は無詠唱の意味。
「答えろ！」
「知る必要があるのか？」
詠唱とは言わば魔法を顕現させることに必要な手順であり、魔力を込めるための余裕だ。
無詠唱で威力がほどほどの魔法が使えるのは及第点と見ていいだろう。
それだけのことができるのは、確かに優秀だ。
だが、無詠唱なんて高度な魔法が使える奴ならできなくはない技術だろ、よく考えれば。
手順を飛ばして魔法を具現化させる。
詠唱に必要な魔力を圧縮させて具現化させるとか高度なものとなると馬鹿にできないだろうがな。
で、やはり異世界での魔法体系の違いか、俺達が使う魔法は未知の魔法と思われたようだ。
「んー……ごしゅじんさま、ちょっと今のフィーロの魔力じゃ、これ以上の威力は出ないみたい」
「そうか。じゃあ強くなればもう少し威力は出せそうか？」
「うん。魔力を込めるのをね、バーンとすればできそう！」
うん、よくわからん。だが、天才タイプのフィーロができると言うならできるんだろう。
「でも……ちゃんと唱えた方が――」
「フィーロ、わかってる」
「そっかー」
相手にヒントを告げる必要はないだろう。
そう、無詠唱できる奴が詠唱をしたら……どれだけ威力が向上するか？
戦闘では手数も重要だけど、妨害されない範囲で強力な魔法を唱えた方が魔法自体の効果は高い。不意打ちや追撃、追撃防止で無詠唱を使うのはいいんだろうが、それなら戦闘中に集中し過ぎない範囲で詠唱しながら戦えということだ。
現にテリスは詠唱しながら援護と攻撃をしている。

無詠唱を誇りにでもしていたのか？
刀の勇者になりたいのに魔法の達人？
わけがわからないな。
そんなクズ二号は腰から刀を抜いて俺達の方へ駆けてくる。
「俺の刀を受けるがいい！」
お？　魔法の雨よりは動きが遥かに良い。
前回は受け止めるだけだったからよくわからなかったが、確かに太刀筋は悪くはないな。
勇者の強化方法を習得して、一般人相手じゃ動きが鈍く見えていた俺でも対処できるか怪しい攻撃速度だ。
もちろん俺のＬｖが低下しているという状況下での話だけどな。
やはり刀の勇者を目指していただけあって、それなりに修練はしていたみたいだ。
なんで無詠唱なんて高度な技術を持っているのかは知らん。
「ガアアアアア！」
同時に白虎も俺に向かってくる。
いや、ラフタリアにターゲットを変更したようだ。
させないっての！
俺は白虎のブンブン動く尻尾を思い切り掴んで引き止める。
「グルァアアアア！」
白虎が尻尾を掴まれた怒りでクズ二号と共に俺を攻撃してくる。
いいぞ。ラフタリアに怪我なんてさせられないからな。
「ナオフミ様！」
ラフタリアが刀を強く握りしめて白虎に向けて振るう。
「三日月閃！」
三日月を形取った光が白虎に振りかかり、白虎の毛皮が剥げる。
「……！」
俺はクズ二号の刀を盾で受け止め、ヌエの盾のカウンター効果である、雷の盾（中）を発動させる。



「な、ギャアアアアア！」
雷に感電してクズ二号が刀から手を放して数歩下がる。
「コイツ……何者だ!?　尽く俺の攻撃を受け止めやがって！」
「本当、今更だな……」
きっとＭＯＢか何かと思われていたんだろうな。
ＭＯＢってのは俺の知るネット用語では、雑魚とか取り巻きとかを指す。変身ヒーロー物で言うなら戦闘員クラスの敵の事だ。
そのＭＯＢの防御力が思ったよりも高いから驚いている感じだ。
誰が雑魚だ！
「怪しげな盾を持った奴め！　盗人の仲間なのはわかっているが名を名乗れ！」
またわけのわからない奴が意味不明なことを言い出したな。
俺はクズ二号を無視して絆の方を見る。するとクズ二号の仲間を相手に苦戦している。
「絆！　人の方はグラスか俺に任せろ！」
「オレもそう思う。できれば、頼めないか？」
「ナオフミに指図されるのは不服ですが、理に適っています。ラルク、テリス、行きましょう！」
「おうよ！」
「そうですね。キズナさんの能力を引き出すには必要なことです」
『遍く宝石の力よ。私の求めに応じ、顕現せよ。私の名前はテリス＝アレキサンドライト。仲間達よ。彼の者を討ち滅ぼす力となれ！』
グラスとラルクの武器にテリスが唱えた紅玉炎が宿る。
「合成技・火炎大車輪！」
「合式ノ型・逆式炎雪月花！」
綺麗な炎を宿したグラスとラルクの合成スキルが絆と相対していたクズ二号の仲間を吹き飛ばす。
「キャアアアアアアアア！」
それでも倒れることはなく、クズ二号の方へ少しずつ移動しながら回復の魔法を唱えているようだ。

決定打になりきれないか……？
「手こずる相手ばかりで厄介だ。坊主、気を抜くんじゃねえぞ！」
「誰が気を抜くか、まあ……弱い方を相手させてもらっているから油断しかねないがな」
「なんだと！　舐めやがって！」
クズ二号が何か吠えているが知らんな。
ぶっちゃけ動きを見る限り、より脅威なのは白虎の方で変わりはない。
グラスやラルクはこの世界じゃ眷属器の所持者なんだから、かなり強いはず。
現に強さ自体は俺が波で戦った時と差がない。
霊亀の時は弱体化していると言っていたが、今は間違いなくあの時よりもキレがあると思う。
「さっさと名を答えろ！」
クズ二号がグラス達の方に意識を向けていた俺に怒鳴る。
「そうピーチク騒ぐな鬱陶しい。そんなに知りたきゃ教えてやるよ。俺は盾の……勇者って呼ばれてる守ることしかできない武器の持ち主だよ。名前は岩谷尚文。異世界人だ」
自分でも凄いことを言った気がする。
よくよく考えれば異世界から異世界に来た異世界の盾の勇者とか……。
何回異世界って言うんだよ。まあ事実なんだが。
「何？　聖武器に盾なんていないはず……とんだホラ吹きだな！」
「それなら最初から聞くな！」
そもそもコイツに信じてもらいたいとも思わん。
盾の勇者だと理解していないなら、それだけ動きやすいしな。
「お前等！　まずコイツからやるぞ！」
「「はい！」」
クズ二号とその仲間が集まって俺達を包囲する。
おうおう……で、絆達の方は白虎に任せると。
強い白虎にグラス達の相手をさせて、あまり強そうじゃない俺達の方を重点的に潰していくとか考えていそうだ。



俺は守ることしかできないしな。
他にもラフタリアをササッと倒して刀を奪いたいとかいう願望も入ってそうだ。
俺を倒さなきゃそんな真似させないけどな。
「流星盾」
流星盾を唱え直して守りを固める。
「ナオフミ様……」
「まあ大丈夫だろう。リーシアとフィーロは気を付けろよ」
「うん、フィーロ絶対捕まらないよー」
「そうかそうか」
「ふぇええ……」
脅えるような声を出しながら札を器用に持ってるじゃないかリーシア。
様になってんぞ。
というかクズ二号は無詠唱を自慢にしてるみたいだったが、それってこの札で代用できないのか？
「ふん、俺の本気はまだだぜ！」
そう思っていたら札を取り出してきた。
ああ、加減してたとか言うつもりか？
キョウじゃあるまいし、こんなところで実力隠してどうすんだ。
俺やリーシア、フィーロはともかく眷属器に選ばれた連中が揃ってんだぞ。
本気で行かなきゃ殺されんぞ。
ぞろぞろとクズ二号の配下っぽい国の武士が駆けつけてくるし……早々に仕留めないといけない。
「行くぞ！」
クズ二号が札に魔力を込め、無詠唱で魔法を放つ。
「今だ！　エアストシールド！」
投げる直前、クズ二号の目の前にエアストシールドを出現させてやる。
直線的な攻撃魔法しか使ってこないコイツに対してどんな結果になるか楽しみだな。

「な――」

投げた札と魔法がクズ二号の目の前で炸裂する。

「うわあああ！」

爆発に巻き込まれてクズ二号が大きく後ろに吹き飛ぶ。

まさかここまで思い通りにいくとは思わなかった。

グラスとかラルクだったら咄嗟に避けられただろうに。

「な、よくもやってくれたな！」

クズ二号の仲間が俺達に向かって各々の武器で切りかかってくる。

「セカンドシールド――」

守るように目の前に盾を出現させ、フィーロに視線を向ける。

俺の意図を察したフィーロが頷いて詠唱する。

『力の根源たるフィーロが命ずる。ことわりを今一度読み解き、かの者を激しき真空の竜巻で吹き飛ばせ』

「ツヴァイト・トルネイド！」

俺の視界に発動可能なスキル名が浮かび上がった。

これは前にも使ったことのある。攻撃性能を所持する合成スキルだ。

「トルネイドシールド！」

クズ二号の仲間が目前に出現した風を纏った盾に無謀にも攻撃をして、反撃効果が作動する。

「わ、わぁあああああああああああ！」

盾を中心に巨大な竜巻が出現してクズ二号の仲間を飲み込み、上空に巻きあげる。

「ナオフミ様！　行きます！」

うーん……ここでラフタリアに幻覚魔法でも唱えてもらうのがいいかもしれないが、ラフタリアの方は今、まさにクズ二号に向かって走り出した瞬間だ。

「何度こちらが話し合いをしようと言っても聞かず、武器を欲するその姿勢……もう我慢も限界です。これで諦めてもらいます」

ラフタリアが刀の柄を強く握りしめて横薙ぎにする。



そして……スキル名を叫んだ。

「細雪！」

「な――」

スパンと切ったように俺には見えた。

ラフタリアはくるくると刀に付いた血糊を散らすように振るい、増援に来た連中へ続けざまに刀を向ける。

で、スキルを受けたクズ二号は仰け反った体勢のまま、動かない……いや、すぐに効果が表れた。

「グハァ!?」

ラフタリアが切った傷口からまるで雪が散るかのように何かが噴出して辺りを白く染める。

なんだ？　……これは雪か？

そう思っていると雪は一瞬で溶け、倒れたクズ二号が、よろよろと起き上がる。

「やるじゃねえか……俺から……魔力を根こそぎ奪いやがって！」

斬った相手の魔力を雪として噴出させるスキルか。

クズ二号は回復アイテムと思しき大地の結晶を握りしめて、回復を図っている。

させるかよ。俺が近づいて、大地の結晶を持つ手を掴む。

「邪魔すんじゃねえ！　ぐ……」

刀で俺に切りつけようとして雷の盾（中）が作動し、クズ二号は感電する。

傷口は……うん、切り口はある。

ダメージよりも魔力を削ぐのに重点を置いているスキルのようだ。

「ごしゅじんさまー！」

フィーロの方へ武士共が群がり、リーシアの方も防戦一方になりつつある。

グラス達の方は少しずつだけど白虎の処分ができているようだが、無限に湧くように出現する白虎に苦戦しているように見えるんだけど……。

一人、明らかに動きがおかしい奴がいる。

絆だ。

先ほどから釣竿でルアーをやみくもに白虎達にぶつけているようだった。

グラス達は白虎達への直接攻撃をせず防戦一方だ。
白虎の方もなぜか絆を相手にせずにいる。
よくわからないが、狩猟具の勇者に本能的な恐怖心でもあるのだろうか？
やがて絆のルアーがクズ二号に命中する。
だが、何か起こるわけじゃない。
「尚文、オレがいいって言うまでルアーを当てた奴を絶対に攻撃しないでね」
「ああ、わかった。だが……」
何をしているんだ？
確か防御力を下げるスキルか何かだと思っていたが。
「ガアアアアア！」
白虎の群れの中に特に大きな個体が現れた。
アレが親玉か？
いや、このクズ二号が支配者なんだろうけど、白虎の中で一番強い奴が出てきたと思っていいのか？

## 十七話　血花線

「お？　なかなか強そうなのが出てきたね。じゃあ……行くよ。グラス、お願い」
「はい！」
「お？　久々にキズナの嬢ちゃんの大技が見れるぜ」
「キズナ、お願いします。貴方の腕に掛かっています。夢幻！」
グラスが扇を前に向けて花びらが舞うスキルを放つ。
桜の花びらが辺りを漂い、幻想的な光景に辺りが彩られる。
白虎達の動きがふらふらと鈍く、目を回しているように目つきがうつろになっているようだ。
なんだ？　何をするつもりだ？



「俺もやるぜ！」
ラルクが鎌を投げ、竜巻が起こる。
まるでグラスのスキルを強化しているかのようだ。
『遍く宝石の力よ。私の求めに応じ、顕現せよ。私の名前はテリス＝アレキサンドライト。仲間達よ。彼の者等の動きを止める力となれ！』
「輝石！　麻痺羽！」
テリスの手から蝶が羽ばたき、グラスとラルクの合同で放たれるスキルの中で白虎の周りに漂う。
それだけで白虎達は先ほどまでの勢いをなくし、気付けば全ての白虎が動きを止めていた。
「こんだけの数を仕留めるには準備が面倒なんだ。一匹ならもう終わってたんだけどね」
絆が武器を鮪包丁へと変化させる。
「もう詰みました。私達の……勝利です。狩猟具の勇者の恐ろしさをその身で理解なさい」
そう……グラスが告げるのと同時だった。
「尚文……じゃなくてラフタリアさんだっけ？　そっちをお願い。合わせて、尚文が掴んでいる相手に一番強い攻撃をして」
「わ、わかりました」
俺が押さえているクズ二号に向けてラフタリアは刀を向けて駆けだす。
で、絆もラフタリアと同じく居合のような構えで鮪包丁を構えて白虎に向かって走り出し……一瞬で通り過ぎていった。
「瞬刀・霞一文字！」
「狩猟技・血花線！」
ラフタリアは刀の柄を両手で握り締め、クズ二号に切りつける。
「え……？」
「どうしたんだ？」
「不自然なほど……深く刀が入った感じがしました」
で、俺が掴んでいるクズ二号は俺が掴んだ体勢のまま固まっていた。俺は掴んでいた手を放す。

ふるふると震えながらどんどん表情が青ざめていく。

「グフ……」

「あ、動いたら大変なことになるから……絶対に動かない方がいいよ？」

まあ、と絆は続けてとんとんと、同じく硬直していた白虎達を鮪包丁の峰で叩いて、グラス達の方へ戻っていく。

ただそれだけだったはずなのだが……白虎達は無残にも全身バラバラになって全て崩れ去る。

辺りに血の匂いがこれでもかと漂い始める。

その血飛沫がまるで真っ赤に染まった花びらのように見えた。

まさしくスキル名の通り……血の花が咲いているかのように見えたのだ。

クズ二号の仲間と武士達は絶句して俺達を見つめ続けていた。

おそらくラフタリアに切られたクズ二号は、下手に動こうものならバラバラにされた白虎達のように無残にも切り刻まれてしまうと、この場に居た者達は察したんだろう。

「馬鹿な、我が国の決戦兵器がいとも容易く駆逐された!?　ありえない！　どうしてこんなことが！」



クズ二号の配下が指差す。

「取るに足らない最弱の四聖がなぜ!?」

絆はその指摘にウンザリした表情を浮かべる。

最弱の四聖……俺も似たような扱いを受けた覚えがあるから共感できるぞ。

そもそも対人能力がないだけで最弱とはどういう理屈だよ。

「あのさー……狩猟具の勇者がどんなものか、ちゃんと調べたことがあったの？　向き不向きがあるくらい予想できるでしょうが」

そう、絆は前から言っていた。対人攻撃は全くできないが、その分、魔物を倒すことに特化していると。

「あとね、幾ら対人能力がないからといって、戦えないわけじゃない。噂が真実かどうか見極めないと死ぬのは、どこでも同じでしょ？」

ザワッと辺りの連中が騒ぎ始めた。

すげえな。あのグラス達が苦戦する相手を一撃で仕留めるとか。

その手腕が化け物じみている。

考えてみれば、対人戦以外で苦戦しているところを見たことがない。殆どの場合、楽勝だった気がする。

こんな化け物と俺は同行していたのか！

って……俺も異世界で四聖をしているんだから、絆と同じなのか？

俺は基本、攻撃できないけれど、防御能力で他者の追随を許さない。

霊亀の必殺攻撃を耐えきるのがその証明か？

絆は対人攻撃はできないけど、魔物相手なら他者の追随を許さないと……ホント、対人戦特化じゃなくてよかった。

……同じ理屈で対人特化の勇者とかいたらやばそうだけどな。

「さて……君達の主戦力と首謀者はこうして敗れたわけだけど、オレ達を逃がしてくれないかな？」

鮪包丁を日の光の下に見せつけて絆は脅すように告げる。

「ふぇええ……」

「リーシア、絆は仲間だ。脅えてどうする」



「す、凄い人と一緒に来たんですね。ナオフミ様」

「まあな」

「ラフー？」

戦闘中は静かだったな、ラフちゃん。一応、リーシアの方を守るように動いていたようだった。

まあ、今のラフちゃんの能力で戦闘になんて参加させるわけにはいかないんだけどな。

絆の式神であるクリスの方は絆とグラスを守るように善戦していたと思う。

俺の方はクズ二号の相手をしていて、よく見る暇はなかったからな。

「ラフタリアもなかなか強力な攻撃だったな。以前より確実に強くなっている」

「そう、なのでしょうか？　強さを実感する暇なく連戦だったので……」

……ラフタリアの攻撃がかなり強力に見えた。

刀の眷属器に選ばれてしまったとは……数奇な運命だな。

ずいぶんと手慣れた戦闘をしていた。

俺と再会するまで、相当厳しい戦いを乗り越えてきたんだろう。

前回見た時よりも逞しく見える。

また別れるようなことがあったら、その間にムキムキの筋肉とか出るほどになるんだろうか？

「何か失礼なことを考えてますね」

「そうか？　まあ頼りになるほど強くなったようだな」

「そうですね……どうしましょうか」

ラフタリアは刀を困ったように見つめる。

そうだよな……具体的には元の異世界に戻る時に、そんな重要な品を持ち歩いていて大丈夫なのかという心配がある。

「尚文ー白虎を武器に吸わないのー？」

絆が軽い調子で手招きしてくる。

「はいはい。わかったわかった。だが、人質がいるから動けないんだよ」

クズ二号を人質にその仲間と追っ手の武士を視線で牽制している。

どうやらこのクズ二号、相当な人材のようで、下手に手を出せずにいるといった様子だ。

無理に動いたら、胴体から真っ二つにされることがわかっているみたいで、本人は全く動けないみたいだけどな。

「よーくその身に刻んでおけよ。今度、屁理屈を捏ねて俺達に因縁をつけたら……命はないと思え」

念のために脅しをかましておく。

「ナオフミ様、好きですね。脅すの」

「体に恐怖を植え付けないと、この手の輩は学習しないんだよ」

「はぁ……そうですね。どうしてこのような方はどこにでもいるのでしょう……」

ラフタリアの愚痴ももっともだな。

なんていうか……俺の世界の勇者共やクズを連想させる。

「じゃあ、この国の刀の眷属器は頂いた。全ては強引な手段で無茶を通したそいつにある。よく覚えておくんだぞ」

この世界じゃ四聖って大事にされていないのか？

絆の立場ってどうなんだろうか？

まあ、俺と同じく四聖でも、それを信仰していない国に囚われたとかなんだろうけどさ。

と、思いつつ、俺達は白虎の死骸を盾に吸わせて、クズ二号に駆け寄る連中をしり目にその場を立ち去ろうとした。

取り巻きがクズ二号に回復魔法を掛けて、事なきを得たかに……思えた。

「お前等！　逃がすんじゃない！　あいつ等を殺すんだ！　俺に歯向かった奴らを見せしめにし、眷属器を俺の国のものにして国力増強をするべき――」

というところでラフタリアが振り向いて呆れたように呟く。

「まだですよ。あと十秒、回復魔法なしで動いたら……死にます。回復魔法があっても数日は動いてはいけません」

一礼してからラフタリアは顔を上げる。

「私達は戦争がしたいわけじゃありません。どうか冷静になってから、グラスさん達のいる国と同盟を組むかどうかを上層部と一緒に議論してください」

では……と言って振り返る。

「待て！」



「動いてはなりません！」

「あいつ等の嘘を信じるんじゃない！　もう俺は自身に回復魔法を掛けている！　さあ！」

ゆっくりと俺達の方目掛けて取り巻きと武士共が歩き出し、クズ二号も追撃のために数歩踏み出したその時。

「……残念です。私達もできる限り犠牲を出さずに降りかかる火の粉だけを払っていたかったのですが」

「全くです。上手く同盟を組むことができれば、もっと前向きに世界のために戦えると思ったのですけどね」

ラフタリアが呟き、グラスが同意する。

「尚文、振り返らない方がいいよ。昔、これでグラスやラルク兄さんが似たような敵を屠ったから」

と言われたら気になるじゃないか。

ラフタリアの方は自分でやったのだから、どうなるかわかっているみたいだけどさ。

「リーシアお姉ちゃんは見ちゃダメー」

「ラフー」

「ふぇ!?　な、なんですかぁ？」

フィーロとラフちゃんがリーシアには見せないようにしている。

ま、雰囲気としてどうなるかは見なくてもわかるだろうな。アニメとかで瞬時に斬られた相手に起こる現象っていうとあれだ。

「何をしているんだ！　早くあいつ等を――アガ――」

ブチッと嫌な音がしたと同時に飛沫が飛び散るような音が聞こえた。

「キャアアアアアアアアアアアアアアア！」

「――様ぁああああああ」

どうも名前がよく聞き取れなかったな。

悪いな、お前には何の同情もしていないし、するつもりもないが名前くらいは覚えておいてやりたかった。

ま、ここで俺が言う台詞はこれだろ。

「こうしてまた一つ、この世のゴミが消えた。くくく……」

「ナオフミ様！」

ラフタリアに怒られてしまった。

いいじゃないか、これくらい。

アイツ、ラフタリアを殺そうとしていたんだぞ?

しかも事あるごとに俺達の邪魔をしやがったしな。

「坊主、悪ぶって不謹慎に笑うなよ。振り向こうとしてないところを見るに、見たくないんだろ?」

「見てもいいが……あんまりグロいのはちょっとな」

後方で起こっているであろうスプラッターな現場を見たいとはあんまり思えないなぁ。

でも言わずにはいられなかったんだよ。

俺のいた方の世界だと、ああいう死に方してほしい嫌な奴は何人かいるけど、実際されると困るしな。

こうして俺達は戦闘に勝利して逃げることに成功したのだった。

屋根伝いに逃げながら俺達は町を後にした。

「結局アレはどんな攻撃だったんだ?」

速度的には目が追いつかなかったわけじゃない。

一見すると、魔物を普通に切っただけに見えるスキルだった。

だが、あらかじめ使っていたルアーをぶつけるスキルが鍵のようにも思える。

前提スキルというやつだ。

俺が使えるスキルでいうと、シールドプリズンの後にチェンジシールド（攻）と派生し、アイアンメイデンに至るとかそんな感じ。

「ん? ああ、アレは言ってしまえばその生物の弱点である構造の繋ぎ目を切り裂いてバラバラにする必殺攻撃……かな。トドメを刺せない場合は深く切り裂く程度になるよ」

んー……つまり相手を倒しきった時限定でバラバラになる効果が付与される強力な攻撃でしかないと。

「ルアーを当てたのは?」

「ダメージが倍になる擬餌倍針っていうスキルだよ。これを当てることで次の一発だけダメージを二倍にできる」

だからか、グラス達が直接攻撃のスキルを使わずに状態異常で動きを止めていたのは。

絆の必殺スキルを放つためにあえて攻撃をせずに受け止めていたんだな。



「効果時間もそこまで長くないから焦ったし、事前に察知されたら大変だから簡単には行かないんだけどね」

「なかなかにエグイ攻撃を持っているんだな」

次の攻撃限定とはいえ、防御力が下げられるようなもんだ。

俺だったらシャレにならないんじゃないか?

「そうもいかないんだよね。相手の硬いところとかに当てたらその部分で倍になるだけだから……尚文に当ててもそこまで深く入らないと思うよ?」

ゲーム的な計算式が関わっていると俺の経験が囁くな。

俺の知るゲームに似たスキルが存在する。

次の攻撃だけ倍加させる。主にボス戦とかで切り札となる攻撃だ。

ただ、ボス自体の防御力が高いと与えるダメージは必然的に下がる。

効果時間が短かったり、癖が強かったりと厄介なものだけど、運用さえ気を付ければ切り札となる。

やはり絆も相当な強さを持っていると思っていい。

本人は武器の制限で対人攻撃ができないけれど、このスキルはどうやら人にも効果を発揮できるようだし。

そのお陰でラフタリアの攻撃が強力に入り込んだと見ていい。

だから一刀両断されたのではないだろうか?

回復魔法とかを掛ければ間に合うのが救いか?

正直、ああいうタイプは死んでも反省しないと思う。ここで退場してもらった方が世の中のためだろ。

「で? 通信はできるようになったのか? 何人運べるか知らないが、俺のスキルで飛ぶか?」

「ちょっと待って」

絆が札を額に当ててぶつぶつと呟く。

「うん、通信できた。予定の場所に来るってさ。何なら先に帰る?」

「そうだな。絆の方はグラス達がいるからどうとでもなるだろ? ポータルは最高何人飛べるかわからないからな」

「上限を知らずに使ってるの?」

「何人飛べるかなんて試す必要を感じなかっただけだ」

正直、メルロマルクにいた頃は仲間と言えばラフタリアとフィーロ、そしてリーシア辺りしかいなかった。
エクレールとかババア、キールもいたが全員で飛ぶことは滅多にない。
自然と試す機会もなく、クールタイムの関係もあって先延ばしにしてたんだ。
「一緒にいた女共が敵討ちとばかりに追いかけてきそうだけど……」
「切り札の白虎が居ないんじゃグラス達に勝てそうにないでしょ。ね？　ラルク兄さん」
「まあな！　キズナの嬢ちゃんがいるんだったら俺達に怖いものはないぜ」
ふむ……まあ、絆も俺と同じく仲間がいることで真価を発揮するタイプだから、ここまで仲間が揃っているなら怖くはないか。
が、ある意味では、敵の味方を集めてしまったとも言える。
これで絆が裏切ったら、俺達は相当やばいな。
……とはいえ、絆、グラス、ラルク、テリス。
この四人が突然豹変して襲い掛かってくる光景が想像できないんだよな。
俺がそう思う程度には信用していると言えるのか。
「じゃあ、先にお前が拠点にしている国へ帰る」
「そっか、こっちも割と大丈夫だからいいかもね。二手に分かれよう」
「すぐに会えるだろうさ。じゃあ、先に行ってる。ポータルシールド！」
こうして俺達は先に絆が拠点にしている国へ帰還したのだった。

## エピローグ　全員集合

それから俺達は絆が拠点にしている国の城で休ませてもらった。
やがて絆が帰ってきたというので呼ばれていったのだが……。
「ねえグラス、オレが言いたいことはわかるよね？」
「いえ……それは……」



なぜかグラスが正座させられていて絆が説教をする構図に立ち会ってしまった。
同様にラルク達も反省とばかりに正座させられているし、何がどうしてこうなった？
「どうしたんだ？」
「ん？　ああ、前に波に関する話をここで聞いたでしょ？　進んで異世界の勇者を殺しに行ったグラス達をオレは怒ってるんだよ」
絆は腕を組んで俺の問いに答えてくれる。
「キズナ、違うんですよ。私はあくまで世界のためを思って――」
「過去の伝承を信じて波の亀裂に入って他世界の四聖を殺しに行ったんだって？」
「は、はい……」
すごく珍しい光景だ。
あの武人というか真面目そうなグラスが悪いことをしたような表情で俯いている。
絆とは特別、仲が良いとは聞いたけど、どちらかというと主導権は絆の方が持っているのか？
「キズナの嬢ちゃん。少しは俺達の話を聞いてくれてもいいだろ？　な？」
「そうですよ。私達はキズナが大事にしている世界を守るためにですね――」
ラルクとテリスがグラスを擁護しようとしたが、絆は冷たく睨みつけて詰問するように尋ねる。
「じゃあ聞くよ？　今までこの世界で起こった波で、波から眷属器の所持者がやってきたことはあるの？」
「そ、それは……」
「答えてくれない？」
言葉に詰まるグラス達は各々視線を逸らしている。
嘘を言えばいいものを……とは思うが、親しいならば見抜けるか。
正直、グラスって嘘吐くの下手そうだ。
「な、ないです……私達が参加できない敵国の波でもそのような現象は観測されず、自然と閉じることが……多いとの話」
まあグラスの世界で知った事実を考えれば、波の亀裂の先にある世界の者達が鎮めたと思えば納得はできる。
「他者を犠牲にしなきゃ保てない平和なんて嫌だって言ったのはグラス達じゃないか。そのグラス達が率先して、

人殺しに行ってどうするの!?」
「う……」
すごい剣幕で絆はグラス達に詰め寄るな。
というか……耳あたりの良い言葉が結構聞こえるな。
さぞ、絆が行方不明になるまでの冒険は楽しかったんだろう。
絆達の家を見れば嫌でも伝わってくる。
「いい？　よーく考えてよ？　重要なのは世界を延命させることだけど、他人を蹴落とすことじゃない。伝承ではそうなんだろうけど、他に抗う術がないかを模索するのが先決でしょうが」
「そ、そうなのですけど、私達も可能な範囲で調べたんですよ。ですけど……」
「見つからなかったから乗り込んで他世界の四聖を殺すの？　違うでしょ？　ないならもっと調べる！　それに、仮に異世界から眷属器の所持者が来てもオレ達が同じことをしていい理由にはならない！」
ビクッとグラスは脅えるように体を震わせた。
なんか、今までのイメージとずいぶん離れた光景が展開されているな……。
親に叱られている子供みたいだ。
自然と頬が緩む。
「ナオフミ様、笑ってます」
「坊主、何笑ってんだ。人が叱られてるのがそんなに楽しいのか？」
ラフタリアに注意され、ラルクが不快そうに俺を指差して言う。
が、ラルクの方は絆に睨まれて姿勢を正した。
「いいじゃないか。何度も死闘をした相手が説教されているのを笑うくらい」
「はぁ……グラスもグラスだけど尚文も大概だ」
嘆かわしいとばかりに絆は額に手を置いて呟く。
俺もそう思う。うんうんと頷いているとラルクが俺に疑いの目を向けている。
まあ気持ちはわからなくもない。今更正義面するつもりもないしな。
「とりあえず、オレが帰ってきたからには他世界へ四聖を殺しに乗り込むのは何があろうとも反対する！」



「う……」
「わかった!?」
「は、はい！」
「ラルク兄さんもテリス姉さんも！」
「お、おう。なんだかんだで坊主と戦うのは気が引けたし、いい頃合いか。自分達のために他の世界を滅ぼすなんて俺達らしくないもんな」
「わ、わかりました。よかったです。ナオフミさんを倒さずに済んで……」
ホッとするテリスを見た後、ラルクがなぜか俺を見ている。
どちらかといえば好意的な表情だ。
……こんな顔をされたら、俺に言えることは一つしかないな。
「なら最初からこんな真似すんなよ」
「うっせーぞ坊主、悪ぶるのも大概にしろよ！」
「ラルク兄さん！」
絆にそう言われると、ラルクは口を閉じた。
絆はけっこう発言力が強いな。
偶然知り合ったようなモノだけど、この発言力は正直に羨ましい。
これが本来あるべき四聖の姿なんだろうか。
それとも絆が特別、権力があるのか。
「それに、グラスはよく考えてほしいんだ。魔物相手なら戦えるけど人相手じゃ手も足も出ないオレの前に、異世界から眷属器の所持者が現れたらどうなるの？」
「……」
その問いにグラスは答えようとしない。
わからなくもない。
絆は対人戦は不可能だ。
もしもそのような状況になったら仲間に頼って自身は下がるしかない。

だが、四聖は波に召喚される。

それは殺されるために召喚されるのか？

「グラス、オレはね、波の現場に四聖が召喚されるのには意味があると思うんだ」

「意味……？」

「うん。殺されるかもしれないのに召喚されるなら四聖は波になんて参加する必要なんてないでしょ？　必要だから呼ばれる。なら……その意味として考えられるのは四聖が波を鎮めた時にこそ、次の波への猶予時間を稼げるとか、世界融合を阻止できるとかなんじゃないの？」

「……」

「もちろん、オレの意見が正しいかどうかなんて知らないよ。だけどグラス達の言う理屈だと、世界を守るためなら四聖は波になんて参加させる必要性はないことになる。だけど四聖は波に参加することを義務付けられているんでしょ？」

まあ、オレは無限迷宮にいたせいで参加できなかったんだけど。

と、絆は呟いてからグラスの手を握る。

「そんな話は伝承には無いかもしれない。だけど、少なくとも他世界を滅ぼして、他世界の人間を犠牲にしないといけない理由をオレは否定する。オレ達はそんなことをしちゃいけないんだ」

「……はい。申し訳ありませんでした」

絆に注意され、グラスが俺達の方を見て頭を下げた。

ま、俺も鬼ってわけじゃないし、そこまで怒る必要性はないと感じている。

何だかんだでグラス達も必死だったわけで、異世界から来た俺を自らの信仰のために罠に掛けて殺そうとした連中よりはまともなのは今までの経緯からわかった。

大事な仲間がいない状態で、仲間が帰ってくる場所を守り続けていたのは絆が拠点にしていたという家を見れば理解できる。

想いが伝わってくると言うのだろうか。

素直に羨ましい関係だな。

仮にラフタリアが俺を召喚した世界の武器に選ばれて、俺が行方知れずになったら同じような行動をしてくれた



のだろうか？

そう思いながら、ラフタリアを見る。

ラフタリアの肩を足場にしてラフちゃんが頭に登っていた。

「な、なんですか？」

「ま、グラスの気持ちもわからなくもないから、俺は何も言わない」

できれば絆とグラスみたいな関係でありたい。

願望でしかないけれど、ラフタリアが俺を思って行動してくれたなら嬉しい。

「もう俺達を攻撃してこないなら別にこっちも戦う気はないさ」

「坊主……」

「ナオフミ……」

「というわけで仲直りといこうよ、ね？」

そう言って、絆が握手を求めてきた。

俺はその手をパシンと払い退けて言った。

「そういうのは趣味じゃない」

まったく、熱い友情とか俺の趣味じゃないっての。

漫画やゲームだったら好きだったけど、生憎異世界に来てから碌な経験をしていないから御免被る。

「ま、そんなわけで、とりあえずは共闘関係を継続でいいだろ。俺にはやるべきことがあるんだ。そのために協力者は多いに越したことはない」

「確か、尚文の方の異世界の守護獣から奪われた力を取り戻すんだっけ？」

「そうだ。霊亀を操って俺達の世界を荒らしまわった本の眷属器の所持者であるキョウに報いを受けさせるために、俺達は来たんだ」

忘れはしない。

元々俺達は霊亀であるオストの願いを、そして俺を含めてあの世界の者達の代弁者として俺はキョウに報いを受けさせるんだ。

俺の言葉にラフタリアをはじめ、リーシアやグラス、ラルクにテリスも真剣な表情で頷く。

「キズナ、このことは断言できます。本の眷属器の所持者であるキョウは眷属器の本分から逸脱し、私達の武器が直接キョウの討伐を依頼してきました」

「うん……そんな真似を平然としているなら、さすがにオレも止めないし、武器が告げるのなら受け入れるよ。尚文、オレ達も協力する。だからこれは……グラス達が尚文達にしたことへの償いだとして許してほしい」

「許すも何も、目的は一緒なんだろ？　あんな奴を放置していたら、この世界だってどうなるかわからないぞ？」

おそらく、霊亀から奪った力を馴染ませるためとか言って、今も何かをしているはずだ。

一刻も早く奴に報いを受けさせる。

そう……俺達はまだ何もできてなんていないんだから。

「というわけで坊主！　せっかく、みんな集まることができたわけだし、離ればなれだったキズナの嬢ちゃんも帰ってきたんだから今日くらいはパーッと派手に祝おうぜ！」

パンパンとラルクが手を叩くと、城の連中が何やら慌ただしく準備を始めだした。

見た感じ、祭りの準備か？

手を叩くだけで城の連中が察して動く……ラルクって相当偉い立場なんじゃ？

というか……若という謎の人物がいたよな。まさか。

「おい、若」

ラルクを若と呼んでみる。

すると苦虫を噛み潰したみたいな顔で振り返った。

「い!?　坊主がなぜそれを知っている!?」

「やっぱりお前の事か……ずいぶんと偉い立場にいるようだな」

「好きでいるわけじゃねえよ。俺は自由が好きだ！」

絆の話ってまだ途中だったからラルクが仲間になるまでの経緯は知らないんだよな。

ああ、もしかして王である親が死んで、ろくでなしの王子がこの国を継いだとか？

ラルクの人柄から察するに人望が集まりそうだけどな。

治安は良さそうだから、ラルクの統治は上手くいってるのかな？

部下に優秀なのが集まっているんだろう。カリスマあるみたいだし。

もしかしたら過去に絆が活躍したお陰とかありそうだ。

「というわけだ若、お前が俺を坊主と呼ぶ限り俺はお前を若と呼ぶ」

「わ、わかったぜナオ……フミ」

「ふむ」

すげーもどかしそうにラルクが言った。

その後、すぐにラルクはダーッと叫ぶ。

「やっぱ呼び慣れねえよ！　やっぱナオフミじゃなくて坊主が一番だ！」

「どんな理屈だ！　ふざけんな！　若！」

「知らねえな！　坊主達はゆっくり休んでいてくれよ。準備ができたら呼ぶからよ。キズナの嬢ちゃんもグラスの嬢ちゃんも久しぶりの友好を確かめ合ってくれよな」

とか言いながら、俺達は追い出されてしまった。

……えーっと。

俺はラフタリア達を見つめる。

「ラルクベルクは祝い事が好きですね」

今まで黙って、事の成り行きを見守っていたエスノバルトが口を開いて微笑みかける。

「ですが、今夜くらいは楽しむのも悪いとは思いませんよ。キズナ、お帰りなさい」

「……うん。ただいま、みんな」

涙ぐんだ絆がグラスや周りの人々に向けて告げる。

どれだけの月日をあの無限迷宮に閉じ込められていたのかを俺は知らない。

ずいぶん長い時間、あの場所にいたらしい。

帰れないかもしれないと思う場所から帰還したんだ。

一つ間違えれば俺も同じ状態になっていたかもしれないな。

「お祝い？　フィーロ歌いたい」

「ラフー」

フィーロとラフちゃんがそれぞれ俺の肩に乗っかり、自己主張をする。

それを黙って見て、ラフタリアとリーシアに目を向ける。

「そうですね……少しくらいなら、楽しんでもいいですよね。正直、疲れましたし」

「ふぇえ……長い間離ればなれの友達が再会したんですね！　よかったです」

うん。そうだな。

俺も短い間だったが、ラフタリアと離ればなれで心細く感じた。

気持ちを理解することはできる。

まるで子供のように、絆との再会を喜ぶグラスを横目に俺達は微笑んでいた。

「とりあえず……」

「ど、どうしたのですか？」

俺はラフタリアが持っている剥き身の刀を凝視する。

「絆、再会を喜んでいるところ悪いがラフタリアの刀に鞘くらい付けた方がいいんじゃないか？」

「あ、そうだね」

絆が振り返って俺の方へ一歩踏み出すとグラスが丁度伸ばした手が離れる。

ちょっと名残惜しそうな顔をグラスがしている。なんか凄く違和感があるぞ。

お前……ちょっとレズっけあるのな。

「じゃあ知り合いの店に行こうか。凄腕だから期待しててよ」

ま、本当なら武器屋の親父に鞘とか作ってもらいたいけど、ここは異世界だしな。

絆の知り合いの名工とやらに頼んだ方がいいか。

「わかった」

絆の案内で俺達は城を出て城下町の店へ行くことになった。

「キズナじゃないか！　ひっさしぶりだなー」

絆が案内してくれたのは城下町でもそれなりに繁盛している鍛冶屋だった。

体格が良い……強いて言うなら男勝りの女性だな。

胸に赤い宝石が付いている。確か晶人と言うんだったか？



テリスは額だったが、どうやら宝石のある場所は人によって違うみたいだ。

「行方不明になったってグラスから聞いて心配したんだぞ。グラスもやっと安心できるな。あの時は……そりゃあもうグラスを宥めるのにみんな苦労したよ」

「ロミナ、その話は……」

グラスの奴が必死に遮ろうとしている。

クール系で機械的な奴だと思っていたけど、案外人間的な側面があるのな。

「彼女はロミナ。オレが贔屓にしている鍛冶師なんだよ」

「岩谷尚文だ」

「ラフタリアと申します。以後お見知りおきを」

「フィーロ！」

「ラフー」

「リーシアです。よろしくお願いします」

「初めてのお客さんだね。これからよろしく頼むよ」

鍛冶師と聞いて武器屋の親父を思い出す。

「ここに素材と金を持ってくれば色々と作ってくれるのか？」

「一応はね。ふざけた客は追い出すけどな！」

「俺はふざけた客なのか？」

「いんや？」

ロミナという奴が俺をじろじろと見てから自らの顎を指でなぞって否定する。

「アンタはどっちかというとこういうのが好きな方の人種だろ？」

「……まあな」

武器屋の親父にも見抜かれたが手に入れた素材をオーダーメイドで作る武具というのは一種のロマンがあるんだ。

そういった点が俺が好きな理由ではあるだろう。

「ナオフミ様の性格がわかる人は一目でわかってしまうのですね……少し羨ましいです」

ラフタリアが何やら俺の好みを察知されたのに対して答える。

「何を言っているんだ？」
オーダーメイドとか好きなのは知ってるだろうに。
「で？　私のところへ来たのは久しぶりに顔を見せるため以外にも目的があるんだろ？」
「もちろん。色々と素材が手に入っているから武具を作ってほしいんだ。あと、彼女の刀の鞘を作ってほしい」
絆がボロボロと武器からドロップ品を取り出してはロミナに渡している。
「なるほどねぇ。お？　なかなか良さそうな物があるじゃないか。腕がなるねぇ」
それからロミナはラフタリアの刀に目を向ける。
「ほー……こりゃあ相当な業物だね」
「ああ、刀の眷属器なんだ」
「うわー……厄介な品を持ってきたもんだ。わかったよ。鞘を作ればいいんだね」
「お願いできる？」
「面白い物を見せてくれたしね。絆とは知らない仲じゃないし、こんな名品に使ってもらえるなら私も本望だよ」
「ありがとう」
ロミナはそれからラフタリアの刀のサイズを測って図面を引き始める。
「尚文もロミナに防具とか盾とか作ってもらうといいよ」
「そうだな」
「あ、そうだそうだ。尚文は異世界の鎧を持っていたよね。異世界の装備だからロミナに見せたらいいんじゃないかな？」
「ん？　あー……まあな」
霊亀との戦いでボロボロになってしまった蛮族の鎧+1？のことを言っているのだろう。
分解して仕舞っていたのを俺は荷物袋から取り出してカウンターに置いた。
「ついでにリーシアのも見てもらうか。良い方法があるかもしれないからな」
リーシアが愛用していたフィーロ着ぐるみも一緒に置く。
「着ぐるみが着れなくてリーシアもさぞ心細かっただろうしな」
「ふぇええ」



「別にリーシアさんは着ぐるみを愛用していたわけじゃ……」
と言いながらラフタリアはリーシアを見る。
「……愛用してましたね」
「ふぇえええ!?」
泣いているところを見られなくていいとか言ってたからしょうがないだろ。
「なんだコレ？　機能してない不良品か？」
ロミナが俺とリーシアが装備していた品々を見て呟く。
「そうだ。フィーロ」
「なーに？」
「お前のツメはどうした？」
「えっとね一……気が付いたらなかった」
「はぁ……」
まあ、見世物にされていたってことは、なくしたんだろうな。
持ってたら逃げきれただろうし。
機能していたか非常に怪しいけどさ。
とりあえず盾の中にあった予備のカルマードッグクロウを出す。
出すと同時に、文字化けしたぞ……。
「世界を跨いだせいで機能しなくなったのかもしれん。どうにかできないか？」
「うーん……鎧はどうにかできそうだけど、着ぐるみとツメは使っている素材が見たことがないものだからね」
ロミナが俺の鎧やフィーロ着ぐるみを目利きしながら呟く。
「面白い！　あ、ここにあるのは竜帝の核石だね」
蛮族の鎧の胸辺りに付けられている宝石をロミナが指差す。
「……？　竜帝の核石？　これに何かあったのか？」
「いやね。昔キズナが倒した竜帝の核と同じモノだったから驚いたのよ。異世界でも竜帝がいるんだなって」
「知らん。だが、ドラゴンゾンビを倒した時に手に入れたものだから、同じものかもな」

そういやキズナが召喚されたのはありきたりな竜帝という魔王を倒すためだったか。

既に倒していたのかよ。

「結構便利な加護が付くんだよ？　大事にしなよ」

「鎧が壊れてんだから大事もクソもない。再利用するために来たんだろ」

「ま、そうなるね。この鎧の名前はなんて言うんだ？　読めなくてね」

「蛮族の鎧という名前だった」

「蛮族……アンタは蛮族なのかい？」

「否定できないのが悲しいです」

盗賊の身ぐるみを剥ぐことも多かったもんな。って違うだろ！

「違う！　それを作った親父が教えてくれたんだよ」

まったく、せっかく作ってもらったから使っていたが、ぶっちゃけ名前の印象が悪い鎧だよな。

「面白そうだから色々と弄ってみるよ」

「金はどれくらい掛かる？　足元見るなら話はナシだ」

「ナオフミ様、こちらは頼んでいるのですからもう少し穏便な言い方を……」

「そんなの気にしてどうする。絆の友人だろうと親しき仲にも礼儀は必要だろうが、ぼってくるなら断るのが当たり前だろ」

「そ、そうなのですが……」

ラフタリアと話をしているとロミナがケタケタと笑う。

「商売人だねー。私の知る守銭奴といい勝負じゃない？」

「アルトよりもやり手だと思うよ、尚文は」

「そうなのか？　あの売れるモノなら何でも売る死の商人よりも？」

「薄々は思っていましたがやはりそうなのですか、キズナ？」

なんでグラスまで俺を疑いの目で見てんだよ。

「手腕はぶっちゃけ……上じゃないかな？　アルトはもう少し手間が掛かるような売り方をするけど、尚文は短く、それでいて労力が少なく物を高く売りつける天才だと思う」



「褒めるか貶すかどっちかにしろ」

金が必要だったし、時間が勿体ないから魂癒水を詐欺同然で値上げして売り飛ばしただけだろう。

文句を言われる覚えはない。

というか絆やコイツに死の商人とか呼ばれている奴の顔が見てみたいぞ。

これで奴隷商みたいな顔をしていたら俺は逃げる。

ラフタリアが嘆くように額に手を当ててるじゃねえか。俺は悪くない！

「まあ料金の事は気にしなくていいよ。キズナが関わってるならこっちもできる限り値下げするし、国の援助もある」

「それならいいが……できる限り壊さないでくれよ」

何だかんだで愛着のある鎧なんだ。

俺を信じてくれた武器屋の親父が作ってくれたものなんだしな。

「わかってるって。で、こっちのふざけた衣装は何なんだ？」

ロミナがフィーロ着ぐるみを広げて呟く。

「フィーロふざけてない！」

フィーロがブーイングを飛ばす。

ふざけた生き物とか言われたようなもんか。

まあ、この世界ではなれないフィロリアルクイーン形態を模した着ぐるみだもんな。

「なんで君が怒るの？」

「コイツは世界を渡ったせいで謎の変化をしてしまってな。俺がいた世界じゃ、そんな外見をした魔物だったんだよ」

「ああ、そうなんだ……こんなに可愛らしくて幻想的な外見をしてるのに本性はコレ……」

ロミナが微妙に笑顔を引きつらせて呟く。

気持ちはわかるな。フィーロの正体に関しては確かに思うところは多々あるのだ。

普通にフィロリアルクイーン形態の時、正面に立たれると威圧感あるし。

「どちらにしてもこれが異世界の防具ってんなら少し研究させてほしいな。上手くいけば面白いものが作れるはず

だ」

「……わかった。任せよう」

どうせ現状では使えない装備なんだ。

上手く生まれ変わらせてくれるのなら、ここから先を生き延びるのに役立つことだろう。

最終的に敵の戦力アップに協力しているような気もするが、今はこれが最善手のはずだ。

「他に何か用はあるのか？」

「今のところはこれくらいか？　新しく盾とか作ってくれるならいいが」

ウェポンコピーでコピーすればいいからコピーした後は誰かに持たせるなり売るなりすればいい。

「一度に色々と頼まれても作る順番があるからね。これくらいで一度区切った方がいいんじゃない？」

「同意だな」

「ＯＫ！　久々に腕がなる依頼だね。最近はふざけた依頼が多くて飽き飽きしてたところだからがんばるよ」

鍛冶師にもいろんな悩みがあるんだな。

俺も戻ったら武器屋の親父に何か依頼しよう。

ロミナによって改修された蛮族の鎧とか見せたら興味を惹きそうだし。

異世界で手に入れた鉱石とかその辺りを持っていくだけで驚いてくれそうではある。

職人としての好奇心ってやつ？

で、防具の改修を任せた俺達はロミナの店から出た。

「この後はどうするんだ？」

俺が尋ねたところでパンパンと城の方で花火みたいなのが上がった。

何か城下町の連中もその音に……楽しげな声を出す。

「とりあえず、オレの帰還祝いを楽しんでもらえたらいいかな」

絆の手をぎゅっと握りしめて微笑むグラスが俺に深々と頭を下げる。

「行方知れずだったキズナを助けてくださりどうもありがとうございます。私達はできる限り協力しますので、今日はゆっくりと祭りを楽しんでいってください」

ふむ……まあ、たまにはこういうのも悪くはないか。



メルロマルクとかじゃ何だかんだで気が休まらなかったし、ここは見知らぬ国ではあるが俺を罠に掛ける気はないようだ。

「じゃあ、少しは楽しむとしよう。ラフタリア、フィーロ、ラフちゃんにリーシア。行くぞ」

「はい！」

「何かたのしそー！」

「ラフー」

「ふぇえええ……何をするんですかー」

「屋台荒らしだよ」

「ふぇええ！」

「何を言っているんですか」

「ごっはんー」

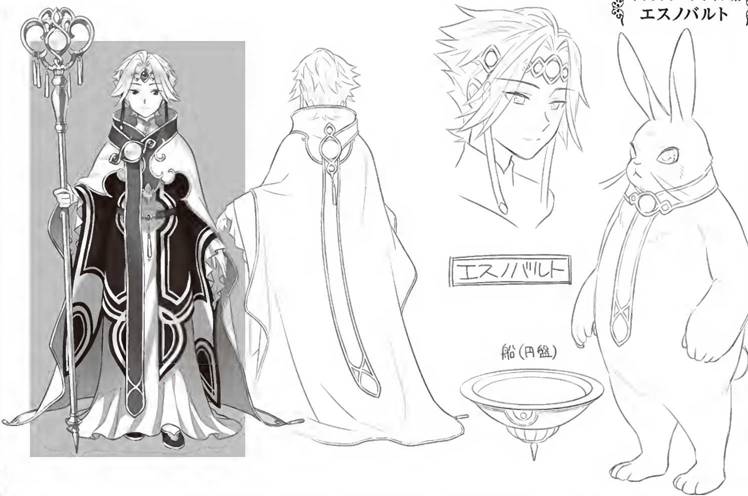
「ラッフー！」

俺達が城下町で始まった祭りに向かって歩いていくと、絆とグラスが見守るように付いてくる。

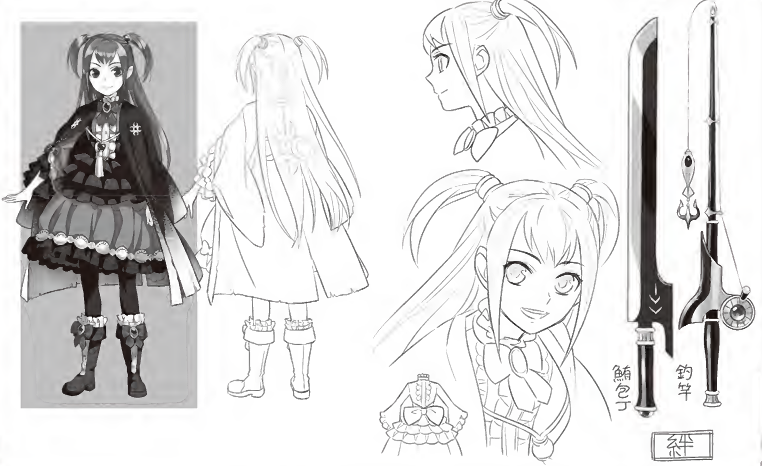
この世界に来た目的であるキョウに報いを受けさせるにはまだ時間が掛かりそうだけど、今日くらいは遊んでも悪くはないだろうと、俺は自分を納得させたのだった。



## キャラクターデザイン案
# エスノバルト



## キャラクターデザイン案
## 風山 絆



著者プロフィール

アネコユサギ
Aneko Yusagi

神奈川県出身。ゲームと読書好きが高じて、小説を書き始める。
「盾の勇者の成り上がり」を執筆し、ネット上に作品を公開。
作品発表後、連日欠かすことなく更新することで病み付きとなる読者が続出し話題となる。2013年8月MFブックスから商業デビュー。
「書籍化によって頂いている期待に応えられるよう頑張ります!」と語る。



企画
株式会社フロンティアワークス　メディアファクトリー
担当編集
堤 由惟/大原康平(株式会社フロンティアワークス)
ブックデザイン
ragtime
イラスト
弥南せいら

本書は小説投稿サイト「小説家になろう」(http://syosetu.com/)初出の作品を加筆の上書籍化したものです。

盾の勇者の成り上がり　8

2014 年 11 月 30 日発行　ver.1.0

著者　アネコユサギ
発行者　三坂泰二
編集長　金田一健
発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒 102-8177
東京都千代田区富士見 2-13-3
03-3238-8745（営業）
編集　メディアファクトリー
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日 10:00～18:00 まで

http://www.kadokawa.co.jp/



本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
ＭＦブックス
盾の勇者の成り上がり　8
発行日　2014 年 11 月 30 日　初版第一刷発行


盾の勇者の成り上がり 8
アネコユサギ
Aneko Yusagi
MFブックス


盾の勇者の成り上がり 8
アネコユサギ
Aneko Yusagi


人物紹介
盾の勇者の成り上がり 8
岩谷 尚文
リーシア
風山 絆
ラルクベルク
フィーロ
テリス
グラス
ラフタリア


「ラフー!」
ピョンと煙の中から
何かが俺に向かって飛びかかってきた。
「な、なんだ!?」
咄嗟に受け止めて
飛びかかってきた物体を確認する。
すると俺に飛びかかってきたのは……
タヌキの様なアライグマの様な何かだった。











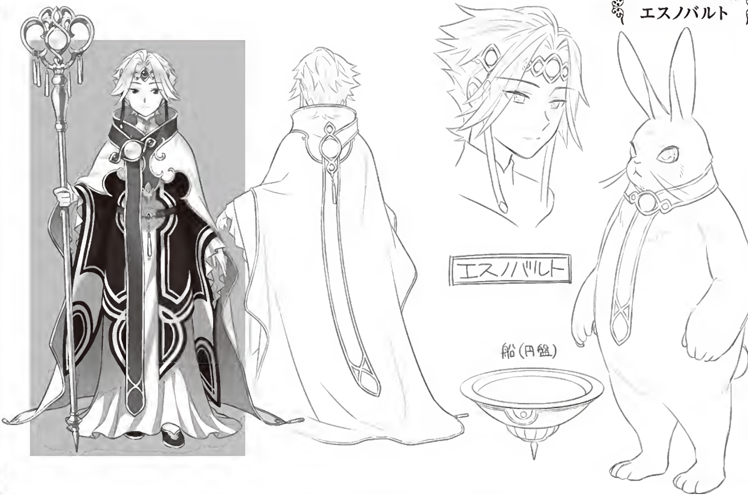








## キャラクターデザイン案
# エスノバルト



キャラクターデザイン案
## 風山 絆

